宮城県文化財調査報告書第194集

中野高柳遺跡 I

―宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書 I ―

平成15年3月

宮城県教育委員会
宮城県土木部

宮城県文化財調査報告書第194集

中野高柳遺跡 I

—宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書 I—

平成15年3月

宮城県教育委員会
宮城県土木部

遺跡全景（北から　奥に七北田川をのぞむ）

2～4区全景（南から）

上段　区画　D・E全景（真上から）
中段右　区画　C全景（真上から）
中段左　鍋蓮弁文青磁碗
下段　青磁皿

序　　文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器が普及し、これらなくしての社会生活は考えられない時代となりました。これらの情報通信技術や情報処理技術はこれからも進歩し、われわれの社会生活や世の中の仕組みまでも変えていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって私たちの行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性がますます増してきております。

歴史は、過去に興った事実の積み重ねから明らかにされていかなければなりません。県内各地域は情報の共有化により均質化しておりますが、特に地域との結びつきの強い埋蔵文化財は各地域の個性溢れる歴史を明確にするために欠くことのできない重要な位置を与えられてきております。しかし、埋蔵文化財は道路や宅地の造成、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は、宮城県土木部との保存協議に基づき、仙台港背後地土地区画整理事業に先立って実施した仙台市中野高柳遺跡の発掘調査のうち、住宅地区の平成12・13年度の調査成果をまとめたもので、背後地関連調査報告書の1冊目にあたります。発掘調査の結果、鎌倉時代から室町時代をへて江戸時代にいたる武士階級の屋敷跡の様子が明らかとなってきております。中野高柳遺跡がある仙台市北東部から多賀城市西部には、中世に「八幡荘」と呼ばれた荘園がありました。本遺跡に屋敷を構えた人々は、八幡荘の管理・運営に深く関わっていたと考えられます。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成15年3月

宮城県教育委員会
教育長　千　葉　眞　弘

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経過……1
第Ⅱ章　遺跡の概観……1
　1．中野高柳遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境……1
　2．周辺の遺跡と歴史的環境……2
第Ⅲ章　調査の方法と経過……6
第Ⅳ章　基本層序……8
第Ⅴ章　発見した遺構と遺物……10
　1．古代……10
　（1）河川跡……10
　（2）第Ⅶ層検出遺構……12
　（3）第Ⅴ層検出遺構……15
　2．中世以降……20
　（1）道路跡……20
　（2）区画溝跡……22
　（3）整地跡……32
　（4）1区……34
　（5）2区……42
　（6）3区……61
第Ⅵ章　まとめ……70

調　査　要　項

遺 跡 名：中野高柳遺跡（宮城県遺跡登録番号　01146）
遺跡記号：ＫＸ
所 在 地：宮城県仙台市中野字高柳
発掘面積：約8,890㎡（1～4区　うち確認調査90㎡）
調査期間：平成12年7月3日～9月29日、平成13年4月9日～11月6日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：平成12年度
　佐藤則之・佐久間光平・高橋栄一・引地弘行
　平成13年度
　村田晃一・相原淳一・天野順陽・千葉直樹
　鈴木朋子（亘理町職員技術研修）・中鉢琢也（山元町職員技術研修）

第Ⅰ章　調査にいたる経過

仙台港背後地土地区画整理事業は、仙台港の増大する物流需要と船舶の大型化・コンテナ化等の輸送革新に対応するため、仙台港に隣接する北側から西側の背後地一帯を対象とし、宮城県はもとより東北地方の国際貿易・交通拠点として、また仙台都市圏の物流拠点・工業生産拠点としての機能を持たせることを目的として平成２年11月16日に都市計画決定され、翌年７月23日に事業計画決定された。

この事業地内には、高柳Ａ遺跡、高柳Ｂ遺跡、竹ノ内遺跡、沼向遺跡（遠藤館跡が重複）、中野曲田板碑、耳取観音堂板碑が存在することから、平成２年度から土地区画整理を担当する県土木側と、文化財保護行政を担当する県文化財保護課（以下、当課とする）および遺跡が位置する仙台市文化財課（以下、市文化財課とする）との間で、事業と遺跡とのかかわりについて協議を重ねた。その一環として平成２年度には上記６遺跡について当課、市文化財課、県国際港都市整備課の３者で改めて分布調査を行い、さらに平成３年度から５年度にかけて当課が高柳Ａ・Ｂ遺跡と竹ノ内遺跡、市文化財課が沼向遺跡の確認調査を行った。この結果、平成５年９月７日の説明会において文化財側が事業とかかわりのある遺跡の範囲を確定し、調査の方法について説明を行った。その際、高柳Ａ・Ｂ遺跡については中野高柳遺跡と一本化し、範囲を若干変更している。

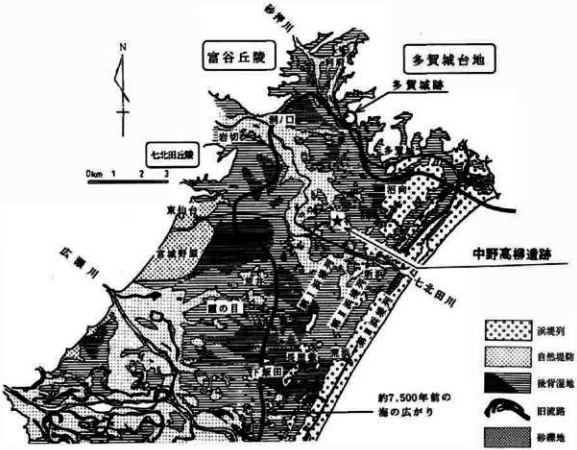
平成６年度からは中野高柳遺跡（担当：当課・市文化財課）、沼向遺跡（担当：市文化財課）について事前調査を開始し、現在も継続中である。中野高柳遺跡の発掘調査は、流通地区（＝都計道路南側）の道路部分について当課が平成６・７年度に担当したのちは、市文化財課が平成７年度から11年度まで調査（中央部の都市計画道路部分、住宅地区（＝都計道路北側）の道路部分、流通地区の事業所建物部分）を行った。平成12年度以降は、関係各課との協議に基づき、再び当課が調査を担当している。

第Ⅱ章　遺跡の概観

１．中野高柳遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境

中野高柳遺跡は仙台市の北東部、宮城野区中野字高柳に位置する（第１図）。遺跡の南１㎞を七北田川が東へ流れ、約３㎞で河口にいたる。範囲は南北に細長く、最も広い部分で測ると南北400m、東西150mほどで、面積は約50,000㎡ある。

遺跡は仙台平野の北端部、七北田川左岸の沖積低地上にある標高３～４ｍの自然堤防に立地する。この沖積低地は、北東を多賀城台地、北西は富谷丘陵、西から南を七北田川の河道に沿った自然堤防、東の海側は３列の浜堤列によって取り囲まれている。さらに、七北田川左岸の自然堤防の一部は洞ノ口付近から東へ分岐し、山王地区にいたる。この自然堤防南の後背湿地部分には、広大な谷地（湿地帯）が広がっていた。内部を流れる七北田川や砂押川は、自然状態においては河道が一定ではなく、



第１図　中野高柳遺跡周辺の地形（松本1995を一部改変）

洪水時には冠水した広大な水域の中で常に流路を変えながら流れていたと考えられている（松本秀明：1995）。遺跡が立地する自然堤防の南への延びが不明瞭となるのは、こうした理由によるものとみられる(注1)。

(注1) 中野高柳遺跡周辺の地形的環境については、松本秀明氏の以下の論考を参考にした。
1994「仙台平野の成り立ち」『仙台市史』特別編１－自然－仙台市史編さん委員会
1995「山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境」『山王遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第167集
1997「山王遺跡の地形学的背景」『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第171集

2．周辺の遺跡と歴史的環境

古代・中世の七北田川は多賀城市新田の南で東に折れ、七ヶ浜町湊浜で海に注いでいたと考えられている。しかし、現在の七北田川の流路沿いも自然堤防が発達していることから、湊浜に注ぐ本流のほかに、現在の流路とほぼ同じ位置を流れて蒲生付近に注ぐ支流があったとみられる（田中則和：1995）。中野高柳遺跡では、平安時代の中頃から江戸時代までの遺構が検出されている。以下、遺跡が機能した時代における周辺の様相について、発掘調査成果を中心に概観する（第２図）。

奈良・平安時代

本遺跡の北４kmの丘陵に、神亀元年（724）陸奥国府多賀城が造られる。多賀城は、10世紀後半に

廃絶するまで律令政府による東北経営の中心施設であり、奈良時代は鎮守府もおかれた。多賀城創建と同時に南東1.2kmの丘陵には付属寺院である多賀城廃寺が造られた。寺名は「観世音寺」と考えられている（多賀城市史編纂委員会：1991）。また、多賀城の外郭南門の傍に建つ「多賀城碑」は、天平宝字6年（762）に多賀城を全面的に改修した藤原恵美朝臣朝獦の顕彰碑と考えられている（阿部・平川編：1989）。多賀城周辺の奈良時代の遺構は、自然堤防上の山王遺跡八幡・伏石・千刈田地区、市川橋遺跡館前地区、新田遺跡後・北寿福寺地区や丘陵部の多賀城廃寺周辺の高崎遺跡井戸尻・弥勒地区などで発見されている。遺構は掘立柱建物跡や竪穴住居跡などで、そのあり方は、平安時代と較べて広い範囲に散在し、閑散としている。

8世紀末頃になると、南北大路、東西大路の2本が多賀城外のメインストリートとなり、10世紀後半まで維持される。その後、南北大路の西側は2段階の整備を経て方格地割が形成され、多賀城を中心とした都市的空間＝町並みが完成した。遺構や遺物のあり方から見た地割内部は、東西大路沿いが国司など高級官僚の邸宅が並び、外側に中・下級役人の屋敷や庶民の住まい、各種の工房などがあったと考えられる。一方、南北大路の東側は西側ほどの街路の整備は行われなかったと考えられている（千葉孝弥ほか：2001）。また、山王遺跡では道路による方格地割の外側で水田の大畦畔が110m間隔で発見されており、多賀城周辺の耕地は条里制に基づいた地割（条里型地割）が施行されていたと考えられる。条里型地割は仙台市内の南小泉（仙台東郊条里跡）・鈎取（山田条里遺構）・飯田・北目・袋原・富沢・市名坂をはじめ、利府町春日地区や名取市高館地区でも認められる（熊谷公男：2000）。

多賀城周辺における都市計画的整備の実施は、方格地割の外側にも影響を及ぼす。周辺集落が増加・拡大するだけでなく、住居が竪穴住居から掘立柱建物へと推移し、それらの中には計画的配置をとるものがあるといった、集落構造そのものにも変化が起きている。こうした多賀城周辺における変革は仙台平野一帯でも認められ、集落や水田域が新たに出現したり、拡大する傾向が認められる（高橋栄一：1995）。

鎌倉・室町時代

鎌倉・南北朝時代の遺跡周辺、現在の仙台市岩切・高砂から多賀城市・利府町にかけての一帯は、八幡荘・南宮荘・田子荘という荘園と高用名と呼ばれた公領に分かれていた。八幡荘は、現在の宮城野区薄生・中野から多賀城市八幡にかけての地域にあったと考えられており、中野高柳遺跡はこの中に位置する。既述のとおり古代・中世の七北田川は多賀城市新田の南を東流しており、その南側が八幡荘と推定されている。この地を治めていたのは、鎌倉時代が平姓陸奥介氏、南北朝時代以降は平姓八幡介（のちに八幡氏と称す）である。室町時代末期になると、八幡氏は岩切城を居城（のち利府城に移る）とした留守氏の家臣となり、八幡荘は留守氏の領地の一部となった（大石直正：2000）。留守氏の家臣団の居館と考えられる屋敷跡は本遺跡のほかに数箇所で確認されているが、これらの屋敷はいずれも16世紀の終わり頃に廃絶する。その理由としては、天正18年（1590）頃に留守氏が伊達政宗によって黒川郡に移転させられ、家臣もこれに従ったためと考えられている。

発掘調査が行われた中野周辺の中世遺跡は、本遺跡のほか仙台市岩切城跡、東光寺遺跡、若宮前遺

第２図　中野高柳遺跡周辺の中世遺跡

	No.	遺跡名	種別	時代		No.	遺跡名	種別	時代
仙台市	1	中野高柳遺跡	屋敷	古代～近世	多賀城市	11	大日南遺跡	集落・屋敷	平安～中世
	2	松森城跡	城館	中世		12	多賀城跡	国府・屋敷	奈良～近世
	3	笠森城跡	城館	中世		13	西沢遺跡	集落	古代～中世
	4	岩切城跡	城館	鎌倉～室町		14	高崎遺跡	集落・都市・屋敷	古代～中世
	5	東光寺遺跡	城館・寺院・石造仏・板碑群	鎌倉～室町		15	留ヶ谷遺跡	城館	古代～中世
	6	洞ノ口遺跡	城館・屋敷・集落・水田	古代、中世、近世		16	八幡館跡	散布地・城館	古代～中世
	7	今市遺跡	集落	平安～中世	七ヶ浜町	17	湊浜囲屋仏	石窟仏	中世
名取市	8	鴻ノ巣遺跡	集落・屋敷・水田	弥生～中世	利府町	18	菅谷館跡	散布地・城館	平安～中世
	9	新田遺跡	集落・屋敷・水田	縄文～中世		19	菅谷磨屋仏	石窟仏	中世
	10	山王遺跡	集落・都市・屋敷・水田	弥生～近世		20	利府城跡	散布地・城館	古代～中世

第1表　中野高柳遺跡周辺の中世遺跡

跡、今市遺跡、鴻ノ巣遺跡、洞ノ口遺跡、多賀城市新田遺跡、山王遺跡、大日南遺跡、八幡館跡などがあげられる。このうち中野高柳・洞ノ口・新田・山王・大日南遺跡などでは、敷地が溝や堀で方形に囲まれた内部から掘立柱建物や塀、井戸などが検出されており、武士階級の屋敷跡と考えられている。また、洞ノ口・鴻ノ巣・今市・新田遺跡では、武士階級の屋敷跡とともに鎌倉時代から室町時代の屋敷跡が数多く発見されており、町並みが形成されていたと考えられる。新田遺跡では、出土陶磁器の中に占める中国陶磁器や瀬戸産施釉陶器などの高級品の割合が高いとの指摘がある。このため仙台市岩切から多賀城市新田にかけての地域は、中世の「多賀国府」とみる見方が強まってきている（入間田・大石編：1992ほか）。文献からみた多賀国府は、14世紀まで機能していたと考えられており、役所や役人たちの居館のほか、河原宿五日市場、冠屋市場という2つの市場があった。そこで商業活動を行った在家が生活し、刀鍛冶や紙漉職人など、さまざまな職人の工房も存在した都市的な場であったと考えられている。

中野高柳遺跡の北東部には永仁4年（1296）に造立された板碑が残る。遺跡で発見された武士階級の屋敷に関わる人の墓、もしくは供養塔とみられる。遺跡周辺の高砂地区では、ほかに36基の板碑が確認されている。また、この地区の北西に隣接する岩切地区は、236基以上の板碑が確認されており、仙台市内最大の板碑密集地となっている（仙台市史編さん委員会：1998）。その6割を超す158基以上が見つかっている東光寺の板碑の年代は、弘安元年（1278）が最も古く、他もほとんどのものが鎌倉時代後半に集中し、多賀国府が国府としての機能が失われるとともに板碑の数が激減する。東光寺の板碑は種子だけのものが多く、墓碑もしくは死者の追善供養のために造立されたと考えられる。これに対して岩切地区の洞ノ口から多賀城市新田字安楽寺にかけては、造立者自身の極楽往生を願って生前に立てられた彼岸念仏板碑が多い。こうしたことから、中世都市「多賀国府」の西に位置する東光寺から羽黒前遺跡にいたる丘陵斜面は、墓地や大規模な追善供養の場であり、これと反対に国府の東は生者のための逆修供養の場であったと考えられている（岡田清一：2000）。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

1．調査の方法

平成12年度からの調査は、住宅地区北西隅に測量原点（第Ⅹ系国家座標）を設置し、それをもとに東西・南北に基準線を延長し、調査区全域に３ｍ方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西・南北方向の距離で表した。

検出した遺構の実測図は原則として１/20の縮尺で作成した。その際、平面図はグリッドを基準にしている。遺構の記録写真は、35㎜のモノクロとリバーサル、６×７㎝モノクロとリバーサルフィルムを使用して行った。また、各年度の調査成果がまとまった段階で、航空写真を撮影した。

2．調査の経過

中野高柳遺跡の発掘調査は遺跡全体が対象となるため、調査面積が広大で多年次にわたると予想された。そこで、平成12年度からの発掘調査では、住宅地区を市文化財課の調査区や既存道路を境にして１～６区に、また、流通地区は既存道路や河川跡あるいは区画溝跡を反映した低地部分を境にしてＡ～Ｅ区に区分した（第３図）。本年度までに県文化財保護課が行った発掘調査の概要は、以下の通りである。

①平成６年度の調査

平成６年度は、都市計画道路「中野線」に平行して南を走る幅12ｍの道路予定地のうち、Ｂ区分の調査を行った。調査面積は1,650㎡である。その結果、13世紀を中心とする武士階級の屋敷跡を検出した。主な遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などである。出土遺物の中には、修験者もしくは僧を墨で表現した「人物墨書礫」がある。

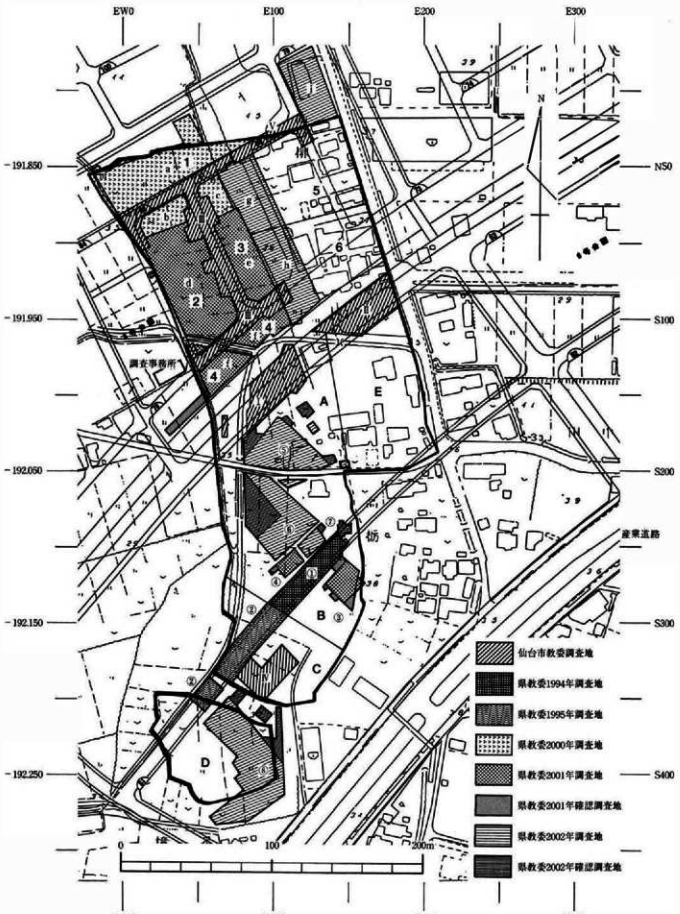
②平成７年度の調査

前年度につづいて道路予定地のうちのＣ区分を調査した。調査面積は950㎡である。主な検出遺構は、南北道路跡の東側溝、区画溝跡、掘立柱建物跡などである。区画溝跡は前年度に確認した屋敷に伴う可能性が考えられた。

③平成12年度の調査

本年度より仙台市教育委員会から発掘調査を引き継ぐこととなり、住宅地区の１区と２区・３区の北端部（計3,260㎡）について調査を実施した。その結果、平安時代と鎌倉時代より新しい遺構を確認した。平安時代の遺構は水田跡と畑跡で、水田・畑から畑へと変遷しており、前者は灰白色火山灰の降灰、後者は河川の氾濫という、自然災害によって廃絶していた。また、住宅地区中央の凹地は平安時代の河川跡であったことが判明した。

鎌倉時代より新しい遺構は、武士階級のものとみられる屋敷跡である。屋敷は幅３ｍの溝によって区画されており、２時期の変遷がある。古い屋敷は一つの区画からなり、新しい屋敷は二つ以上の区画で構成されていることがわかった。また、古い屋敷は遺跡の範囲外に延びており、区画溝の東辺を一部拡張したが、北辺は確認できなかった。



第３図　遺跡の範囲と調査地点

１～６：住宅地区　地区区分名
Ａ～Ｅ：流通地区　地区区分名

調査主体	調査年度	場所（第3図）	調査面積(㎡)	調査主体	調査年度　（次　数）	場所(第3図)	調査面積(㎡)
宮城県	1994	●	1,050	仙台市	1995　（第1次）	I	1,090
	1995	●	950		1996　（第2次）	II	810
	2000	a・b・c	3,260		1997・1998（第3次）	III	2,490
	2001	d～f、③・④	6,400		1999　（第4次）	IV	690
	2002	g～i、●－●	10,570		1999　（第5次）	V	540
	計22,230㎡（うち確認1,240㎡）				計5,620㎡		

第2表　調査年度と調査面積

④平成13年度の調査

発掘調査は本年度から通年（4月～11月）となり、住宅地区は昨年度から継続部分（2・3区）と4区、流通地区ではB区内の2箇所で調査を行った。調査面積は、事前部分が6,240㎡、確認部分が160㎡である。住宅地区では、鎌倉時代の南北道路跡を発見したほか、屋敷跡は新たにもう2時期加わり、4時期となることがわかった。屋敷跡の年代は、古いものから鎌倉時代→室町時代→江戸時代と考えられた。また、平安時代の河川跡は湿地化し、12世紀代にゴミ捨て場となっていたことがわかった。湿地からの出土品には土器・陶磁器・漆製品・木製品・鉄製品・動植物遺体などが出土している。

流通地区は、平成6年度の調査区の両側を2箇所調査した。その結果、鎌倉時代の屋敷に伴う建物、ゴミ穴とみられる大土壙などを検出した。

⑤平成14年度の調査

住宅地区は5・6区西側と5区北東隣接地の2箇所、流通地区はA区、B区で3箇所、D区とD区隣接地の6箇所、あわせて8箇所で調査を行った。調査面積は、事前部分が9,500㎡、確認部分は1,070㎡である。5・6区西側では、湿地と平行して南北に延びる12世紀代の溝跡や近世屋敷の区画溝跡を検出した。5区北東隣接地は遺跡の範囲外であったが、掘削中に遺構が発見されたため急遽調査を実施し、平安時代の畑跡や16世紀代のゴミ穴である大土壙等を確認した。

流通地区ではA・B・D区を縦断する鎌倉時代の南北道路跡を発見した。南北道路跡は住宅地区で確認したものと一連で、遺跡内を縦断（390m）してさらに南北に延びる。B区では、平成6・13年度に確認した鎌倉時代の屋敷跡の北辺と西辺を検出し、屋敷の規模は半町四方であることが判明した。A区では住宅地区の室町時代、江戸時代の屋敷跡の南辺を確認した。それぞれの規模は室町時代が東西半町、南北一町、江戸時代は東西一町以上、南北半町である。

第Ⅳ章　基本層序

表土から遺構面までの基本層序は、大別で7層（Ⅰ～Ⅶ）に分けられた。遺跡内の微地形をみると、住宅地区の中央から流通地区の東縁に河川跡が認められ、その両側に自然堤防が形成されている。河川跡右岸の自然堤防は東西幅が50～60mある。そこでは、河川跡に接続する東西方向の幅の狭い凹地が6条以上あり、さらに住宅地区では東西の凹地をつなぐ南北の凹地が観察できた。発掘調査の結果、

凹地は中世の屋敷を巡る区画溝跡であり、近世以降は、凹地や河川跡の低地を拡張して水田（１ｃ層）に利用したことがわかった。水田で囲まれた高い部分（＝屋敷跡内部）は、主として畑（１ｂ層）に利用されていた。こうした水田や畑によって遺跡全体が削平されており、中世以降の旧表土である第Ⅲ層は、１区東部で確認したのみである。また、第Ⅱ層も河川跡を反映した低地でのみ認められた。

第Ⅰ層

表土である。盛土（ａ層）、畑耕作土（ｂ層：黒褐色～黄褐色シルト）、水田耕作土（ｃ層：褐灰色～灰色粘土）がある。ｃ層の上にはａ層が認められる部分が多い。厚さはａ層が30～70cm、ｂ層は50cm、ｃ層は10～40cmある。

第Ⅱ層

にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトで、調査区東端のＳＤ1100河川跡を中心に認められた。厚さは20cmある。

第Ⅲ層

黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトで、中世以降の旧表土である。１区東部で認められ、他の場所では確認することができなかった。厚さは20cmある。

第Ⅳ層

にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層である。ＳＤ1100河川跡を中心に認められる。氾濫によってＳＦ1303・1333畑耕作痕やＳＤ1151区画溝跡は東端部が壊されている。厚さは河川跡の最も深い部分で260cmあり、層の細分も可能で砂質シルトのほか、砂やシルト、粘土が認められる。

第Ⅴ層

にぶい黄褐色（10YR5/3）シルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層と考えられる。古代のＳＦ1303・1333畑耕作痕が掘り込まれた。また、第Ⅲ層の残りが悪いため、中世より新しい遺構の大部分は、本層および第Ⅳ層で確認している。層の厚さは河川跡右岸の自然堤防の高い部分で10～20cm、１区や２区の西端で自然堤防の縁辺にあたる部分は50cmである。

第Ⅵ層

灰白色火山灰層である。１次堆積（ｂ層）と２次堆積（ａ層）に細分できる。Ⅵｂ層は４区で検出されたＳＦ1334畑耕作痕、１区から２区の自然堤防縁辺で検出されたＳＦ1199水田跡を覆っている。厚さは10cm前後ある。Ⅵａ層は調査区のほぼ全域で認められ、厚さは10～20cmある。

第Ⅶ層

２層に分けられる。Ⅶａ層は灰黄褐色（10YR5/2）シルトで、主として自然堤防部に認められ、ＳＦ1334畑耕作痕が掘り込まれた。厚さは80～90cmある。自然堤防縁辺では、暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土のⅦｂ層が広がっており、そこにＳＦ1199水田跡が営まれている。厚さは10～20cmである。

第Ⅴ章　発見した遺構と遺物

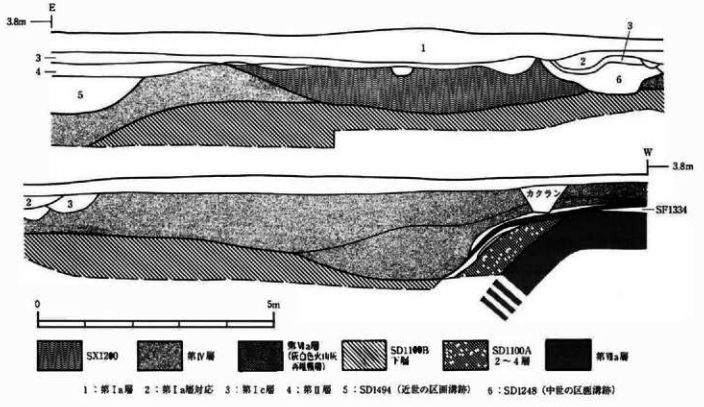
遺構の記述に際しては、今回報告する部分が仙台市教育委員会（以下、市教委とする）の調査区（第３次調査）によって分断されているため、調査区の呼称を北から１～４区とする（第５・10・14図）。

１．古代

（１）河川跡

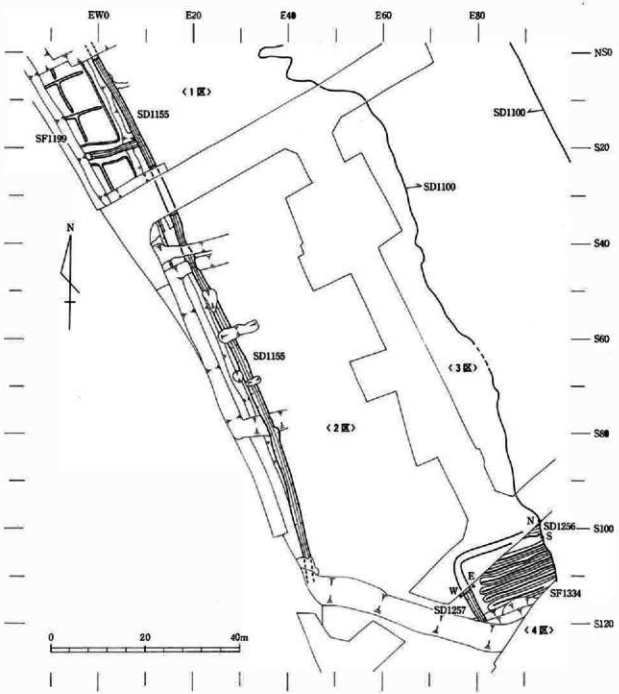
【ＳＤ1100河川跡】（第４図）

１・３・４区の東端で確認した南へ流れる河川跡で、南北150m分を確認した。流通地区の調査でも同一とみられる河川跡を確認しており、４区南端から270m南下したところで西に向きを変えている。堆積土から灰白色火山灰（基本層位第Ⅵ層）を指標として上下で大別できる。灰白色火山灰下の河川跡（ＳＤ1100Ａ）は、東西35m以上、深さは2.6m以上ある。河岸部分の堆積土は４層に大別できる。４層は粗砂、３層はシルト質粘土、２層が砂、１層はシルトを主体とする。灰白色火山灰が降灰した頃の河川跡（ＳＤ1100Ｂ）は、東西34m、深さは2.6m以上ある。下層は粗砂や砂がラミナ状に堆積するが、上層は氾濫を起源とする黄褐色の砂やシルト（基本層序第Ⅳ層）であり、これによって河川は埋没する。その後、中央部分に東西９m、深さ0.9mの湿地（ＳＸ1200）が形成される。



１：第Ⅰa層　２：第Ⅰa層対応　３：第Ⅰc層　４：第Ⅱ層　５：SD1494（近世の区画溝跡）　６：SD1248（中世の区画溝跡）

第４図　ＳＤ1100河川跡断面図（４区南端）



第5図　第Ⅶ層の検出遺構

遺物は、B期堆積土から土師器・赤焼土器・須恵器が出土し、SX1200からは12世紀代のかわらけ・中世陶器・輸入磁器・木製品・漆製品・動物遺体・植物遺体などが出土している(注1)。

(注1) SX1200については、今回報告する屋敷の年代と異なり、同時期の遺構は湿地左岸に想定されることから次回以降に報告する。

（2）第Ⅵ層検出遺構

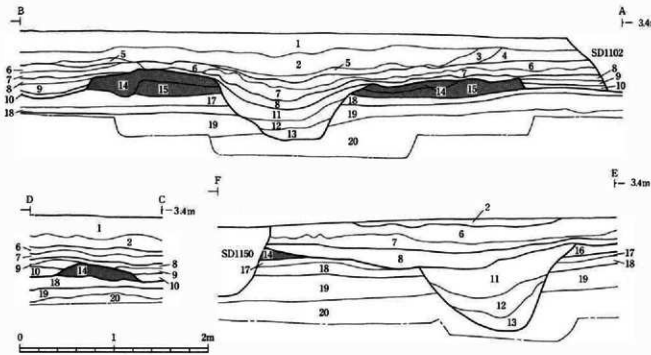
1・2区の西端で水田跡、4区東側で畑跡を検出した（第5図）。

【ＳＦ1199水田跡、ＳＤ1155・1156水路跡】（第6・7図）

1～2区の西端で検出した。耕作域は東端がＳＤ1155水路跡によって区画されており、西は調査区外へ延びる。また、1区ではＳＤ1155に接続して西へ延びるＳＤ1156水路跡がある。耕作土や畦畔が確認できたのは2区北端までで、その南は後世の削平で失われている。ＳＤ1155の西には幅3ｍ前後の大畦が、ＳＤ1156の両側は大畦から西へ延びる幅1.2～1.6ｍの畦が作られている。

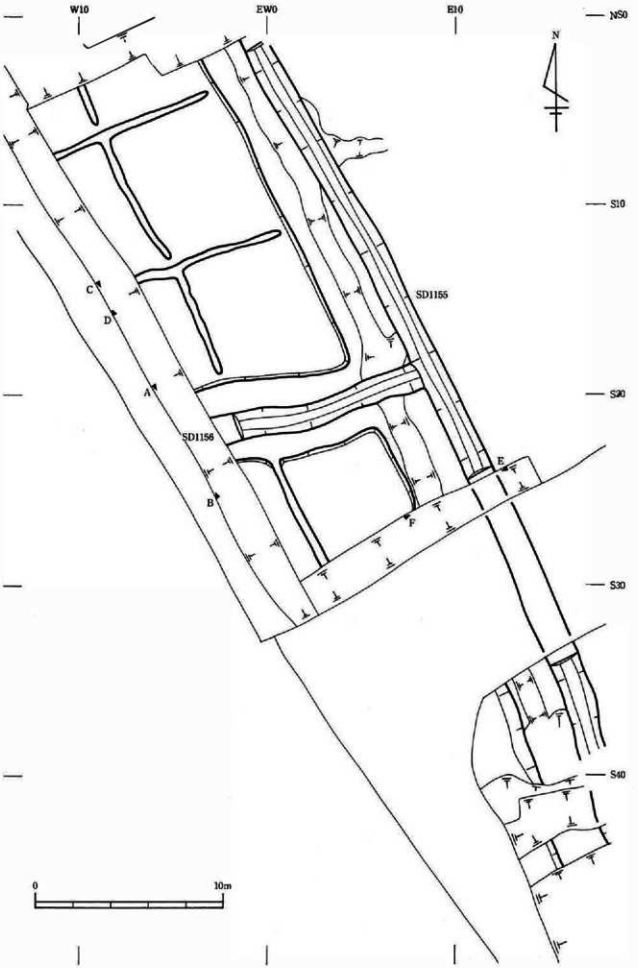
小畦は6.0～7.5ｍ間隔で作られており、小区画の水田跡を8区画確認した。このうち平面形や面積がわかるのは、2区画で、平面形は正方形もしくはそれに近く、面積は40～48㎡ある。水口は小畦と大畦の接続部および小畦の交点で南北方向の小畦南端に設けられており、5ヵ所で確認した。耕作土は暗灰黄色粘土で、厚さは10cmほどあり、下面は凹凸がある。

ＳＤ1155は南北115ｍ、ＳＤ1156は東西13ｍ分を検出し、ともに調査区外へ延びる。ＳＤ1155は上幅1.3～1.6ｍ、下幅0.7～1.0ｍ、深さは1ｍ前後あり、断面形は逆台形、方向はＮ－30°－Ｗである。ＳＤ1156は幅や断面形はＳＤ1155と同じであるが、深さは0.7ｍ前後である。水路跡の堆積土は3層に分けられる。第3層は機能時の堆積土、第2層は廃絶後の堆積土、第1層は灰白色火山灰層である。水路堆積土の第2層は耕作土も覆っており、水田耕作と灰白色火山灰の降灰の間には、ある程度の時



No	土色・土性	混入物など	備　考	No	土色・土性	混入物など	備　考
1	暗色（10YR4/6）砂		基本層序第Ⅴ層	11	灰オリーブ色（5Y5/2）粘土	砂を若干多く含む	SD1155・1156第3層
2	赤褐色（5YR3/6）砂			12	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土	炭化物を多く含む	〃
3	極暗赤褐色（5YR2/4）砂			13	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土	砂を多く含む	〃
4	赤褐色（5YR4/6）砂			14	灰オリーブ色（5Y5/2）粘土		SF1199畦畔構土
5	灰黄褐色（10YR5/2）砂			15	灰色（5Y5/1）粘土		畦畔基本層序における第Ⅵ層相当の部分まで
6	暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト	7種の洪水堆積層	基本層序第Ⅵ1ａ層	16	暗灰黄色（2.5Y4.2）シルト		
7	灰白色（8/）砂	灰白色火山灰層	基本層序第Ⅵ1ｂ層	17	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土		基本層序第Ⅵ2ｂ層
8	暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土		水田・水路機能後の堆積土	18	灰色（5Y5/1）粘土		〃
9	灰オリーブ色（5Y5/2）粘土			19	灰オリーブ色（5Y5/2）粘土		
10	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土		SF1199水田耕作土	20	灰オリーブ色（5Y5/2）砂		

第6図　ＳＦ1199水田跡、ＳＤ1155・1156水路跡



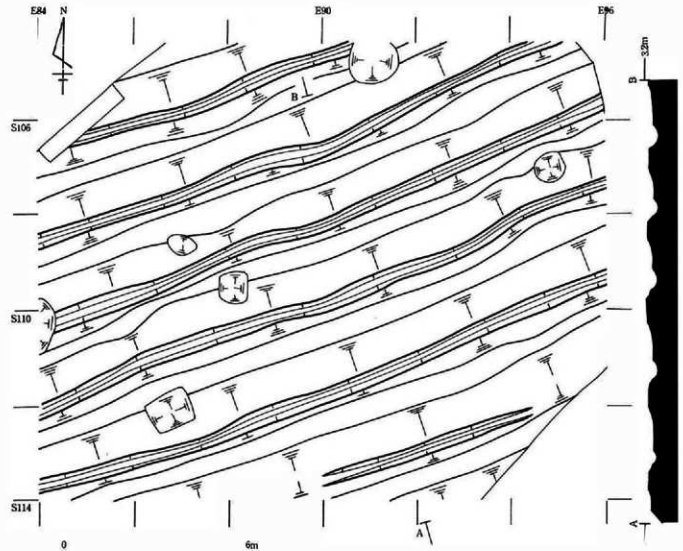
第7図　ＳＦ1199水田跡

No	層位	種別
1	第3層	土師器・坏

器種	残存率	写真図版	登録
坏：ロクロナデ→調整 口13.0 底6	一部	16－3	1

第8図　ＳＤ1155水路跡出土遺物

間差があったと考えられる。ＳＤ1155第３層から体部に墨書が施されたロクロ調整の土師器坏が出土している（第８図）。



No	土色・土性	混入物など	備考	No	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色（10YR4/4）砂質シルト		第１層、基本層序第Ⅲ層に対応	4	オリーブ褐色（2.5Y4/3 礫混シルト）	粗砂をラミナ状に含む	第４層
2	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質シルト		第２層	5	灰黄色（2.5Y7/2）	灰白色火山灰層	第５層
3	灰黄色（2.5Y6/2）シルト	灰白色火山灰を多く含む	第３層	6	オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト		第６層

第９図　ＳＦ1334畑耕作痕、ＳＤ1256・1257区画溝跡断面図

【ＳＦ1334畑跡、ＳＤ1256・1257区画溝跡】（第９図）

４区東側で検出した。耕作域は北端をＳＤ1256溝跡、西端はＳＤ1257溝跡によって区画されている。両者は一連の溝と考えられ、さらにＳＤ1256はＳＤ1100河川跡と接続するとみられる。南への延びは、2002年度の流通地区の調査で確認している（村田・茂木：2002）。したがって、ＳＤ1256・1257はＳＤ1100河川から西へ23m延びて南へ折れ、130m以上続くことがわかった。その内側が耕作域である。耕作痕は上幅30～50cm、下幅20cm前後、深さ20cm前後、溝中心間の距離は1.2～1.5mである。底面は凹凸がある。耕作痕の上部は、壁が崩落して幅が広くなっている。

区画溝跡は上幅1.5m、下幅0.7m、深さは0.8mある。底面は平坦で、断面形は逆台形、方向はＳＤ1257で測るとＮ－25°－Ｗである。第９図に示したＳＤ1256の断面が逆台形とならないのは、河川の接続部分に近いため、他の場所に較べて壁の崩壊が進んだためと考えられる。堆積土は６層に大別できる。第６層は壁の崩落土を主体とする自然堆積、第５層は灰白色火山灰層、第４層は水成堆積、第３層は灰白色火山灰の再堆積層、第２層は自然堆積、第１層は河川の氾濫によって短時間に形成された層（基本層序第Ⅳ層）と考えられる。灰白色火山灰は区画溝や耕作痕の底面近くに堆積しており、火山灰は畑耕作時あるいはそれに近い頃に降灰したと考えられる。

（３）第Ⅴ層検出遺構

１～４区のほぼ全域で畑跡を検出した（第10図）。畑は溝によって画されており、耕作痕も異なることから北部～中央部のＳＦ1303と南端部のＳＦ1333に分けられる。

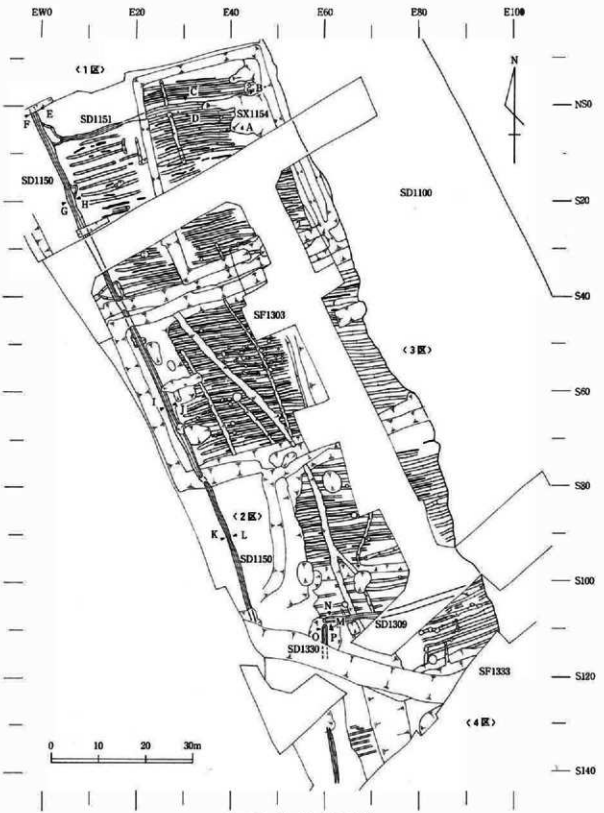
【ＳＦ1303畑跡、ＳＤ1150・1151区画溝跡、ＳＸ1154洪水痕跡】（第11・12図）

１～３区で検出した。耕作域は西端をＳＤ1150溝跡、南端はＳＤ1309溝跡によって区画されている。１区では、ＳＤ1150から東に分かれ、ＳＤ1100河川跡に接続するＳＤ1151溝跡がある。したがって、耕作域は北が調査区外へと延びるが、東はＳＤ1100に面し、西をＳＤ1150、南はＳＤ1309に画され、その内部をＳＤ1151が細分していると考えられる。ＳＤ1151南の耕作域の範囲は、南北110m、東西は後述する河川の氾濫によって壊されているが、53～55mとみられる。ＳＤ1150の南端は攪乱によって壊されており、その先の状況は不明であるが、２区南西端に設けたトレンチでは確認できなかった。

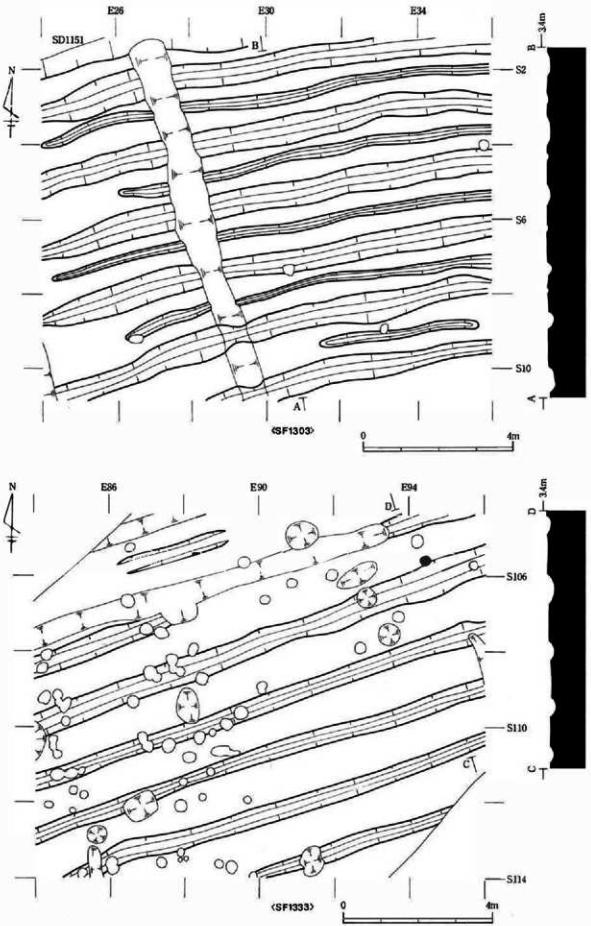
耕作痕は広狭２つのグループがあるが、両者は重複することなく、一定の距離をおいて平行することから同時期とみられる。広いものは上幅60～80cm、下幅40～60cm、深さ20cm、溝中心間の距離は1.5～2.2mである。狭いものは上幅20～40cm、下幅10～30cm、深さ10cm、溝中心間の距離は1.5～2.5mである。双方とも底面は凹凸があり、堆積土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色～褐色のシルトである。

区画溝跡はＳＤ1150が上幅1.0m、下幅0.4～0.6m、深さは0.9mある。底面は平坦で、断面形は逆台形、方向はＮ－25°－Ｗである。ＳＤ1151は幅がＳＤ1150と同じで、深さは0.3mある。底面は平坦で、断面形は逆台形、方向はＥ－15°－Ｎである。堆積土は３層に大別できる。第３層は壁の崩落土、第２層は水成堆積を主体とする層、第１層は河川の氾濫によって短時間に形成された層と考えられる。

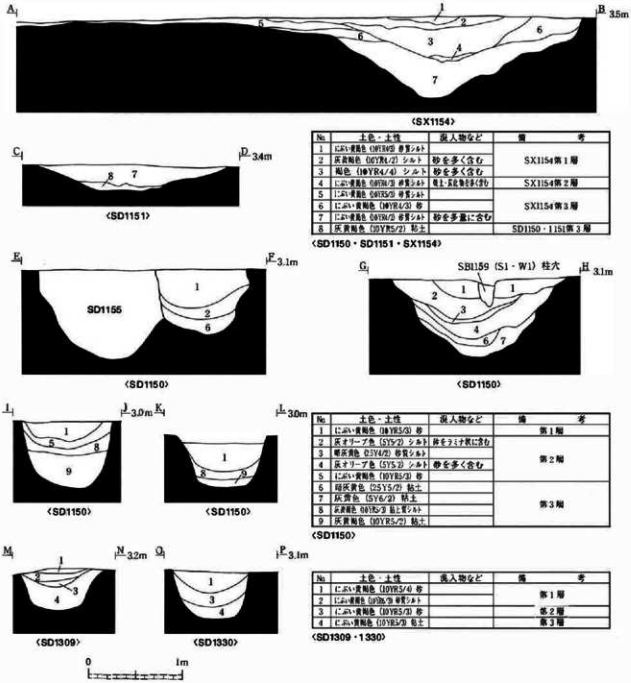
ＳＤ1150・1151は、河川との接続部や互いの接続部のほか、数ヶ所で溝の幅が広くなったり、平面



第10図　第Ⅴ層の検出遺構



第11図　ＳＦ1303・1333畑耕作痕



No	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄色 (10YR4/3) 砂質シルト		SX1154第1層
2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	砂を多く含む	
3	褐色 (10YR4/4) シルト	砂を多く含む	SX1154第2層
4	にぶい黄色 (10YR4/3) 砂質シルト	粗い炭化物を含む	
5	にぶい黄色 (10YR5/3) 砂質シルト		SX1154第3層
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂		
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト	砂を多量に含む	
8	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土		SD1150・1151第3層

〈SD1150・SD1151・SX1154〉

No	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂		第1層
2	灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト	砂をラミナ状に含む	
3	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト		第2層
4	灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト	砂を多く含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂		
6	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土		
7	灰黄色 (5Y6/2) 粘土		第3層
8	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト		
9	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土		

〈SD1150〉

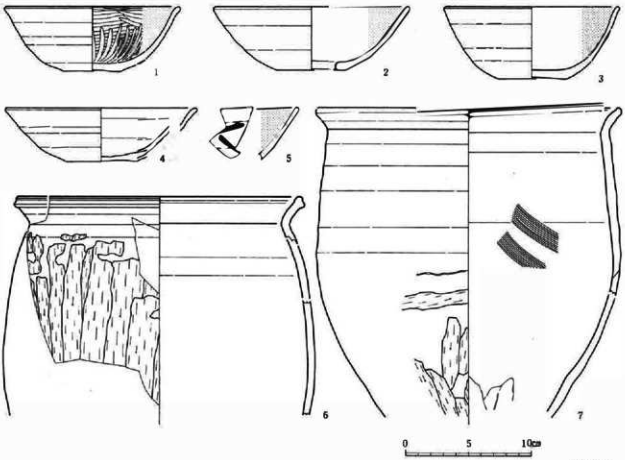
No	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂		第1層
2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト		
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂		第2層
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土		第3層

〈SD1309・1330〉

第12図　ＳＤ1150・1151・1309・1330区画溝跡、ＳＸ1154断面図

形が歪んでいる。これはＳＤ1100の氾濫によるものと考えられる。氾濫の被害は畑跡の東端にも及んでいる。最も壊されている部分はＳＤ1151とＳＤ1100の接続部で、土壙状となっており、ＳＤ1151の底から60cm以上深くなる（ＳＸ1154）。ＳＸ1154の堆積土は３層に大別できる。第３層は河川の氾濫によって短時間に形成された層（基本層序第Ⅳ層）で、その上面に遺物や焼土・炭化物が廃棄されている（第２層）。第１層はその後の自然堆積である。

第２層からロクロ調整の土師器坏（第13図１～３・５）・長胴甕（第13図６・７）、赤焼土器坏（第13図４）が出土している。土師器坏の１点には外面に墨書がみられる（第13図５）。



（単位：cm）

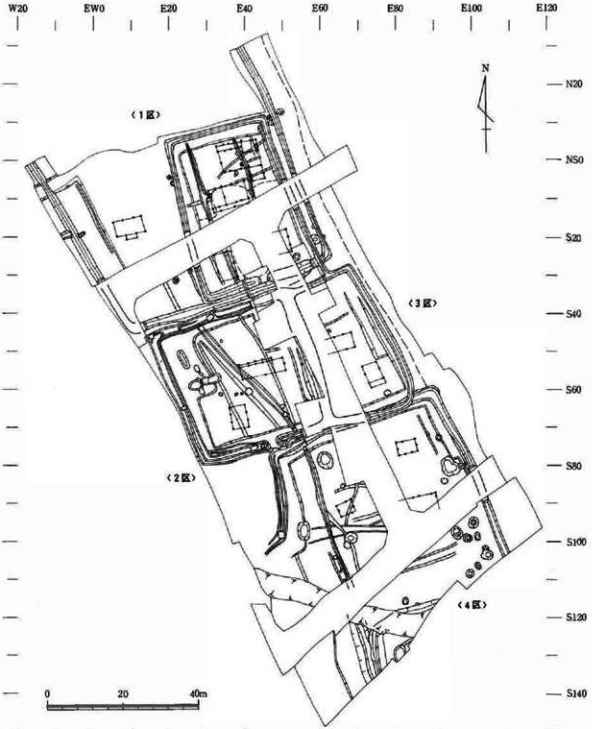
No.	種別	層位	特徴		口径	底径	器高	残存率	写真図版	登録
1	土師器・坏	第2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り	内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.0	4.6	5.1	4/5	16-2	2
2	土師器・坏	第2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り	内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.6)	(5.6)	5.0	1/4		3
3	土師器・坏	第2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り	内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	5.6	5.7	1/4		4
4	須恵土器・坏	第2層	外面：ロクロナデ、回転糸切り	内面：ロクロナデ（ゴテ仕上げ）	(15.4)	5.5	4.2	2/5	16-1	5
5	土師器・坏	第2層	外面：ロクロナデ→墨書［口］	内面：ヘラミガキ→黒色処理	−	−	−	一括		6
6	土師器・甕	第2層	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ	内面：ロクロナデ→指ナデ	(24.3)	−	−	一括	16-4	7
7	土師器・甕	第2層	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ	内面：ロクロナデ→ナデ	(22.8)	−	−	一括	16-5	8

第13図　ＳＸ1154出土遺物

【ＳＦ1333畑跡、ＳＤ1309・1330区画溝跡】（第11・12図）

４区東部で検出した。耕作域は北端をＳＤ1100河川跡と接続するＳＤ1309溝跡、西端はＳＤ1330溝跡によって区画されている。両者は接続せず、土橋状に掘り残された部分がある。ＳＤ1330は南へ33m延びる。したがって、耕作域の範囲は南北33m以上、東西は河川の氾濫によって壊されているが、40mほどとみられる。耕作痕は上幅40～60cm、下幅30cm前後、深さ10cm前後、溝中心間の距離は1.2～1.4mである。底面は凹凸があり、堆積土は地山ブロックを含むオリーブ褐色砂質シルトである。

区画溝跡は上幅0.8～0.9m、下幅0.6m、深さは0.8mある。底面は平坦で、断面形は逆台形、方向はＳＤ1330がほぼ真北を向き、ＳＤ1309はＥ－10°～25°－Ｎである。堆積土は３層に大別できる。第３層は壁の崩落土、第２層は水成堆積、第１層は河川の氾濫によって短時間に形成された層（基本層序第Ⅳ層）と考えられる。



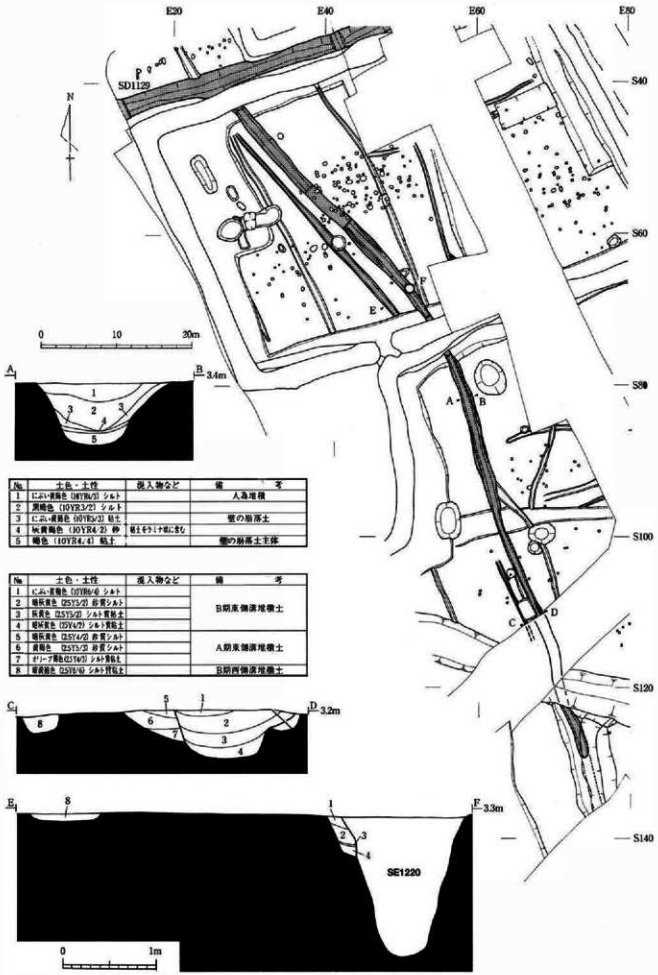
第14図　1～4区で検出した中・近世遺構

2．中世以降（第14図）

中世以降の記述は、道路跡や区画溝跡、整地跡など複数の調査区にまたがるものから行い、個別の遺構は調査区ごとに述べることとする。

（1）道路跡

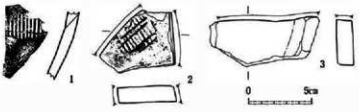
【SX1600道路跡】（第15図）



No.	土色・土性	混入物など	備　　考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		人為堆積
2	黒褐色 (10YR3/2) シルト		
3	にぶい褐色 (10YR5/3) 砂土		壁の崩落土
4	灰黄褐色 (10YR4/2) 砂	砂土をラミナ状にまじる	
5	褐色 (10YR4/4) 粘土		壁の崩落土主体

No.	土色・土性	混入物など	備　　考
1	にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト		B期床張遺構構土
2	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト		
3	灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土		
4	暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土		
5	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト		A期床張遺構構土
6	黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト		
7	ダーク黄色 (2.5Y4/3) シルト質粘土		
8	暗褐黄色 (2.5Y3/4) シルト質粘土		B期西張遺構構土

第15図　ＳＸ1600道路跡



No.	出土層位	種別	器種	残存
1	【東側溝埋積土】	陶器	壺	底部
2	【東側溝埋積土】	陶器	壺	底部
3	【東側溝埋積土】	陶器	壺	底部

種	類	写真図版	登録
外面：ナデ→押印（重弧状）		16－6	9
外面：ナデ→押印（重弧状）	破片を砥石に転用	16－11	10
破片を砥石に転用		16－12	11

第16図　ＳＸ1600道路跡出土遺物

２区から４区西部にかけて検出した南北道路跡である。南北110m分を検出した。東側溝はＳＤ1129区画溝跡と接続する。ＳＫ1224・1300土壙、ＳＤ1238・1263溝跡より新しく、ＳＤ1140・1208・1209・1288・1289区画溝跡、ＳＢ1361～1366建物跡、ＳＸ1254竪穴遺構、ＳＥ1220・1258井戸跡、ＳＤ1246・1284溝跡より古い。ＳＸ1600は流通地区の調査でも確認しており、総長は390m以上で南は遺跡外へ延びる（村田・茂木：2002）。方向は２区南半から４区でＮ－20°－Ｗ、２区北半でＮ－40°－Ｗほどである。

路面の両端は素掘りの側溝を伴うが、西側溝は東側溝に較べて幅が狭く浅いため、２区南半や４区で確認できなかった。東側溝は２時期の変遷（Ａ→Ｂ）がある。路幅は東側溝Ｂと西側溝の心々で測ると、3.0～4.5mである。西側溝は上幅0.5～1.1m、下幅0.3～0.8m、深さは0.2mある。断面は逆台形である。堆積土は３層に分けられるが、いずれも自然堆積である。東側溝は上幅1.0～1.5m、下幅0.6～0.9m、深さは0.7mある。断面は逆台形である。堆積土の細分は場所によって異なるが、自然堆積ののち、最上層は人為的に埋め戻されている。側溝堆積土から常滑産甕や砥石が出土しており（第16図）、うち甕の破片２点は砥石に転用されている（２・３）。

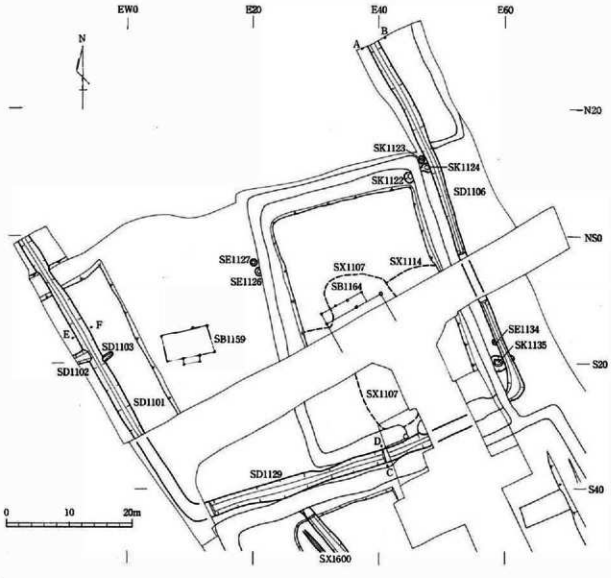
（２）区画溝跡

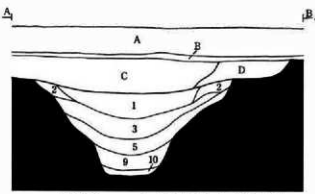
【ＳＤ1101・1102・1103・1106・1129区画溝跡】（第17図）

１区と２区北部で検出した。ＳＤ1101・1106・1129は、東西53～62m、南北58m以上の範囲を区画する溝跡で、ＳＤ1101は西辺、ＳＤ1106は東辺、ＳＤ1129は南辺にあたる。ＳＤ1102・1103はＳＤ1101に接続する溝跡である。また、ＳＤ1129にはＳＸ1600道路跡東側溝が接続しており、この部分では２時期の変遷が認められる。ＳＥ1134井戸跡、ＳＫ1124・1135土壙、ＳＤ1109・1131・1132溝跡より新しく、ＳＤ1105・1140区画溝跡より古い。

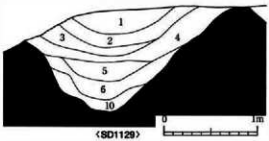
ＳＤ1101・1106・1129は上幅1.2～26m、下幅0.6～1.2m、深さは1.1mある。断面は上部が大きく開く逆台形である。堆積土の細分は場所によって異なるが、自然堆積ののち、最上層は人為的に埋め戻されている。ＳＤ1102はＳＤ1101に接続して西へ延びる。上幅1.5～20m、下幅0.7～1.0m、深さは0.7mある。断面は上部が大きく開く逆台形である。堆積土は５層に大別され、第５層が水成堆積、第１～４層は自然堆積とみられる。ＳＤ1103はＳＤ1101から東へ1.8m分確認した。上幅0.6m前後、下幅0.3m前後、深さは0.2mある。断面は皿状で、堆積土は自然堆積である。

ＳＤ1101・1106堆積土から常滑産甕（第18図１～４）、ＳＤ1129第４層から卒塔婆とみられる木簡が出土している（第18図５）（高橋・吉野：2001）。

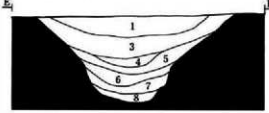




〈SD1108〉　A・B：第Ia層　C・D：第Ic層



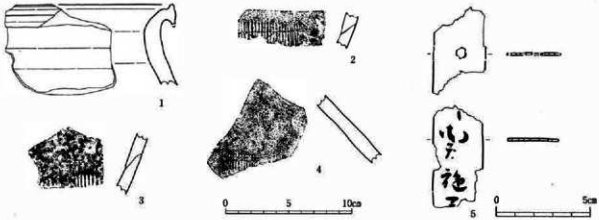
〈SD1129〉



〈SD1101〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト		第1層
2	褐灰色 (10YR4/1) シルト		
3	黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト		第2層
4	灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト		
5	灰褐色 (2.5Y3/1) 粘土		第3層
6	青灰色 (5.3Y4/1) 粘土		
7	黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土	砂を含む	第4層
8	黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土	砂を多量に含む	
9	黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土	砂を多量に含む	第5層
10	灰色 (10Y5/1) 砂		

第17図　ＳＤ1101・1106・1129区断跡



No.	遺構・出土層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	SD1106・堆積土	陶器	壺	愛産	東播磨系5～6型式期（13世紀中葉～後半）	17－1	12
2	SD1106・堆積土	陶器	壺	愛産	外面：ナデ→押印（「圏状」＋「×」）	17－7	13
3	SD1106・堆積土	陶器	壺	愛産	外面：ナデ→押印（「圏状」）	17－5	14
4	SD1101・堆積土	陶器	壺	愛産	外面：ナデ→押印（「圏状」）	17－4	15
5	SD1129・第4層	木簡			「仁　二　海士」　（101）×28×1㎜　081型式	19－2	16

第18図　ＳＤ1101・1106・1129区画溝跡出土遺物

【ＳＤ1223・1229・1230・1231・1248・1249・1289区画溝跡】（第19・20図）

２区南部と４区で検出した。２時期の変遷（A→B）がある。B期の溝はＳＤ1231・1248・1284・1289で、東西40～50m、南北62m以上の範囲を区画し、西辺は中央が西へ張り出す。ＳＤ1231は北辺から西辺北側、ＳＤ1248は東辺、ＳＤ1289は西辺南側にあたる。南辺は流通地区の調査で確認（ＳＤ1650）しており、区画の南北長は105mほどである（村田・茂木：2002）。A期の溝はＳＤ1223・1229・1230・1249で、この時期の区画の東西長は63m以上ある。ＳＸ1600道路跡、ＳＸ1200湿地跡、ＳＫ1302土壙より新しく、ＳＤ1140・1237・1288区画溝跡、ＳＫ1234・1242土壙、ＳＤ1284溝跡より古い。また、ＳＤ1248とＳＸ1260遺構は溝で接続している。

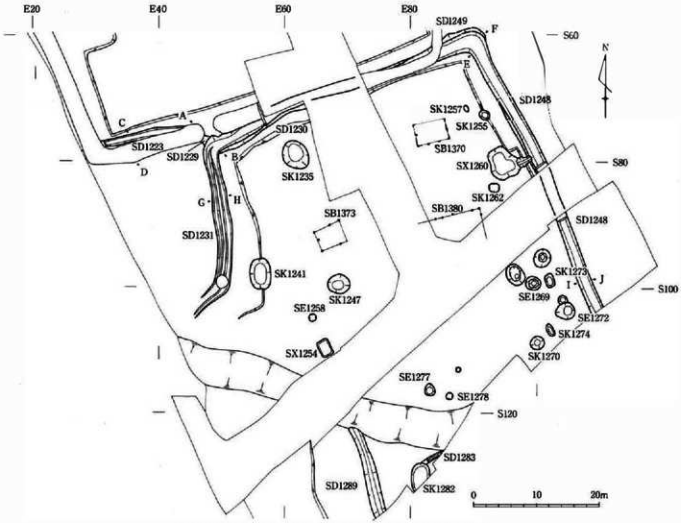
ＳＤ1231・1248は上幅2.0～2.5m、下幅0.8～1.9m、深さは0.6mある。断面は上部が大きく開く逆台形である。ＳＤ1231は底面の両端付近が一段低い。堆積土の細分は場所によって異なるが、北辺は自然堆積ののち、最上層は人為的に埋め戻されている。

ＳＤ1230・1249は古い時期の区画溝跡である。ＳＤ1223・1229はこれらと一連と考えられ、古い時期の北辺はクランク状に折れて西へ延びる。したがって、この時期のＳＤ1223は上幅1.3m、下幅0.9m、深さは0.3mある。断面は逆台形である。堆積土は２層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

ＳＤ1248の堆積土から常滑産甕（第21図１）や砥石（第21図２）、確認面から白磁碗が出土している。

【ＳＤ1105区画溝跡】（第22・23図）

１区東部と２区北部で検出した。２時期の変遷（A→B）がある。A期の溝はほとんどがB期溝と重複しており、わずかに南辺東側で確認できるのみである。A期の溝で囲まれた区画は、北辺が24m、南辺29m、東辺38m、西辺で40mあり、南辺がやや長い方形である。南辺中央部には幅1.8mの土橋（ＳＸ1197）が設けられている[註1]。B期は東辺の溝が西へ折れず、南へ５m延びてＳＤ1142に接続する。ＳＤ1106・1129区画溝跡、ＳＥ1126井戸跡、ＳＫ1122・1124・1135土壙、ＳＤ1109溝跡より新しい。



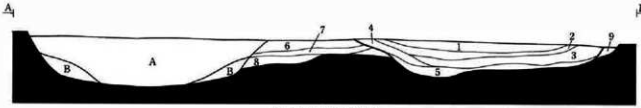
第19図　ＳＤ1223・1230・1231・1248・1289区画溝跡

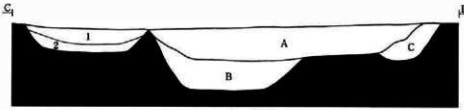
Ｂ期の溝は東・西・北辺が上幅1.2～1.8m、下幅0.4～0.8m、深さは0.8mある。断面は逆台形である。これに対し、南辺は上幅2.3～2.7m、下幅0.4m、深さは1.2mある。断面は上部が大きく開く逆台形である。Ａ期の溝は上幅2.1m、下幅0.8m、深さは0.7mある。Ａ期は自然堆積ののち、人為的に埋め戻されている。Ｂ期の堆積土は４層に大別できる。第４層が水成堆積、第２・３層は自然堆積、第１層は人為的な埋土と考えられる。Ｂ期の堆積土から常滑産甕（第24図４）が出土している。

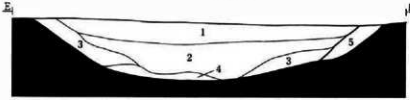
（註1）SX1197土壙跡は、仙台市教委の調査で確認したものであるが、平成12年度の調査で2区を一部拡張して再確認したため、ここに掲載した。

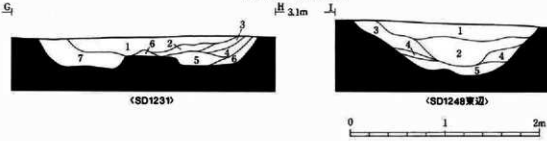
【ＳＤ1208・1209・1237区画溝跡】（第22・23図）

２区北部のＳＤ1140区画溝跡底面で検出した。２時期の変遷（Ａ：1209→Ｂ：1208・1237）がある。Ｂ期の溝で囲まれた区画は、北辺と南辺が25.1m以上、西辺で34mあり、南辺は南西隅から16mのところで幅2.5mの土橋（ＳＸ1399）が設けられる。Ａ期の溝は区画北西隅付近で確認でき、残りが悪いが北西隅から1.5mの地点で、幅４mの土橋（ＳＸ1398）が設けられたとみられる。Ａ・Ｂ期とも東辺は不明であるが、同位置で重複するＳＤ1140の東辺がＳＤ1400とみられることから、ほぼ同じ位置に東辺が想定される。その場合、北辺の長さは35m、南辺は32mとなる。ＳＸ1600道路跡、ＳＤ1129区画溝跡、ＳＤ1221溝跡より新しく、ＳＤ1140区画溝跡、ＳＥ1210・1212・1226井戸跡、ＳＫ1213・1225・1234土壙より古い。









No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）シルト	地山ブロックを含む	SD1231第1層（人為堆積）
2	黒褐色（10YR2/2）粘土		SD1231第2層
3	黒褐色（10YR3/1）粘土		
4	黒褐色（10YR3/1）粘土	炭をラミナ状に含む	
5	褐灰色（10YR4/1）粘土	地山ブロックを多く含む	
6	灰黄褐色（10YR4/2）シルト		SD1229第1層
7	褐灰色（10YR4/1）粘土	地山ブロックを含む	SD1229第2層
8	褐灰色（10YR4/1）シルト		
9	黒褐色（10YR3/1）粘土		SD1230堆積土
A			SD1140堆積土
B			SD1299堆積土

〈SD1229・1230・1231〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト		SD1231第1層
2	赤褐色（10YR5/6）粘土質シルト	炭化物を含む	SD1231第2層
3	炭化物層		
4	にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト		SD1231第3層
5	褐灰色（10YR4/1）粘土	水成堆積層	
6	褐灰色（10YR4/1）粘土	地山ブロックを多く含む	
7	褐灰色（10YR4/1）粘土	水成堆積層	

〈SD1231〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	褐灰色（10YR4/1）シルト		SD1223第1層
2	にぶい黄褐色（2.5Y6/3）シルト	褐灰色粘土を含む	SD1223第2層
A			SD1140堆積土
B			SD1208堆積土
C			SD1309堆積土

〈SD1223〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	褐灰色（10YR4/1）粘土質シルト		SD1248第1層
2	黒褐色（10YR3/2）粘土		SD1248第2層
3	暗褐色（10YR3/3）シルト	地山ブロックを多く含む	SD1248第3層
4	黒褐色（10YR3/1）粘土	炭をラミナ状に含む	
5	にぶい黄色（10YR6/3）シルト質砂		SD1249堆積土

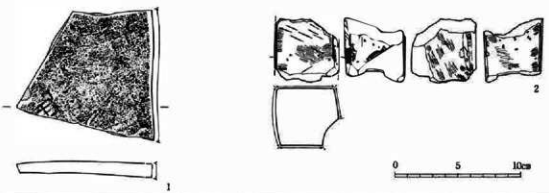
〈SD1248・1249北東隅〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色（10YR2/3）粘土質シルト	褐灰色砂質シルトを含む	SD1248第2層
2	黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト		
3	灰褐色（10YR3/2）砂質シルト		SD1248第3層
4	黒色（10YR2/1）砂質シルト		
5	黒色（10YR2/1）砂質シルト	地山ブロックを含む	

〈SD1248東辺〉

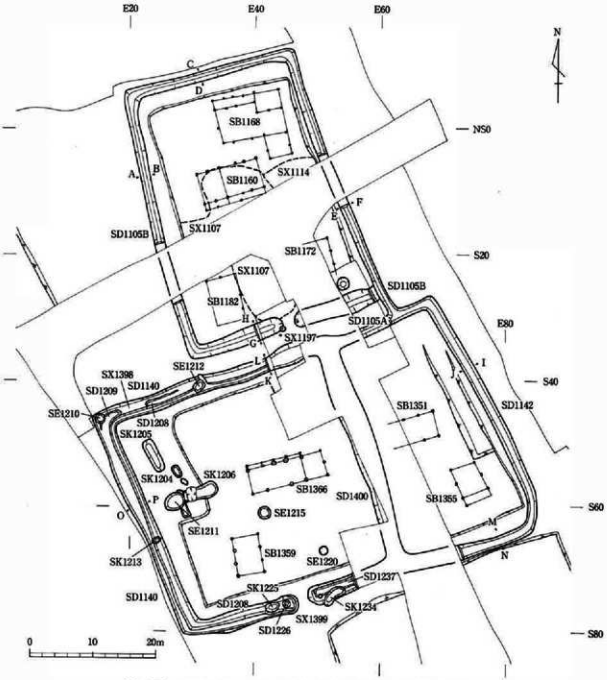
第20図　ＳＤ1223・1230・1231・1248・1249区画溝跡断面図

Ｂ期の溝は残りの良い南辺でみると上幅1.5m、下幅0.9m、深さは0.7mある。北辺や西辺では下幅0.5m、深さはＳＤ1140の底面から0.3mある。Ａ期の溝は区画北西隅付近で確認できる。上幅1.0m前



No.	遺構・出土層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	SD1248・底面	陶器	甕	常滑	外面：ナデ→押印（櫛状）　破片を砥石に転用	17－9	17
2	SD1248・埋積土	石製品	砥石		幅：5.1cm　厚さ：4.6cm　【細粒凝灰岩】	18－16	18

第21図　ＳＤ1248区画溝跡出土遺物



第22図　ＳＤ1105・1140・1142・1208・1209・1237区画溝跡

後、下幅0.6～0.8m、深さはＳＤ1140底面から0.3mある。断面は逆台形である。堆積土は両時期とも残存する下層部分については自然堆積である。Ａ期の底面から木製品が出土している（第24図８）。

【ＳＤ1140・1142・1400区画溝跡】（第22・23図）

ＳＤ1140は、２区で検出した北・西・南を「コ」字状に巡る区画溝跡である。一方、ＳＤ1142は３区で検出した北・東・南を「コ」字状に巡る区画溝跡である。両者は、北辺と南辺の位置が一致し、断面形や堆積土が共通することから、一連の溝と考えられる。東西54～56m、南北34～37mの範囲を区画しており、ＳＤ1142は北東隅から４m西でＳＤ1105B区画溝跡と接続する。また、ＳＤ1140の南辺は南西隅から16mのところで幅2.5mの土橋（ＳＸ1399）が設けられる。

ところで、２区の東端にはＳＤ1400南北溝跡がある。ＳＤ1400は部分的な検出にとどまるが、ＳＤ1140と一連の溝とみた場合、ＳＸ1399は区画南辺のほぼ中央に位置する。したがって、ＳＤ1140・1142で囲まれた区画は、ＳＤ1400区画溝跡によって細分が可能であり、それぞれの区画の規模は、南北は変わらず、東西が西（ＳＤ1140・1400）が、32～35m、東（ＳＤ1142・1400）は16～20mとなる。

ＳＸ1600道路跡、ＳＤ1129・1208・1209・1223・1229・1231・1237・1248区画溝跡、ＳＥ1210・1212・1226井戸跡、ＳＫ1213・1225・1234土壙、ＳＤ1221溝跡より新しい。溝は北辺・西辺・南辺西側で上幅2.1～2.9m、下幅1.2～2.0m、深さは0.4～0.6mある。東辺や南辺東側は上幅1.8m、下幅1.0m、深さは0.5～0.6mある。断面は逆台形である。堆積土は４層に大別でき、第４層が水成堆積、第２・３層が自然堆積、第１層は人為的な埋土と考えられる。

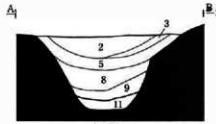
底面付近から青磁皿（第24図１）、下層の自然堆積土から常滑産甕（第24図３）・茶臼下臼（第24図13）・砥石（第24図９・11）・磨面をもつ石、上層の埋土から瓦質土器摺鉢、堆積土から白磁碗（第24図２）・羽口・粉挽臼上臼（第24図12）・粉挽臼・石鉢（第24図10）・凹みや磨面といった使用痕をもつ石・鉄滓、確認面から青磁・鉄製工具斧（第24図７）などが出土している。他に上記に混じって古代の須恵器・赤焼土器・平瓦（第24図５・６）が出土している。

【ＳＤ1275・1288区画溝跡】（第25図）

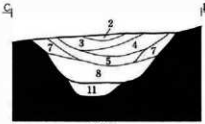
４区のＳＤ1275とＳＤ1288は、現代の水路によって分断されているが本来は一連の溝跡とみられる。住宅地区では区画の一部を検出したが、流通地区で南辺を確認しており、南北60m、東西17m以上の範囲を区画している（村田・茂木：2002）。ＳＸ1600道路跡、ＳＤ1284・1289区画溝跡、ＳＥ1275井戸跡、ＳＫ1285・1290土壙より新しく、ＳＤ1291Ａ・Ｂ溝跡より古い。

西辺のＳＤ1288は２時期の変遷（Ａ→Ｂ）があり、Ｂ期は上幅が推定で2.0m、下幅1.0m、深さは0.6mある。Ａ期は上幅が2.5m以上、下幅2.0m、深さは0.7mある。堆積土の細分は場所によって異なるが、いずれも自然堆積である。

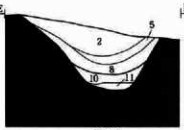
Ｂ期堆積土から志野丸皿（第26図４）・近世陶器・染付急須蓋（写真図版17－17）・瓦質土器火鉢（第26図７）・瓦質土器擂鉢（第26図６）・かわらけ・常滑産甕（第26図５）、Ａ期堆積土から鎬連弁文青磁碗（第26図１）・灯明皿（第26図２・３）・瓦質土器火鉢・常滑産甕などが出土している。他に上記に混じって古代の須恵器・赤焼土器・土師器が出土している。



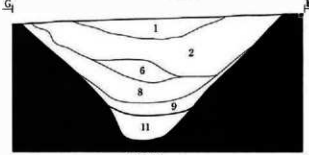
（西辺）



（北辺）



（東辺）

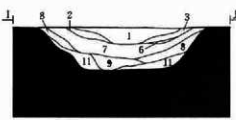


（南辺）

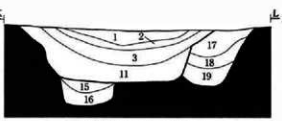
No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰褐色（10YR3/2）シルト	地山ブロック多く含む	B期第1層（人為堆積）
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト	地山ブロックを多く含む	
3	黒褐色（2.5Y3/1）粘土		B期第2層
4	黒褐色（2.5Y3/2）粘土		
5	黒褐色（2.5Y3/1）粘土質シルト		
6	褐灰（10YR4/1）粘土質シルト		

No.	土色・土性	混入物など	備　考
7	灰黄色（2.5Y6/2）粘土		里の脇層土　B期第3層
8	黄灰色（2.5Y4/1）粘土	砂をラミナ状に含む	B期第4層
9	黄灰色（2.5Y5/1）粘土	砂をラミナ状に多く含む	
10	黒褐色（2.5Y3/2）砂質シルト	砂をラミナ状に含む	A期堆積土
11	灰黄色（2.5Y6/2）粘土		

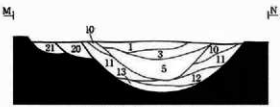
（SD1105A・B）



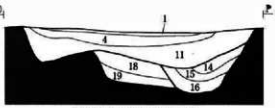
（SD1142東辺）



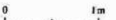
（SD1140・1208・1209北辺）



（SD1142南辺・1248・1249）



（SD1140・1208・1209西辺）

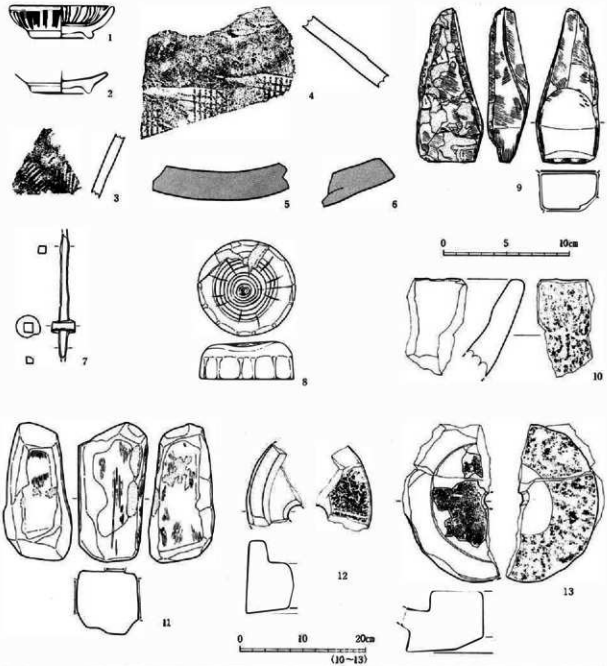


No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR5/3）砂	地山ブロック多く含む	SD1140・1142第1層（人為堆積）
2	黄灰色（2.5Y4/1）粘土		
3	暗褐色（10YR3/3）粘土	砂を多く含む	
4	黒褐色（10YR3/2）シルト		
5	黒褐色（10YR3/2）粘土		SD1140・1142第2層
6	炭化物層		
7	黒褐色（10YR3/2）粘土	砂を含む	
8	黒褐色（10YR3/2）粘土	地山ブロック多量に含む	
9	灰黄褐色（10YR4/2）粘土		
10	褐灰色（10YR5/1）シルト質粘土	砂をラミナ状に含む	SD1140・1142第3層
11	にぶい黄褐色（10YR4/3）砂	粘土をラミナ状に含む	

No.	土色・土性	混入物など	備　考
12	灰黄褐色（10YR4/2）粘土		SD1140・1142第3層
13	灰黄褐色（10YR4/2）粘土	砂をラミナ状に含む	SD1140・1142第4層
14	灰黄褐色（10YR5/2）粘土質シルト		
15	黒褐色（2.5Y3/2）粘土		SD1208堆積土
16	オリーブ褐色（5Y4/3）粘土	砂を含む	
17	黄灰色（2.5Y6/1）粘土		
18	黄灰色（2.5Y5/1）粘土		SD1209堆積土
19	黒褐色（2.5Y3/1）粘土	砂をブロック状に含む	
20	灰黄褐色（10YR4/2）粘土	地山ブロックを含む	SD1248堆積土
21	にぶい黄褐色（10YR4/3）砂	粘土をラミナ状に含む	SD1249堆積土

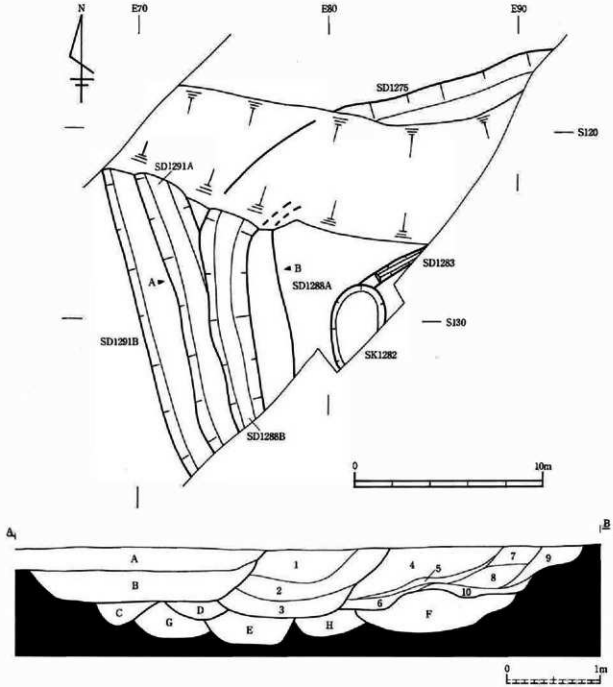
（SD1140・1142・1208・1209）

第23図　ＳＤ1105・1140・1142・1208・1209区画溝跡断面図



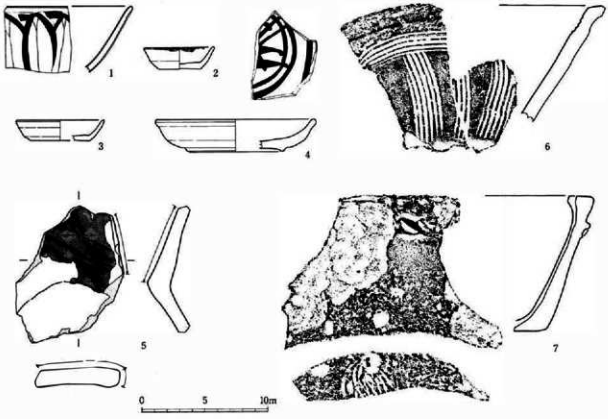
No.	遺構・出土層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	SD1140・底面付近	貿易陶磁	青磁・皿			巻頭2、16-6	19
2	SD1140・埋積土	貿易陶磁	白磁・碗		高台径：4.8cm	16-5	20
3	SD1140・埋積土	陶器	甕	常滑	外面：ナデ→押印（雷状）	17-8	21
4	SD1105・埋積土	陶器	甕	常滑	外面：ナデ→押印（雷状）＋「〆」	17-3	22
5	SD1140・埋積土	瓦	平瓦		凹凸両面マメツ		23
6	SD1140・埋積土	瓦	平瓦		凸面：ナデ　凹面：ナデ　両面にスス付着		24
7	SD1140・確認面	金属製品	工具柄		軸：幅 9cm　口金：径 9cm	18-1	25
8	SD1209・底面	木製品			径：7.4cm　高さ：3.0cm　【ミズナ属】	18-7	26
9	SD1140・下層	石製品	硯石		長さ：12.2cm　幅5.2cm　厚さ：3.2cm　【緑泥岩】	18-4	27
10	SD1140・埋積土	石製品	石棒		厚さ：4.2cm　両面にノミ痕、スス付着　【安山岩】		28
11	SD1142・埋積土	石製品	硯石		置き硯　長さ：22.2cm　幅11.0cm　厚さ：10.8cm　【砂岩】		29
12	SD1140・埋積土	石製品	台敲石・上臼		高さ：11.4cm　【緑泥岩】		30
13	SD1140・下層	石製品	茶臼・下臼		高さ：9.7cm　【緑泥岩】		31

第24図　SD1105・1140・1208・1209・1237区画溝跡出土遺物



No	土色・土性	混入物など	備　考	No	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰褐色 (10YR4/2) 砂質シルト	砂をラミナ状に含む	SD1288B埋積土	A	にぶい橙色 (10YR7/4) 粘土	地山ブロックを含む	SD1291B埋積土
2	暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土	砂をラミナ状に含む		B	褐灰色 (10YR6/1) シルト質粘土	黒いブロックを多く含む	SD1291A埋積土
3	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土			C	にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト質砂		SD1288埋積土 (SD1284と同層相当)
4	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト	砂をラミナ状に含む	SD1288A埋積土	D	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト		SD1284埋積土
5	黄褐色 (2.5Y5/3) 砂			E	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土	砂をラミナ状に含む	SX1680東側埋積土
6	黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト			F	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土		SK1265埋積土
7	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト	地山ブロックを含む		G	にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂	シルトをラミナ状に含む	SD1292埋積土
8	褐灰色 (2.5Y5/1) シルト質粘土	砂をラミナ状に含む		H	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土		
9	灰黄色 (2.5Y6/2) シルト質粘土						
10	にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト						

第25図　ＳＤ1275・1288区画溝跡



No.	遺構・出土層位	種別	器種	産地	特徴	古代図版	番号
1	SD1288A・堆積土	貿易陶磁	青磁椀		龍連弁文　大宰府分類：龍泉窯系青磁椀Ⅱ-b類（13世紀前後～前半）	巻頭2、16-7	32
2	SD1275・堆積土	かわらけ	燈明皿		内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　口縁部にタール状付着物		33
3	SD1288B・堆積土	かわらけ	燈明皿		内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り		34
4	SD1275・堆積土	陶器	志野丸皿	瀬戸・美濃		17-16	35
5	SD1288B・堆積土	陶器	壺	常滑	破片を底石に転用	17-10	36
6	SD1288B・堆積土	瓦質土器	鉢体		脚台（体部：縦→口縁部：横）	17-14	37
7	SD1275・堆積土	瓦質土器	火鉢			17-13	38

第26図　ＳＤ1275・1288区画溝跡出土遺物

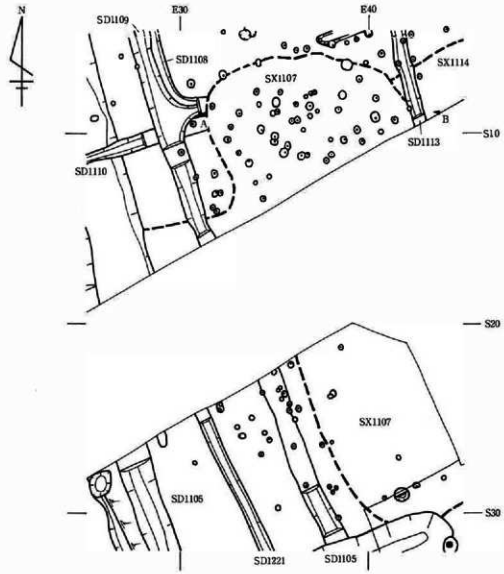
（3）整地跡

【ＳＸ1107整地跡】（第27図）

１区東部から２区北東隅付近で確認した。東西10m、南北24m以上の範囲を20cm前後掘下げたのち、炭化物を含む暗褐色シルトなどで埋戻した整地跡と考えられる。北縁と南縁は弧を描き、西辺の一部は西へ5.5m以上張出す。周縁は張出し部を含めて溝状に一段低くしており、地山ブロックを含む褐灰色シルトなどで埋戻される。ＳＤ1108～1110溝跡、ＳＸ1114整地跡より新しく、ＳＢ1160～1164・1179建物跡、ＳＤ1113溝跡より古い。

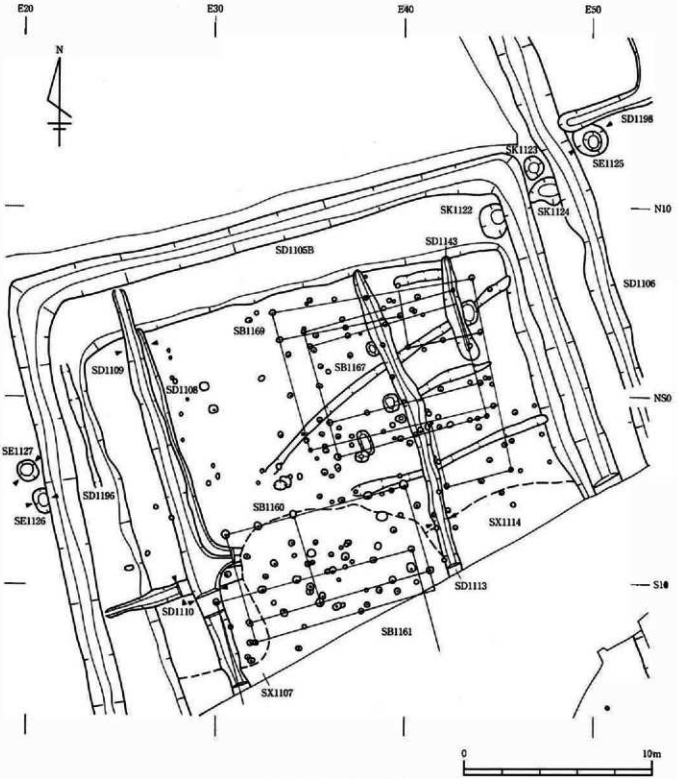
【ＳＸ1114整地跡】（第27図）

１区東部南端で確認した。幅１mほどの弧状の溝が、暗褐色や褐灰色シルトで埋戻された遺構で、特徴が隣接するＳＸ1107と類似することから整地跡とみられる。範囲は東西10m以上、南北２m以上で、溝の深さは0.2mほどある。ＳＸ1114整地跡、ＳＢ1161・1163・1164建物跡、ＳＤ1113溝跡より古い。



No.	土色・土性	混入物など	備　考	No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物を含む	SX1107第1層	E			SB1160 (掘仕切り) 柱痕跡
2	褐灰色 (10YR4/1) シルト	地山ブロックを多く含む	SX1107第2層	F			SB1160 (掘仕切り) 柱穴埋土
A	黄灰色 (2.5YR5/1) シルト	砂を多く含む	SD1110埋積土	G			SB1163 (N1・W1) 柱痕跡
B	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト		SD1113埋積土	H			SB1163 (N1・W1) 柱穴埋土
C			SB1162 (N1・W2) 柱痕跡	I			SB1164 (N1・E1) 柱穴
D			SB1162 (N1・W2) 柱穴埋土	J			SB1161 (N1・E2) 柱穴

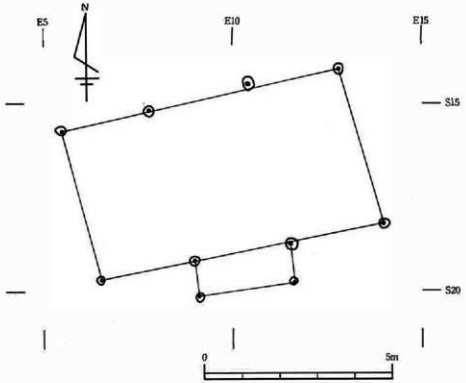
第27図　ＳＸ1107整地跡



第28図　1区東部の検出遺構

（4）1区

掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などがある（第28図）。調査区の北端と東端および西側は、近世以降の水田によって削平されており、これらの地域では建物跡や井戸跡、土壙、溝跡がまばらに確認されたにすぎない。また、調査区東端で古代末期に形成されたＳＸ1200湿地跡を確認した。遺物は井戸跡から木製品、溝跡からかわらけなどが少量出土している。



第29図　ＳＢ1159建物跡

Ａ．掘立柱建物跡

11棟確認した。１棟（ＳＢ1159）を除いて調査区東部に集中する。これらの建物のいくつかは、仙台市教委の調査区に延びており、全容がわからないものがある。また、市教委の調査区におさまる建物もあるとみられることから、建物の数はこれより増える。

建物の方向はいずれも北で西に傾くが、その振れが①大きいもの（Ｎ－29°－Ｗ　ＳＢ1164）と、②小さいもの（Ｎ－10°～16°－Ｗ　ＳＢ1159～1163・1167～1171）に分けられる。柱穴は20～30cm前後の円形もしくは楕円形のものが多い。

【ＳＢ1159建物跡】（第29図）

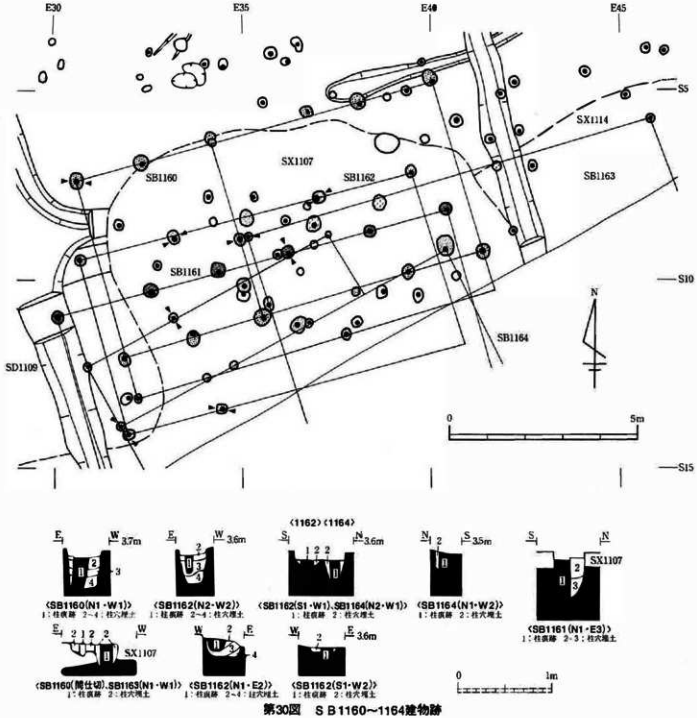
調査区西部で確認した東西３間、南北１間の南北棟建物跡である。南側柱列の中央は南へ張出しており、この部分が出入口と考えられる。

身舎の柱穴は８箇所で検出しており、すべてで径15cm前後の柱痕跡を確認している。張出し部の柱痕跡は径８cmである。平面規模は桁行が南側柱列で総長7.6m、柱間寸法は西から2.5m、2.6m、2.5m、梁行は西妻で4.1m、出入口は南側柱列から1.0m外へ張出す。方向は南側柱列で測るとＥ－12°－Ｎである。身舎の柱穴は一辺が20～30cmの隅丸方形で、深さは20～30cm前後、出入口の柱穴は径15cmの円形で、深さは20cmほどである。埋土は灰黄色シルトである。

【ＳＢ1160建物跡】（第30図）

調査区東部で確認した東西５間、南北１間の東西棟で南に庇または縁が付く建物跡である。身舎は西妻から２間目に間仕切りがある。ＳＢ1164建物跡、ＳＸ1107整地跡、ＳＤ1117溝跡より新しい。

身舎の柱穴は13箇所で検出しており、うち11箇所で径15cmの柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認し



第30図　ＳＢ1160～1164建物跡

ている。庇または縁の柱穴は４箇所で検出しており、３箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が身舎北側柱列で総長10.4m、柱間寸法は西から 1.9m、1.9m、2.6m、1.4m、2.6m、梁行は総長7.7m、柱間寸法は西妻で身舎が4.8m、庇または縁の出は1.1mとみられる。方向は身舎北側柱列で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は身舎で径40cm前後の円形、深さは30～50cmある。庇または縁の柱穴は径20cm前後、深さは20cmほどである。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1161建物跡】（第30図）

調査区東部で確認した東西５間、南北１間以上の東西棟建物跡である。ＳＤ1109・1138・1139溝跡、

ＳＸ1107整地跡より新しい。

柱穴は６箇所で検出しており、５箇所で径15cm前後の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が総長10.7m、柱間寸法は西から2.5m、1.9m、1.9m、2.3m、2.1m、梁行は西妻で4.8m以上である。方向は東妻で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は径30～40cmの円形で、深さは30～50cmある。埋土は褐灰色シルトである。

【ＳＢ1162建物跡】（第30図）

調査区東部で確認した東西４間、南北１間とみられる東西棟建物跡である。ＳＤ1110・1139溝跡、ＳＸ1107整地跡より新しく、ＳＢ1163建物跡より古い柱穴は７箇所で検出しており、すべてで径15cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長9.1m、柱間寸法は東から2.6m、2.0m、2.1m、2.4m、梁行は西妻で総長4.8mである。方向は北側柱列で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は径30～50cmの円形で、深さは30～40 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1163建物跡】（第30図）

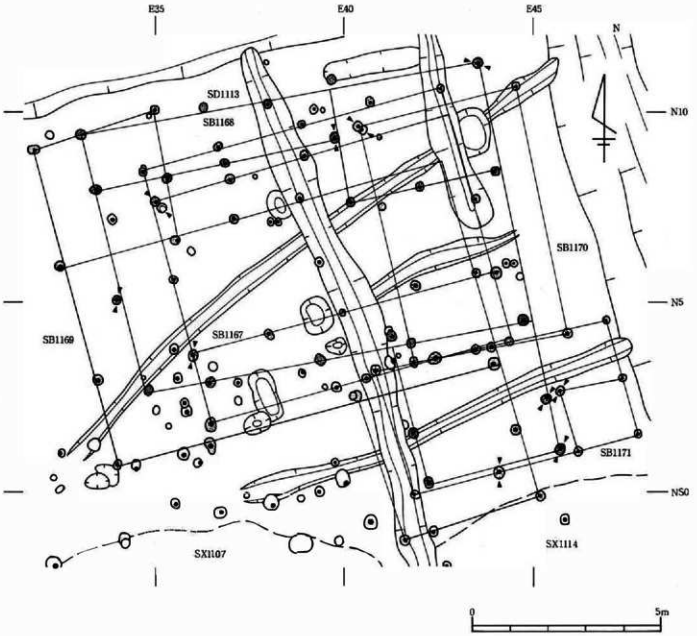
調査区東部で確認した東西５間、南北２間とみられる東西棟建物跡である。ＳＤ1110・1114溝跡、ＳＸ1107整地跡より新しく、ＳＤ1113溝跡より古い。柱穴は６箇所で検出しており、４箇所で径12cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長11.2m、柱間寸法は東から1.7m、1.9m、3.2m、4.4m（２間分）、梁行は西妻で総長4.5m、柱間寸法は北から1.9m、2.6mとみられる。方向は北側柱列で測るとＥ－16°－Ｎである。柱穴は径30～40cmの円形で、深さは10～30cmある。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルトである。

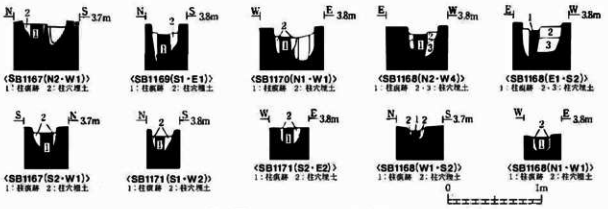
【ＳＢ1164建物跡】（第30図）

調査区東部で確認した東西４間、東西１間以上の東西棟で、北は西３間分に張出しが付く建物跡である。ＳＤ1109・1114溝跡、ＳＸ1107整地跡より新しい。身舎の柱穴は５箇所で検出しており、このうち３箇所で径12cmの柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認している。張出しの柱穴は４箇所で検出しており、２箇所で径12cmの柱痕跡を確認している。身舎の平面規模は桁行が北側柱列で総長9.8m、柱間寸法は西から2.7m、2.7m、1.8m、2.6mである。張出し部は桁行が総長7.2m、柱間寸法は西から2.6m、2.0m、2.6mとみられ、西妻で1.8m張出す。方向は身舎北側柱列で測るとＥ－29°－Ｎである。柱穴は身舎、下屋ともに径20cm前後の円形で、深さは20cmある。埋土は地山ブロックを少量含む褐灰色シルトである。

【ＳＢ1167建物跡】（第31図）

調査区東部で確認した東西４間、南北２間の東西棟で、南北に庇または縁が付く建物跡である。ＳＤ1113・1143溝跡より古い。身舎の柱穴は11箇所で検出しており、10箇所で径15cmほどの柱痕跡を確認している。庇または縁の柱穴は９箇所で検出しており、７箇所で径10cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長8.4m、柱間寸法は2.1m等間である。身舎の梁行は西妻で4.1m、柱間寸法は北から2.1m、2.0m、庇または縁の出は南が1.9m、北は0.9mである。方向は身舎南側柱列で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は径20～30cmの円形で、深さは20～40cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。





第31図　ＳＢ1167～1171建物跡

【ＳＢ1168建物跡】（第31図）

調査区東部で確認した東西６間、南北２間の東西棟で、北に庇または縁、南に張出しが付く建物跡である。建物内の北東部は間仕切りの柱穴がある。ＳＤ1117・1121溝跡より新しく、ＳＤ1113溝跡より古い。

柱穴は身舎と他の部分とに違いは認められない。24箇所で検出しており、16箇所で径15cmの柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は身舎の桁行が南側柱列で総長10.1m、柱間寸法は西から1.6m、3.0m（２間分）、2.0m、3.5m（２間分）、梁行は西妻で身舎が総長5.5m、柱間寸法は北から3.0m、2.5mで、庇または縁の出は1.5mある。張出し部は建物の南東に付いており、出入口と考えられる。南北２間、東西１間で規模は南北が総長3.5m、柱間寸法が北から2.1m、1.4m、東西は3.6mある。建物の方向は身舎南側柱列で測るとＥ－10°－Ｎである。柱穴は径20～40cmの円形で、深さは15～35cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1169建物跡】（第31図）

調査区東部で確認した東西４間、南北２間の東西棟で、北と南に張出しが付く建物跡である。ＳＤ1114溝跡より新しく、ＳＤ1113・1143溝跡より古い。

柱穴は身舎と張出し部に違いは認められない。15箇所で検出しており、13箇所で径15cmの柱痕跡、２箇所で柱抜取穴を確認している。身舎の平面規模は桁行が南側柱列で総長10.3m、柱間寸法は西から2.5m、4.0m（２間分）、3.8m、梁行は西妻で総長5.3m、柱間寸法は北から3.0m、2.3mである。張出し部は建物の北西と南東に付いており、後者は出入口と考えられる。規模は北西が東西、南北とも１間、3.4m、南東は南北２間、東西１間で柱間寸法は東で北から1.8m、1.9m、東西は3.7mある。建物の方向は身舎南側柱列で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は円形で、径や深さは20～40cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1170建物跡】（第31図）

調査区東部で確認した南北３間、東西２間の南北棟建物跡である。ＳＤ1121溝跡より新しく、ＳＤ1143・1149溝跡より古い。柱穴は６箇所で検出しており、５箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長6.3m、柱間寸法は北から2.1m、4.2m（２間分）、梁行は南妻で総長4.2m、柱間寸法は西から2.2m、2.0mである。建物の方向は西側柱列で測るとＮ－12°－Ｗである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは25～35cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1171建物跡】（第31図）

調査区東部で確認した東西３間、南北２間の東西棟建物跡である。東から１間目の棟通り下には間仕切りの柱穴がある。ＳＤ1113溝跡より古い。柱穴は間仕切りを含めて９箇所で検出しており、すべてで径12cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長6.1m、柱間寸法は西から2.4m、2.1m、1.6m、梁行は東妻で総長3.2m、柱間寸法は1.6m等間である。建物の方向は南側柱列で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは20cm前後ある。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

B. 井戸跡

調査区中央部で2基、東部で1基確認した。いずれも素掘りで、平面形は円形である。

【ＳＥ1125井戸跡】（第28・32図）

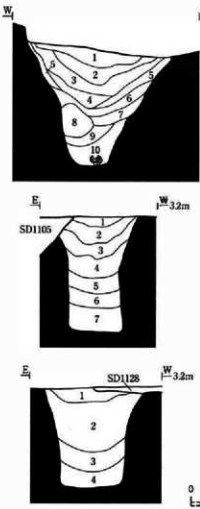
調査区東部で確認した。ＳＤ1198溝跡より古い。平面形は径1.7mほどの円形で、深さは1.5mある。断面形は上部が開くＵ字形で、底面は径0.6mほどの不整円形である。堆積土は５層に大別でき、第５層は機能時の堆積土、第４層は機能停止後に廃てられた粘土や木の廃棄ブロック、第３層は壁の崩落土、第２層は自然堆積、第１層は人為的な埋土と考えられる。第５層から栃杓とみられる木製品が出土したが、残りが悪く図示できない。

【ＳＥ1126井戸跡】（第28・32図）

調査区中央部で確認した。ＳＤ1105区画溝跡より古い。平面形は南北1.3m、東西1.1ｍの楕円形で、深さは1.2mある。底面は平坦で0.8×0.6mの南北に長い楕円形であり、断面形は漏斗形である。堆積土は２層に大別でき、第２層は機能時の堆積土、第１層は人為的な埋土と考えられる。

【ＳＥ1127井戸跡】（第28・32図）

調査区中央部で確認した。ＳＤ1128溝跡より古い。平面形は径1.1mほどの円形で、深さは12mある。底面は平坦で径0.7mほどの円形であり、断面形は上部が開く筒形である。堆積土は２層に大別でき、第２層は機能時の堆積土、第１層は人為的な埋土と考えられる。



No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	黄灰色（2.5Y5/1）砂質シルト	粘土ブロックを多く含む	第１層（人為堆積）
2	黄灰色（2.5Y5/1）砂質シルト		
3	黄灰色（2.5Y5/1）シルト	砂をラミナ状に含む	第２層
4	黒灰色（10YR5/1）シルト		
5	黒褐色（2.5Y3/1）粘土質シルト	粘土ブロックを多く含む	
6	灰色（7.5Y4/1）砂	粘土ブロック移動に伴う	第３層
7	オリーブ黒色（5Y3/1）砂	粘土ブロック移動に伴う	
8	オリーブ黒色（5Y3/1）粘土	木片を多量に含む	第４層
9	灰色（5Y3/1）砂		
10	オリーブ黒色（5Y3/1）砂		第５層

〈SE1125〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）シルト	粘土ブロックを多く含む	
2	黄灰色（2.5Y5/1）粘土質シルト	炭化物を多く含む	
3	黒灰色（2.5Y3/1）粘土質シルト	粘土ブロックを含む	第１層（人為堆積）
4	黄灰色（2.5Y4/1）粘土	粘土ブロックを多く含む	
5	黄灰色（2.5Y5/1）粘土質シルト	粘土ブロックを含む	
6	黒褐色（2.5Y3/1）粘土		第２層
7	灰色（7.5Y4/1）粘土		

〈SE1126〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰色（5Y5/1）粘土質シルト	粘土ブロックを多く含む	第１層（人為堆積）
2	灰色（5Y4/1）粘土質シルト	粘土ブロック多く含む	
3	灰色（10Y5/1）粘土質シルト	砂や炭層状に含む	第２層
4	灰色（5Y5/1）粘土質シルト	砂や炭層状に多く含む	

〈SE1127〉

第32図　ＳＥ1125～1127井戸跡断面図

C．溝跡

【ＳＤ1108溝跡】（第28・34図）

調査区北部で確認したＬ字形の溝跡で、南北長12.5m、東西は1.5m分を検出した。ＳＤ1109溝跡より新しく、ＳＸ1107整地跡より古い。上幅0.6～0.7m、下幅0.3m前後、深さは0.2mある。方向はＮ－17°－Ｗである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトである。

【ＳＤ1109溝跡】（第28・34図）

調査区中央部で確認した南北溝跡で、南北は２区北端にかけて約39m分を検出した。北端から15mの位置で東に分岐しており、東西は1.8m分を検出した。ＳＤ1110溝跡より新しく、ＳＢ1161・1178・1181・1182建物跡、ＳＸ1107整地跡、ＳＤ1129区画溝跡より古い。上幅0.9～12m、下幅0.4～0.6m、深さは南北部で0.4m、東西部で0.2mある。方向は１区でＮ－17°－Ｗ、２区でＮ－25°－Ｗである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は４層に分けられるが、いずれも褐色砂質シルトや黒褐色シルトで自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から灯明皿として使用されたかわらけ小皿が出土している（第33図）。

No.	層位	堆積状態	特徴
1	堆積土	砂質シルト	灰黄褐色(10YR4/2)を基調とし、ローム粒子を含む

口縁	底径	器高	残存率	登録
(7.8)	(4.0)	1.6	1/4	39

第33図　ＳＤ1109溝跡出土遺物

【ＳＤ1110溝跡】（第28・34図）

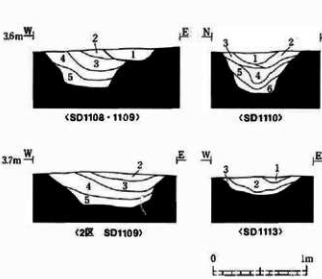
調査区中央部で確認した東西溝跡で14.7m分を検出した。ＳＢ1160・1162・1163建物跡、ＳＸ1107整地跡、ＳＤ1109溝跡より古い。

上幅0.8m、下幅0.4m、深さは0.4mある。方向はＥ－12°－Ｎ前後である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は３層に大別でき、第２・３層は機能時の堆積土、第１層は人為的な埋土と考えられる。

【ＳＤ1113溝跡】（第28・34図）

調査区東部で確認した南北溝跡で16.5m分を検出し、さらに南へ延びる。ＳＢ1163・1167・1169・1171建物跡、ＳＸ1107整地跡、ＳＫ1146土壙、ＳＤ1114・1115・1117・1121・1149溝跡より新しい。

上幅0.5～1.0m、下幅0.2～0.4m、深さは0.3mある。方向はＮ－20°－Ｗ前後である。底面は皿状で、



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト		SD1108堆積土
2	黒褐色（10YR3/1）シルト	炭化物を多量に含む	
3	黒色（10YR2/1）シルト		SD1109堆積土
4	黄灰色（2.5Y4/1）砂質シルト		
5	黄灰色（2.5Y5/1）砂質シルト	地山ブロックを含む	

〈SD1108・1109〉

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色（2.5Y3/1）砂質シルト	地山ブロックを多く含む	第１層（人為堆積）
2	黒褐色（2.5Y3/1）砂質シルト		
3	黒褐色（2.5Y3/1）砂質シルト		第２層
4	黄灰色（2.5Y4/1）砂質シルト		
5	灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト	砂を多く含む	第３層
6	暗灰黄色（2.5Y5/2）砂		

〈SD1110〉

No.	土色・土質	混入物など	備考
1	暗褐色（10YR3/3）シルト		
2	黒褐色（10YR2/3）シルト		
3	黒褐色（10YR2/2）シルト		

〈SD1113〉

第34図　ＳＤ1108・1109・1110・1113溝跡断面図

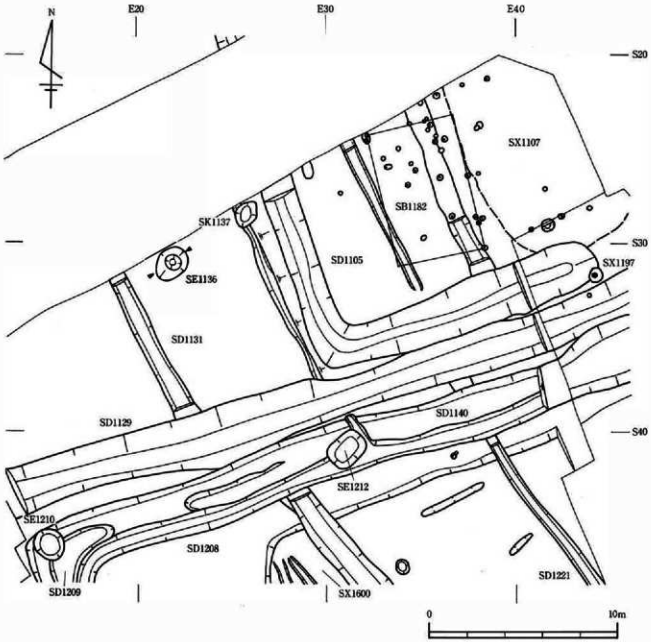
壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられるが、いずれも暗褐色～黒褐色シルトを主体としており自然堆積とみられる。

（5）2区

掘立柱建物跡、掘立柱列跡、井戸跡、土壙、溝跡などを確認した（第35～37図）。調査区北部の西端と、南部西側は近世以降の水田によって削平されており、これらの地域では井戸跡や土壙、溝跡がまばらに確認されたにすぎない。遺物は井戸跡、土壙、溝跡から木製品、石製品などが少量出土している。

A．掘立柱建物跡、掘立柱列跡

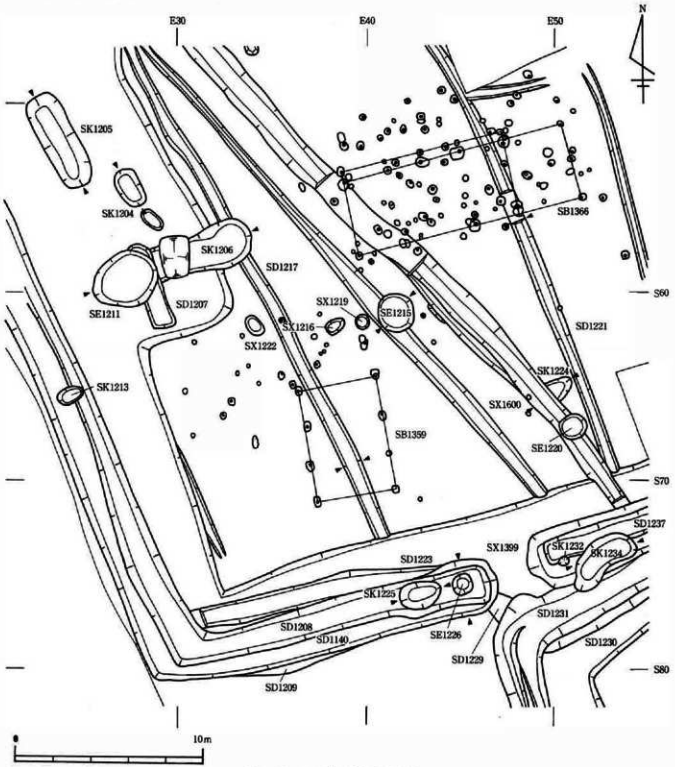
建物を15棟、柱列跡を2条確認した。調査区北東部、中央部、南東部に分布する。北東部や南東部



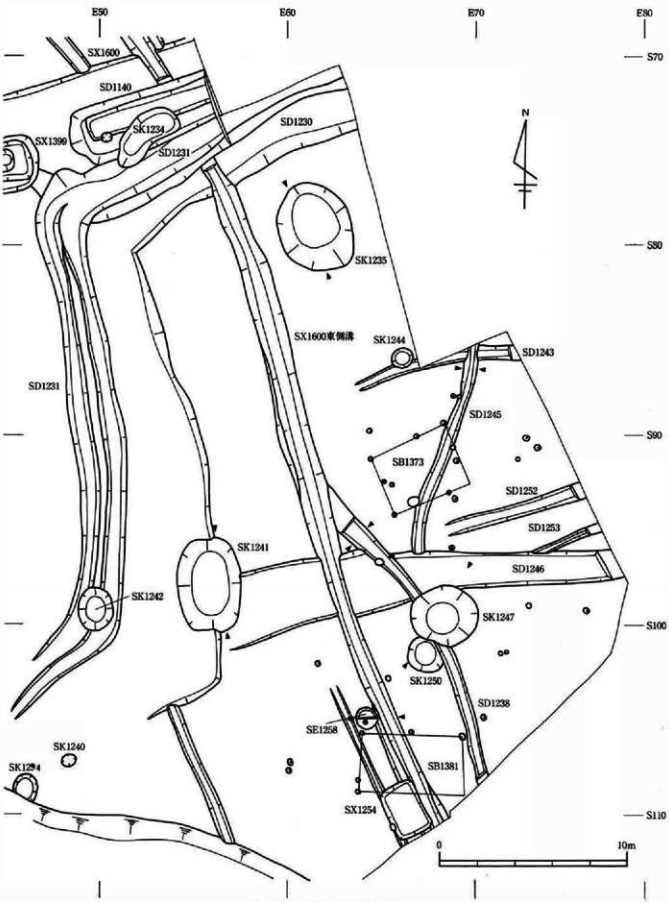
第35図　2区北部の検出遺構

の建物は、仙台市教委の調査区に延びて全容がわからないものがある。また、市教委の調査区におさまる建物もあることから、建物の数はこれより増える。

建物の方向は北東部がN－13°～30°－W　、中央部はN－8°～24°－Wといずれも北で西に傾く。南東部は北で西に傾くもの（N－20°～26°－W）と東に傾くもの（N－4°－E）がある。柱穴は20～30cm前後の円形が多いが、大きな建物が集中する中央部のSB1366周辺は、柱穴の径が50～80cmと他に較べて大きい。



第36図　2区中央部の検出遺構



第37図　2区南部の検出遺構

－北東部の建物－

【ＳＢ1178建物跡】（第38図）

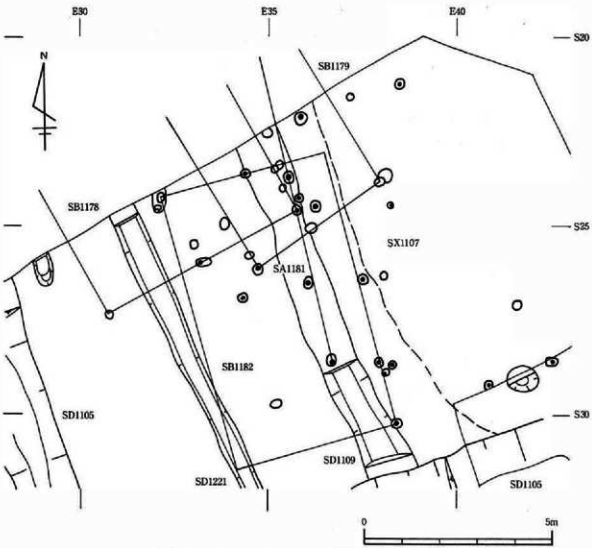
調査区北東部で確認した東西２間の建物跡である。ＳＤ1109・1221溝跡より新しい。柱穴は３箇所で検出しており、２箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。総長5.7m、柱間寸法は西から2.8m、2.9mとみられる。方向はＥ－28°－Ｎである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは15～25cmある。埋土は黒褐色シルトである。

【ＳＢ1179建物跡】（第38図）

調査区北東部で確認した東西２間、南北２間以上の南北棟とみられる建物跡である。ＳＤ1109溝跡、ＳＸ1107より新しい。柱穴は３箇所で検出しており、１箇所で径10cmの柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は梁行が南妻で総長4.1m、柱間寸法は西から1.8m、2.3mとみられる。建物の方向は南妻で測るとＥ－30°－Ｎである。柱穴は径20～30cmの円形で、深さは30cmある。埋土は黒褐色シルトである。

【ＳＢ1182建物跡】（第38図）

調査区北東部で確認した南北４間、東西２間の南北棟とみられる建物跡である。柱穴は５箇所で検



第38図　ＳＢ1178・1179・1182建物跡、ＳＡ1181柱列跡

出しており、4箇所で径10cm前後の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長7.4m、柱間寸法は北から3.5m（2間分）、2.2m、1.7m、梁行が北妻で総長4.6m、柱間寸法は2.3m等間とみられる。建物の方向は東側柱列で測るとN－13°－Wである。柱穴は一辺が15～20cmの方形で、深さは10～30cmある。埋土は黒褐色シルトである。

－中央部の建物－

【ＳＢ1361建物跡】（第39図）

調査区中央部で確認した東西3間、南北1間の東西棟建物跡である。ＳＸ1600道路跡、ＳＤ1221溝跡より新しい。柱穴は8箇所で検出しており、このうち5箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長7.4m、柱間寸法は西から2.5m、2.5m、2.4m、梁行は西妻で4.1mとみられる。方向は南側柱列で測るとＥ－15°－Ｎである。柱穴は一辺が25～40cmの方形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1362建物跡】（第39図）

調査区中央部で確認した東西4間、南北1間とみられる東西棟建物跡である。ＳＸ1600道路跡、ＳＤ1221溝跡より新しい。柱穴は7箇所で検出しており、このうち5箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長8.6m、柱間寸法は西から2.4m、3.8m（2間分）、2.4m、梁行は西妻で4.8mとみられる。方向は北側柱列で測るとＥ－16°－Ｎである。柱穴は一辺が40cm前後の方形、深さは南側柱列が40cm、北側柱列が20cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルトである。

【ＳＢ1363建物跡】（第39図）

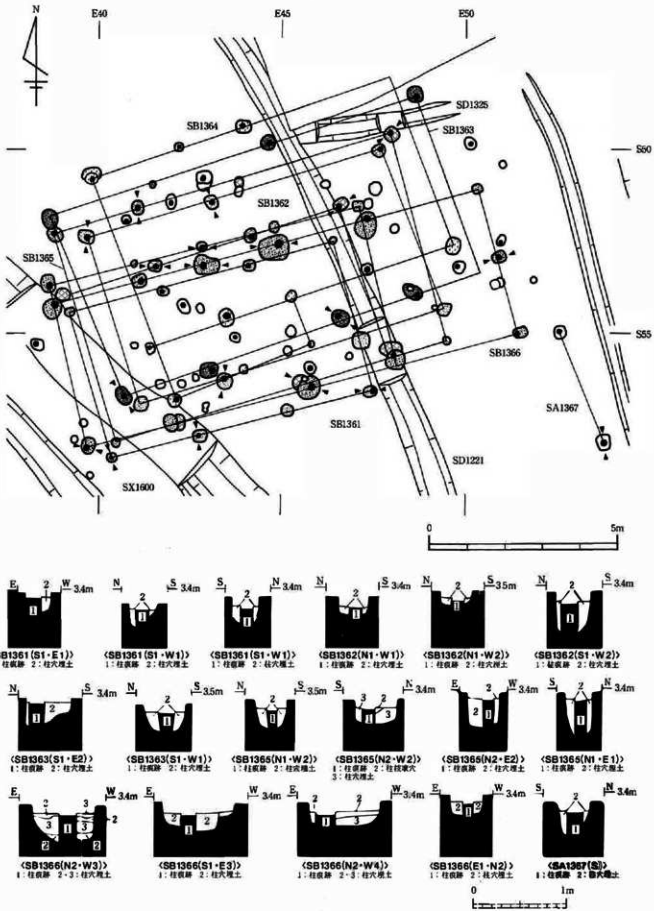
調査区中央部で確認した東西5間、南北1間とみられる東西棟建物跡ある。ＳＸ1600道路跡より新しく、ＳＢ1365建物跡より古い。柱穴は8箇所で検出しており、このうち5箇所で径15cmの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長10.4m、柱間寸法は西から2.4m、3.8m（2間分）、2.1m、2.0m、梁行は東妻で4.8m、西妻で5.3mとみられる。方向は南側柱列で測るとＥ－22°－Ｎである。柱穴は一辺が20～50cmの方形、深さは30～40cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1364建物跡】（第39図）

調査区中央部で確認した東西4間、南北1間の東西棟で南に2間の張出し部が付く建物跡である。ＳＸ1600道路跡より新しい。身舎の柱穴は10箇所で検出しており、このうち8箇所で径15cmの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。張出し部の柱穴は3箇所で検出しており、1箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長8.6m、柱間寸法は西から2.6m、1.8m、1.8m、2.4m、梁行は4.8mとみられる。張出し部の出は西妻で1.6mである。方向は南側柱列で測るとＥ－22°－Ｎである。柱穴は一辺が40～50cmの方形、深さは30～40cmある。張出し部の柱穴は径20cmの円形、深さは30～40cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1365建物跡】（第39図）

調査区中央部で確認した東西3間、南北1間の東西棟で北と東に庇または縁が付く建物跡である。



第39図　ＳＢ1361～1366建物跡、ＳＡ1367柱列跡

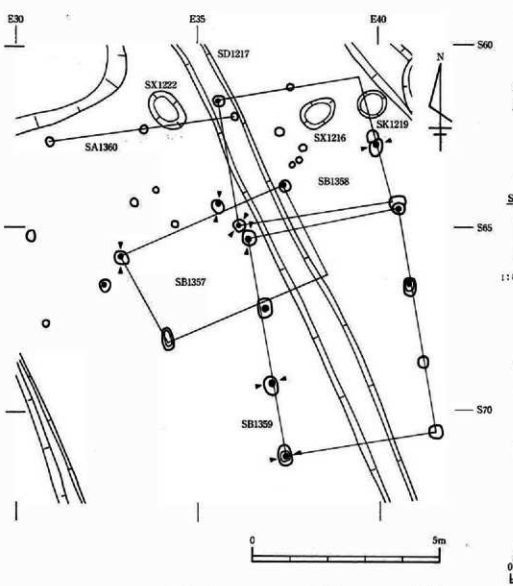
ＳＸ1600道路跡、ＳＢ1363建物跡、ＳＤ1221溝跡より新しく、ＳＢ1366建物跡より古い。

身舎の柱穴は８箇所で検出しており、このうち４箇所で径15cmの柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認している。庇または縁の柱穴は５箇所で検出しており、３箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は身舎の桁行が北側柱列で総長7.7m、柱間寸法は西から2.5m、2.7m、2.5m、梁行は東妻で4.3mとみられる。庇または縁の出は西妻で1.6m、南側柱列で2.0mとみられる。方向は身舎北側柱列で測るとＥ－16°－Ｎである。柱穴は身舎が径20～50cmの円形、深さは30～40cmあり、庇または縁が径20～30cmの円形で、深さは40cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1366建物跡】（第39図）

調査区中央部で確認した東西が北側柱列で４間、南側柱列で３間、南北１間の東西棟で北に縁、東に張出しが付く建物跡である。ＳＸ1600道路跡、ＳＢ1365建物跡、ＳＤ1221溝跡より新しい。

身舎の柱穴は９箇所で検出しており、このうち７箇所で径20cmの柱痕跡を確認している。縁や張出し部の柱穴は８箇所で検出しており、４箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は身舎



第40図　ＳＢ1357～1359建物跡、ＳＡ1360柱列跡

の桁行が北側柱列で総長8.7m、柱間寸法は西から2.4m、1.7m、2.1m、2.5m、梁行は西妻で4.5mとみられる。縁の出は西妻で0.5m、張出しの出は北側柱列で3.2mとみられる。方向は身舎北側柱列で測るとE－16°－Nである。柱穴は身舎が径40～80cmの楕円形、深さは30～40cmあり、縁や張出しは径30～40cmの円形で、深さは20cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1357建物跡】（第40図）

調査区中央部で確認した東西３間、南北１間の東西棟建物跡である。柱穴は５箇所で検出しており、このうち３箇所で径15cmの柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.9m、柱間寸法は西から1.7m、1.3m、1.9m、梁行は西妻で2.7mとみられる。方向は北側柱列で測るとE－24°－Nである。柱穴は一辺が30～40cmの方形、深さは20cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。

【ＳＢ1358建物跡】（第40図）

調査区中央部で確認した東西２間、南北２間の東西棟建物跡である。ＳＤ1217溝跡より新しく、ＳＢ1359建物跡より古い。柱穴は５箇所で検出しており、このうち３箇所で径15cm前後の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長4.3m、梁行は西妻で総長3.5mとみられる。方向は西妻で測るとＮ－10°－Ｗである。柱穴は一辺が30～40cmの方形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒褐色シルトである。南西隅柱穴では柱材が残っており、同定の結果、樹種はクリであることがわかった。

【ＳＢ1359建物跡】（第40図）

調査区中央部で確認した南北３間、東西１間の南北棟建物跡である。ＳＢ1358建物跡より古い。柱穴は８箇所で検出しており、このうち４箇所で径15cmの柱痕跡、４箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長6.0m、柱間寸法は2.0m等間、梁行は北妻で4.2mとみられる。方向は西側柱列で測るとＮ－９°－Ｗである。柱穴は一辺が30～50cmの方形、深さは30～40cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＡ1367柱列跡】（第39図）

調査区中央部で確認した南北１間の柱列跡である。柱穴は２箇所で検出しており、径15cmの柱痕跡を確認している。柱間寸法は3.3m、方向はＮ－22°－Ｗである。柱穴は一辺が30～40cmの方形、深さは40cmある。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

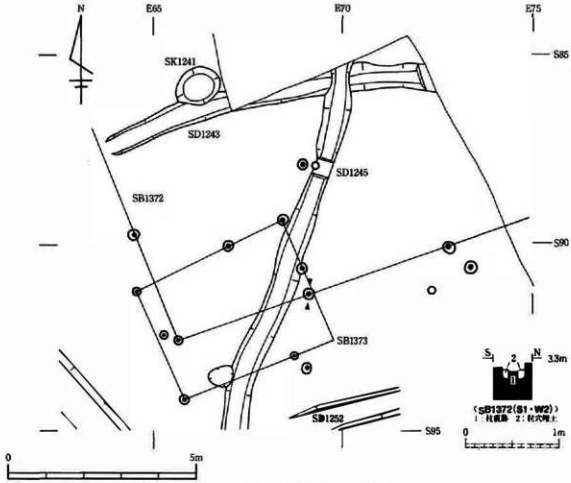
【ＳＡ1360柱列跡】（第40図）

調査区中央部で確認した東西２間の柱列跡である。ＳＤ1217溝跡より新しい。柱穴は３箇所で検出している。規模は総長5.2m、柱間寸法は2.6m等間とみられる。方向はＥ－８°－Ｎである。柱穴は一辺が20cmほどの方形、深さは30cmある。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

－南東部の建物－

【ＳＢ1372建物跡】（第41図）

調査区南東部で確認した東西３間以上、南北２間以上とみられる建物跡である。柱穴は４箇所で検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認している。柱間寸法は南側柱列で西から3.7m、3.8mで、



第41図　ＳＢ1372・1373建物跡

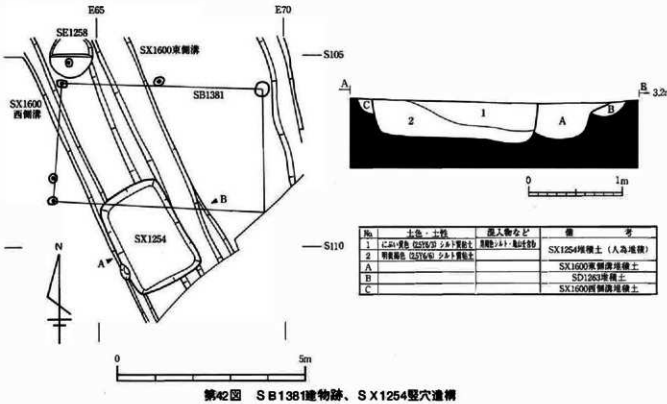
西側柱列は南から3.0mである。方向は南側柱列で測るとＥ－20°－Ｎである。柱穴は径20cmの円形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含む。

【ＳＢ1373建物跡】（第41図）

調査区南東部で確認した東西３間、南北２間の東西棟建物跡である。ＳＤ1245溝跡より古い。柱穴は７箇所で検出しており、すべてで径12cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.3m、柱間寸法は西から2.7m（２間分）、1.6m、梁行は西妻で3.2m、柱間寸法は北から1.4m、1.8mとみられる。方向は北側柱列で測るとＥ－26°－Ｎである。柱穴は径20cmの円形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含む。

【ＳＢ1381建物跡】（第42図）

調査区南東部で確認した東西２間、南北１間の東西棟建物跡である。柱穴は５箇所で検出しており、このうち３箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長5.5m、柱間寸法は西から2.7m、2.8m、梁行は西妻で3.1m、東妻で3.3mとみられる。方向は西妻で測るとＮ－４°－Ｅである。柱穴は一辺が20～30cmの円形、深さは10～20cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



第42図　ＳＢ1381建物跡、ＳＸ1254竪穴遺構

Ｂ．竪穴遺構

【ＳＸ1254竪穴遺構】（第42図）

調査区南部で検出した。ＳＸ1600道路跡、ＳＫ1266土壙、ＳＤ1264溝跡より新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は南北2.7m、東西1.8mある。底面はほぼ平坦で、壁は急に立上がる。深さは0.5mある。方向は東壁で測るとＮ－29°－Ｗである。堆積土は下層が明黄褐色シルト質粘土、上層は黒褐色ブロックを多く含むにぶい黄色シルト質粘土であり、人為堆積とみられる。

Ｃ．井戸跡

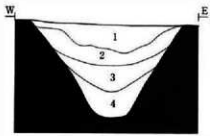
調査区北部で３基（ＳＥ1136・1210・1212）、中央部で４基（ＳＥ1211・1215・1220・1226）、南端で１基（ＳＥ1258）確認した。いずれも素掘りで、平面形は１基（ＳＥ1212）が楕円形で、他は円形である。

【ＳＥ1136井戸跡】（第35・43図）

調査区北部で確認した。平面形は径1.5mの円形で、深さは1.0mある。断面形は上部が大きく開く逆台形で、底面は径0.4mの円形でほぼ平坦である。堆積土は３層に大別できる。第３層は機能時の堆積土、第２層は壁の崩落土、第１層は人為的な埋土と考えられる。

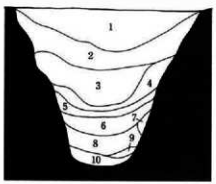
【ＳＥ1210井戸跡】（第35図）

調査区北部で確認した。ＳＤ1209区画溝跡より新しく、ＳＤ1140区画溝跡より古い。平面形は径1.6mの円形で、深さはＳＤ1140の確認面から1.0mある。底面は径1.1mの円形でほぼ平坦である。断面形は円筒形である。堆積土は黒褐色ブロックを含む暗褐色シルト質粘土で埋め戻されている。



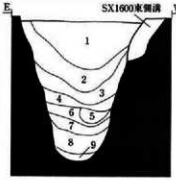
No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	明灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト	角ブロック・炭化物含む	第1層（人為堆積）
2	暗灰色 (10YR3/1) 粘土		第2層
3	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		
4	暗黒褐色 (2.5Y3/2) 粘土質シルト		第3層

〈SE1136〉



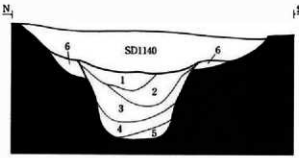
No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		第1層（人為堆積）
2	暗赤褐色 (5YR3/2) シルト		
3	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	角ロブロックを含む	
4	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土		
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		第2層
6	黒褐色 (10YR3/2) 粘土		
7	暗褐色 (10YR3/3) 砂		
8	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト		
9	黒色 (10YR2/1) 粘土		第3層
10	褐灰色 (10YR4/1) 粘土		

〈SE1215〉



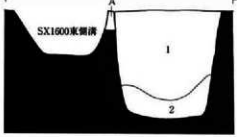
No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色 (10YR3/1) 粘土	角ロブロック多く含む	第1層（人為堆積）
2	黒褐色 (10YR3/2) 粘土		
3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	角ロブロック多く含む	
4	黒褐色 (10YR2/2) 粘土		
5	黒色 (10YR2/1) 粘土		第2層
6	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト		
7	黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土		第3層
8	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		
9	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土		

〈SE1220〉



No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	暗褐色 (10YR3/3) 粘土		第1層
2	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		
3	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	植物遺体を含む	
4	灰褐色 (10YR4/1) 粘土		第2層
5	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		
6			SD1208地積土

〈SE1226〉



No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄褐色 (2.5Y6/3) 粘土	角ブロック多く含む	
2	灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト		
A			SH1264地積土

〈SE1258〉

0　1m

第43図　S E 1136・1215・1220・1226・1258井戸跡断面図

No.	遺構	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	SK1241・埋積土	瓦	平瓦		破片を砥石に転用　凸面：縄タタキ　凹面：布目　多賀城分類Ⅱ類	17-15	40
2	SE1215・掘型面	瓦	平瓦		凸面：ナデ　凹面：ナデ　凹面にススが多量に付着		41
3	SK1241・埋積土	木製品			部脇材　井戸枠1　上径：53.6cm　高さ：15.0cm　厚さ：3.8cm　【サワグルミ】	18-11	42
4	SE1211・埋積土	木製品			底さ：12.2cm　幅：7.3cm　高さ：3.5cm　【ナナカマド】	18-6	43
5	SK1241・埋積土	木製品	折敷		厚さ：0.2cm　片面に刃物痕が顕著に認められる		44
6	SK1241・埋積土	石製品	砥石		長さ：14.0cm　幅：3.8cm　高さ：2.9cm　【凝灰岩砥石】	18-13	45
7	SE1215・埋積土	石製品			加工面：5面以上　【安山岩】		46
8	SE1226・埋積土	石製品	砥石		厚さ：3.5cm　【安山岩】		47
9	SE1226・埋積土	石製品			現の現存寸法 長さ：22cm 幅さ：12cm 円形厚：5.4cm 四角厚さ：1.1cm 【安山岩】	19-6	48

第44図　ＳＥ1211・1215・1226井戸跡、ＳＫ1241土壙出土遺物

【ＳＥ1212井戸跡】（第35図）

調査区北部で確認した。ＳＤ1208区画溝跡より新しく、ＳＤ1140区画溝跡より古い。平面形は長径2.0m、短径1.5mの楕円形で、深さはＳＤ1140の確認面から1.2mある。底面は長径1.5m、短径1.2mの楕円形でほぼ平坦であり、壁は緩やかに立上がる。堆積土は２層に大別できる。第２層は底面直上の地山崩落土、第１層は人為的な埋土と考えられる。

【ＳＥ1211井戸跡】（第36図）

調査区中央部西側で確認した。ＳＫ1206土壙より新しく、ＳＤ1207溝跡より古い。平面形は径3.0～3.6mの歪んだ円形で、深さは1.3m以上ある。調査途中で壁が崩落したため、底面の確認や断面図の作成はできなかった。堆積土から木製品の部材（第44図４）が出土している。

【ＳＥ1215井戸跡】（第36・43図）

調査区中央部で確認した。ＳＸ1600道路跡より新しい。平面形は径1.9mの円形で、深さは1.7mある。底面は径0.7mの円形でほぼ平坦である。断面形は上部が開く円筒形である。堆積土は３層に大別できる。第３層は機能時の堆積土、第２層は壁の崩落土、第１層は人為的な埋土と考えられる。第１層から砥石・古代の平瓦、堆積土から面取りされた石製品（第44図７）、確認面から古代の平瓦が出土した（第44図２）。平瓦や堆積土から出土した河原石のなかにはススが付着するものがある。

【ＳＥ1220井戸跡】（第36・43図）

調査区中央部で確認した。ＳＸ1600道路跡より新しい。平面形は径1.4mの円形で、深さはＳＤ1.3mある。底面は径0.4mの円形でほぼ平坦である。断面形上部が開く円筒形である。堆積土は３層に大別できる。第３層は機能時の堆積土、第２層は壁の崩落土、第１層は人為的な埋土と考えられる。

【ＳＥ1226井戸跡】（第36・43図）

調査区中央部で確認した。ＳＤ1209区画溝跡より新しく、ＳＤ1140区画溝跡より古い。平面形は径1.2mの円形で、深さはＳＤ1140の確認面から1.2mある。底面は径0.7mの円形でほぼ平坦である。断面形は円筒形である。堆積土は２層に大別できる。第２層は機能時の堆積土、第１層は自然堆積と考えられる。堆積土から扉の軸受けとみられる石製品（第44図９）・砥石（第44図８）が出土している。

【ＳＥ1258井戸跡】（第37・43図）

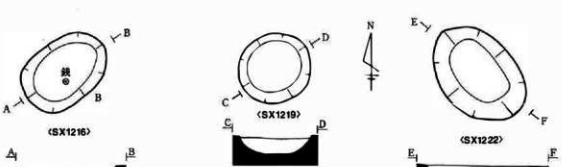
調査区南部で確認した。ＳＸ1600道路跡より新しい。平面形は径1.2mの円形で、深さは1.2mある。底面は径0.8mの円形で平坦である。断面形は円筒形である。地山ブロックを含む灰黄色砂質シルトや黄色シルト質粘土で埋戻されている。

D．土壙墓

調査区の中央部で３基確認した。平面形は円形（ＳＸ1219）と楕円形（ＳＸ1216・1222）がある。

【ＳＸ1216土壙墓】（第45図）

平面形は長径1.0m、短径0.7mの楕円形である。底面は平坦で、壁は緩やかに立上がる。深さは15cmある。地山ブロックや炭化物を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。底面のほぼ中央から銅銭１枚と鉄銭３枚が重なって出土した（写真図版９・18－４・５）。



第45図　S X1216・1219・1222土壙墓

【S X1219土壙墓】（第45図）

平面形は径0.8mの円形である。底面は平坦で、壁は緩やかに立上がる。深さは20cmある。地山ブロックを含むオリーブ褐色シルトで埋め戻されている。

【S X1222土壙墓】（第45図）

平面形は長径1.2m、短径0.8mの楕円形である。底面は平坦で、壁は緩やかに立上がる。深さは10cmある。地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

E.土壙

15基確認した。平面形は円形を基調とするもの（S K1232・1240・1242・1244・1247・1250）と楕円形を基調とするもの（S K1204～1206・1213・1224・1225・1234・1235・1241）とがある。規模は円形のものが径0.7～3.5m、後者は長軸が1.0～4.7m、短軸は0.8～3.9mである。以下、主な土壙について述べる。

【S K1204土壙】（第36・47図）

調査区中央部西側で確認した。平面形は長軸2.2m×短軸1.2mの楕円形である。底面は中央に向けて傾斜し、壁は急に立ち上がっており、断面形は逆三角形に近い。深さは1.2mある。堆積土は2層に大別できる。第2層は自然堆積、第1層は人為的な埋土と考えられる。

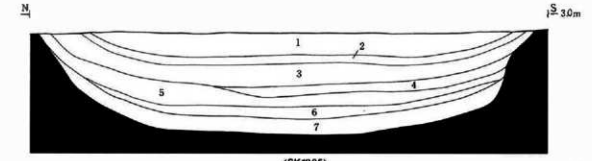
【S K1205土壙】（第36・46図）

調査区中央部西側で確認した。平面形は長軸5.3m、短軸1.8mの楕円形である。底面は中央に向けて緩やかに傾斜し、壁は比較的急に立ち上がる。深さは1.3mある。堆積土は3層に大別できる。第3層は自然堆積、第2層は自然堆積の過程で炭化種子などが廃棄されたもの、第1層は自然堆積とみられる。

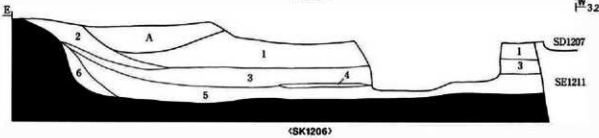
底面から茶臼下臼（第48図8）、第2層から茶臼下臼、砥石（第48図10）、木製品が出土している。第2層出土下臼は、S D1140区画溝跡第2層出土品と接合した（第24図13）。

【S K1206土壙】（第36・46図）

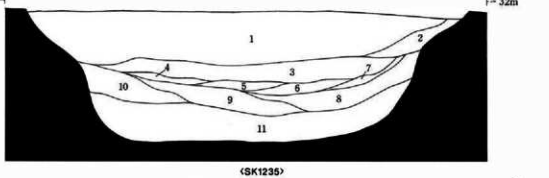
調査区中央部西側で確認した。S E1211井戸跡、S D1207・1217溝跡より古い。平面形は長軸6.0m以上、短軸1.9mの楕円形とみられる。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がり上部は外に開く。



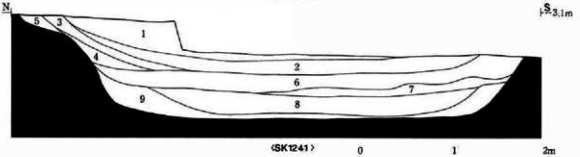
〈SK1205〉



〈SK1206〉



〈SK1235〉



〈SK1241〉

0 1 2m

No	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト		第1層
2	黒褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト	植物遺体を多く含む	第2層
3	黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト	炭化した種子を含む	
4	オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト		
5	褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	炭化した種子を多く含む	
6	灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト	植物遺体を含む	
7	オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト		第3層

〈SK1205〉

No	土色・土性	混入物など	備　考
1	黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト	角ばったブロックを含む	第1層（人為堆積）
2	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭をラミナ状に含む	
3	褐色 (10YR4/4) 砂質シルト	植物遺体を含む	第2層
4	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト	植物遺体を含む	
5	灰褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	植物遺体を多く含む	
6	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	角ばったブロックを多く含む	
7	暗褐色 (10YR3/3) シルト		5D1217埋樋土

〈SK1206〉

No	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	角ばったブロック多く含む	第1層（人為堆積）
2	黒褐色 (10YR3/2) シルト	角ばったブロックを多く含む	第2層
3	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	炭化物を含む	
4	炭化物層		
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト		
6	黒褐色 (10YR3/1) 粘土	5層をラミナ状に含む	
7	炭化物層		
8	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	6層をラミナ状に含む	
9	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	炭化物を含む	
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		
11	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	黒色粘土ラミナ状に含む	

〈SK1235〉

No	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	角ばったブロックを含む	第1層（人為堆積）
2	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	シルトをラミナ状に含む	第2層
3	暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト		
4	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト	砂をラミナ状に含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	礫の崩落土	
6	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土	角ば状ラミナ状に含む	
7	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土	角ばブロック状を含む	
8	オリーブ褐色 (5Y3/2) シルト質粘土	角ば状ラミナ状に含む	
9	オリーブ黒色 (5Y2/2) シルト質粘土	角ばブロックを含む	

〈SK1241〉

第46図　2区の土壙断面図（1）

深さは1.0mある。堆積土は3層に大別できる。第3層は壁の崩落土、第2層は自然堆積の過程で植物や炭化物などが廃棄されたもの、第1層は人為的な埋土と考えられる。

第1層からススが付着した茶臼下臼（第48図7）、堆積土から茶臼上臼（第48図9）、ススが付着した河原石が出土している。

【SK1224土壙】（第36・47図）

調査区中央部で確認した。SX1600道路跡より古い。平面形は長軸1.5m以上、短軸1.2mの楕円形とみられる。底面は中央が少し凹み、壁は急に立ち上がる。深さは0.8mある。堆積土は3層に大別できる。第3層は壁の崩落土、第2層は自然堆積、第1層は人為的な埋土と考えられる。

【SK1225土壙】（第36・47図）

調査区中央部で確認した。SD1208区画溝跡より新しく、SD1140区画溝跡より古い。平面形は長軸2.2m、短軸1.5mの楕円形である。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さはSD1140の底面から0.6mある。堆積土は4層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

【SK1234土壙】（第36・47図）

調査区中央部で確認した。SD1237区画溝跡より新しく、SD1140区画溝跡より古い。平面形は長軸3.8m、短軸1.5mの歪んだ楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は西壁を除いて急に立ち上がる。深さはSD1140の底面から0.8mある。堆積土は2層に分けられ、第2層は壁の崩落土、第1層は自然堆積である。

【SK1235土壙】（第37・46図）

調査区中央部で確認した。平面形は長軸4.8m、短軸3.9mの楕円形である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がり上部は外に開く。深さは1.5mある。堆積土は2層に大別できる。第2層は壁の崩落土を含む自然堆積の過程で炭化物や炭化物を含む土砂などが廃棄されたもの、第1層は人為的な埋土と考えられる。

堆積土から在地産片口鉢（第48図1）・用途不明の石製品（第48図6）・磨面をもつ石・砥石（第48図3）、ススが付着した河原石が出土している。

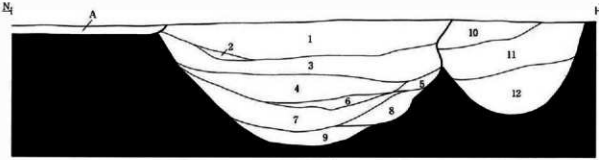
【SK1241土壙】（第37・46図）

調査区南部で確認した。平面形は長軸5.0m、短軸3.4mの楕円形である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がり上部は外に開く。深さは1.0mある。堆積土は2層に大別できる。第2層は壁の崩落土を含む自然堆積、第1層は人為的な埋土と考えられる。

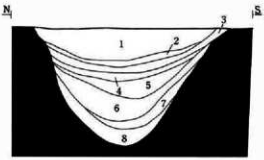
堆積土から砥石に転用された平瓦（第44図1）、砥石（第44図6）・磨石・折敷（第44図5）・加工が施された刳抜材（第44図5）、ススが付着した河原石が出土している。

【SK1242土壙】（第37図）

調査区南部で確認した。SD1231区画溝跡より新しい。平面形は径2.0m前後の円形である。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さはSD1231の確認面から0.9mある。堆積土は2層に大別でき、第2層はオリーブ黒色砂質シルトで自然堆積、第1層は地山ブロックを含む暗褐色シルト質粘土で人為的な埋土と考えられる。堆積土から木製品の小片が出土している。



〈SK1247・1250〉



〈SK1204〉

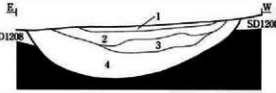
No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色（2.5Y3/2）シルト	地山ブロックを多く含む	第1層（人為堆積）
2	暗色（10Y3/4/4）シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	
3	暗褐色（10YR3/3）シルト		
4	黒褐色（10YR2/2）シルト		
5	暗色（10Y3/4/6）シルト質粘土	壁の崩落土	
6	黒色（10YR1.7/1）シルト		第2層
7	オリーブ黒色（5/3/3）シルト	地山ブロックを含む	
8	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	
9	オリーブ黒色（5Y3/1）砂質シルト	地山ブロックを含む	
10	暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質粘土	地山ブロックを含む	第1層（人為堆積）
11	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土	地山ブロックを多く含む	第2層
12	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土	地山ブロックを多く含む	
A	オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト		SD1245埋積土

〈SK1247・1250〉

〈SK1224〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）シルト		第1層
2	黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
3	黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
4	黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト	植物遺体を含む	
5	黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト		第2層
6	黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト	植物遺体を含む	
7	灰色（5Y5/1）粘土質シルト	地山ブロックを含む	
8	灰色（5Y4/1）粘土質シルト		

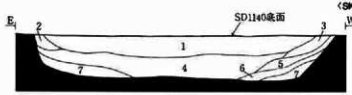
〈SK1204〉



〈SK1225〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	灰黄褐色（10YR4/2）シルト		
2	黒褐色（10YR3/2）シルト	地山ブロックを多く含む	第1層（人為堆積）
3	にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト		
4	灰黄褐色（10YR4/2）シルト		
5	褐灰色（10YR4/1）粘土	地山ブロックを含む	第2層
6	褐灰色（10YR4/1）粘土	地山をさく状に含む	
7	褐灰色（10YR4/1）粘土		
8	褐灰色（10YR4/1）粘土	炉の崩落土	第3層
9	褐灰色（10YR4/1）粘土		

〈SK1224〉



〈SK1234〉

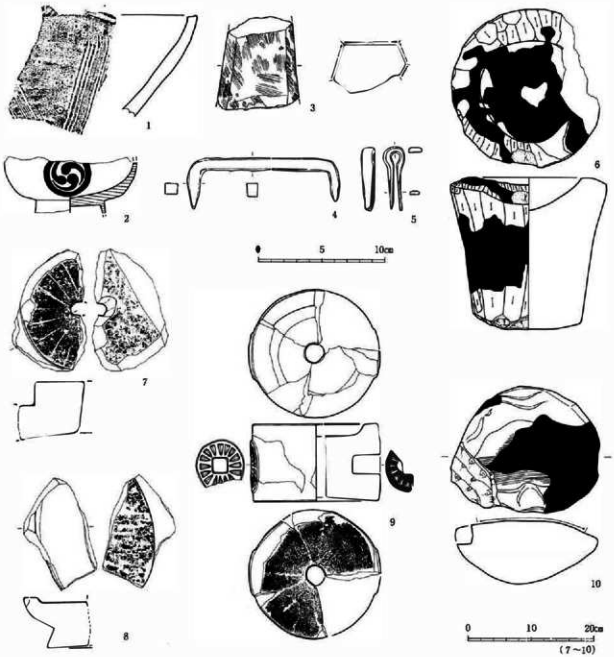
No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	オリーブ黒色（5Y3/2）粘土		
2	灰褐色（10YR3/1）粘土		
3	灰色（5Y4/1）砂		
4	オリーブ黒色（5Y3/1）粘土		

〈SK1225〉

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色（10YR2/1）粘土		
2	黒褐色（10YR3/2）砂質シルト		
3	褐灰色（10YR4/1）砂		第1層
4	黒褐色（10YR2/2）粘土	砂を少し含む	
5	黒褐色（10YR3/1）粘土		
6	黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト	植物遺体を含む	第2層
7	褐灰色（10YR4/1）砂	黄褐色粘土ブロックを含む	

〈SK1234〉

第47図　2区の土壌断面図（2）



No.	遺構	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	SK1235・第2層	陶器	片口鉢	在地	格目あり	17－2	49
2	SD1233・埋積土	漆製品	椀		外面：黒漆→巴文（赤漆）　内面：赤漆	18－8	50
3	SK1235・埋積土	石製品	硯石		使用面：4面以上　【細粒砂岩】	18－15	51
4	SD1246・埋積土	金属製品	鏃		鉄製　長さ：12.1cm　厚さ：0.9cm	18－1	52
5	SD1246・埋積土	金属製品	鏃箭		鉄製　長さ：5.0cm　幅：0.8～1.0cm　厚さ：0.2～0.4cm	18－2	53
6	SK1235・埋積土	石製品			上径：12.4cm 下径：8.6cm 高さ：10.5cm 壁厚度：2.5cm 台脚高さ：2.6cm　【卸石】	18－12	54
7	SK1206・第1層	石製品	茶臼・下臼		放射状の目出　軸穴：2.3cm　【安山岩】	19－3	55
8	SK1205・底面	石製品	茶臼・下臼		臼目不明　底面にノミ痕　【安山岩】	19－4	56
9	SK1206・埋積土	石製品	茶臼・上臼		径：25cm　高さ：12cm　軸穴：2.9～3.1cm　供手穴：一部2cm　【安山岩】	19－1	57
10	SK1205・第2層	石製品	硯石		砥ぎ跡　幅：20.0cm　厚さ：1.17cm　【安山岩】		58

第48図　ＳＫ1205・1206・1235土壙、ＳＤ1246溝跡出土遺物

【ＳＫ1247土壙】（第37・47図）

調査区南部で確認した。ＳＫ1250土壙、ＳＤ1238溝跡より新しく、ＳＤ1246溝跡より古い。平面形は径3.2～3.6mの円形である。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは1.3mある。堆積土は２層に大別できる。第２層は壁の崩落土を含む自然堆積、第１層は人為的な埋土と考えられる。

【ＳＫ1250土壙】（第37・47図）

調査区南部で確認した。ＳＫ1247土壙、ＳＤ1238溝跡より古い。平面形は径2.0mの円形である。底面は皿状で、壁は比較的急に立ち上がる。深さは1.0mある。堆積土は２層に大別できる。第２層は壁の崩落土を含む自然堆積、第１層は人為的な埋土と考えられる。

Ｆ．溝跡

【ＳＤ1217溝跡】（第36・49図）

調査区北部から中央部で確認した南北溝跡で、30m分を検出した。ＳＢ1358建物跡、ＳＫ1206土壙より新しい。上幅0.9m、下幅0.6m、深さは0.2mある。方向はＮ－28°－Ｗ前後である。底面は平坦で、断面形は箱形に近い。堆積土は２層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

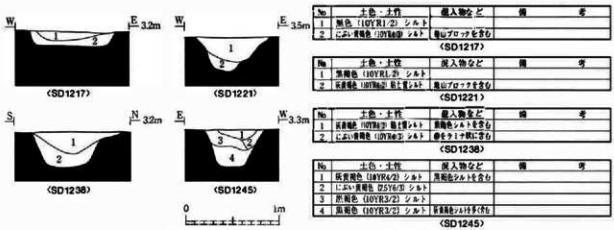
【ＳＤ1221溝跡】（第35・36・49図）

調査区北部から中央部で確認した南北溝跡で、50m分を検出した。ＳＤ1325溝跡より新しく、ＳＢ1361・1362・1364～1366建物跡、ＳＸ1600道路跡、ＳＤ1140区画溝跡より古い。上幅0.9m、下幅0.6m、深さは0.4mある。方向はＮ－15°～36°－Ｗである。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は２層に分けられるが、いずれも自然堆積である。

１区北端で検出したＳＤ1196溝跡は、本溝と同一遺構とみられる（第28図）。その場合、南北長は、77.5mとなる。また、２区南部のＳＤ1238溝跡も同一遺構である可能性がある。

【ＳＤ1238溝跡】（第37・49図）

調査区南部で確認した南北溝跡で、17m分を検出した。ＳＫ1250土壙より新しく、ＳＸ1600道路跡、ＳＫ1247土壙、ＳＤ1246溝跡より古い。上幅0.6～1.0m、下幅0.4～0.8m、深さは0.2mある。方向は２区南端付近でＮ－13°－Ｗであるが、ＳＫ1247土壙の北で西へ振れる。底面は平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は２層に分けられる。第２層は自然堆積、第１層は人為的な埋土と考えられる。



No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色（10YR1.7/1）シルト	地山ブロックを含む	
2	にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト		

(SD1217)

No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色（10YR2/2）シルト		
2	灰黄褐色（10YR6/2）粘土質シルト	地山ブロックを含む	

(SD1221)

No	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルト	黒褐色シルトを含む	
2	にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト	砂をラミナ状に含む	

(SD1238)

No	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色（10YR4/2）シルト	黒褐色シルトを含む	
2	にぶい黄橙色（2.5Y6/3）シルト		
3	黒褐色（10YR3/2）シルト		
4	黒褐色（10YR3/2）シルト	黄褐色シルト粒多く含む	

(SD1245)

第49図　ＳＤ1217・1221・1238・1245溝跡断面図

【ＳＤ1245溝跡】（第37・49図）

調査区南部東側で確認した東西溝跡で11m分を検出した。ＳＤ1243溝跡より新しく、ＳＢ1373建物跡、ＳＤ1246溝跡より古い。上幅0.6m、下幅0.3m、深さは0.4mある。方向はＮ－3°～18°－Ｅである。底面は平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は2層に大別できる。第2層は自然堆積、第1層は人為的な埋土と考えられる。

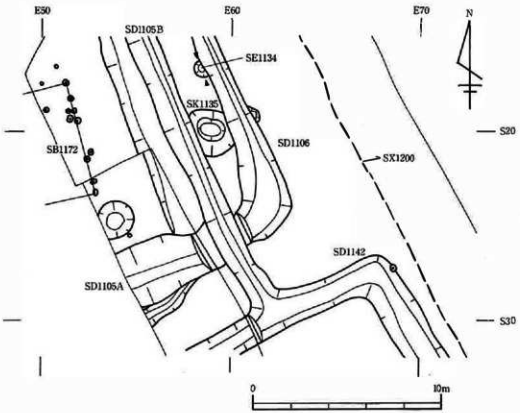
（5）3区

掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などを確認した。調査区東側は近世以降の水田によって削平されており、これらの地域では井戸跡や土壙、溝跡がまばらに確認されたにすぎない。また、調査区東端で古代末期に形成されたＳＸ1200湿地跡を確認した。遺物は井戸跡、土壙、溝跡から木製品、石製品などが少量出土している。

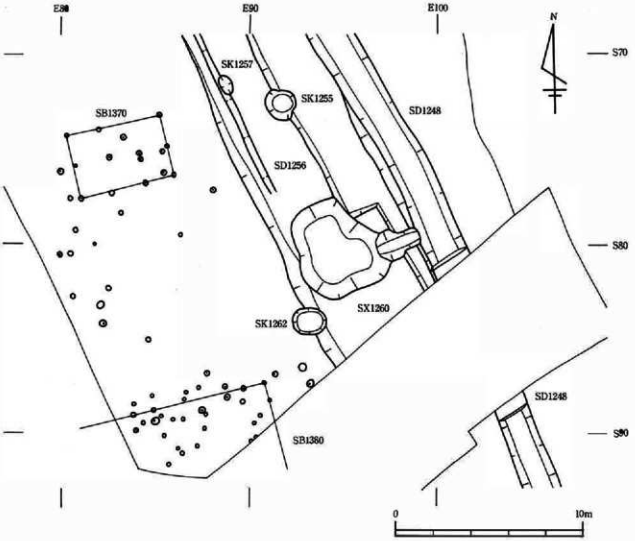
A．掘立柱建物跡

建物を15棟確認した。調査区北部、中央部、南部に分布するが、双方とも仙台市教委の調査区に延びて全容がわからないものがある。また、市教委の調査区におさまる建物もあることから、建物の数はこれより増える。

建物の方向は、北部と中央部がＮ－15°～25°－Ｗ　、南部はＮ－8°～25°－Ｗと、いずれも北で西に傾く。柱穴は20～30cm前後の円形が多い。



第50図　3区北部の検出遺構



第51図　3区南部の検出遺構

－北部の建物－

【ＳＢ1172建物跡】（第52図）

調査区北部で確認した南北３間、東西１間以上の建物跡である。柱穴は４箇所で検出しており、３箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。建物は東側柱列で総長6.1m、柱間寸法は北から2.1m、2.1m、1.9mとみられ、方向はＮ－15°－Ｗである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは20cmある。埋土は地山ブロックを含む暗灰黄褐色シルトである。

【ＳＢ1173建物跡】（第52図）

調査区北部で確認した南北２間、東西１間以上の建物跡である。柱穴は３箇所で検出しており、２箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。建物は東側柱列で総長5.0m、柱間寸法は北から2.6m、2.4mとみられ、方向はＮ－22°－Ｗとみられる。柱穴は径20～30cmの円形、深さは10～20cmある。埋土は地山ブロックを多く含むオリーブ褐色シルトである。

－中央部の建物－

【ＳＢ1350建物跡】（第53図）

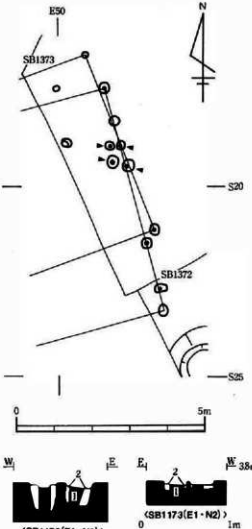
調査区中央部で確認した東西２間以上、南北１間の東西棟建物跡である。柱穴は４箇所で検出しており、３箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。建物は梁行1.6m、方向はＮ－15°－Ｗとみられる。柱穴は径30～50㎝の円形、深さは30㎝ある。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトである。

【ＳＢ1351建物跡】（第53図）

調査区中央部で確認した東西２間以上、南北１間の東西棟建物跡である。柱穴は５箇所で検出しており、５箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。建物は梁行1.0m、方向は北側柱列で測るとＥ－15°－Ｎとみられる。柱穴は径20～40cmの円形、深さは35cm前後ある。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ1352建物跡】（第53図）

調査区中央部で確認した東西３間以上、南北１間の東西棟とみられる建物跡である。柱穴は５箇所で検出しており、４箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。建物は梁行5.6m、方向は南側柱列で測るとＥ－22°－Ｎとみられる。柱穴は径30cm前後の円形、深さは30～40cm前後ある。埋土は暗褐色シルトである。



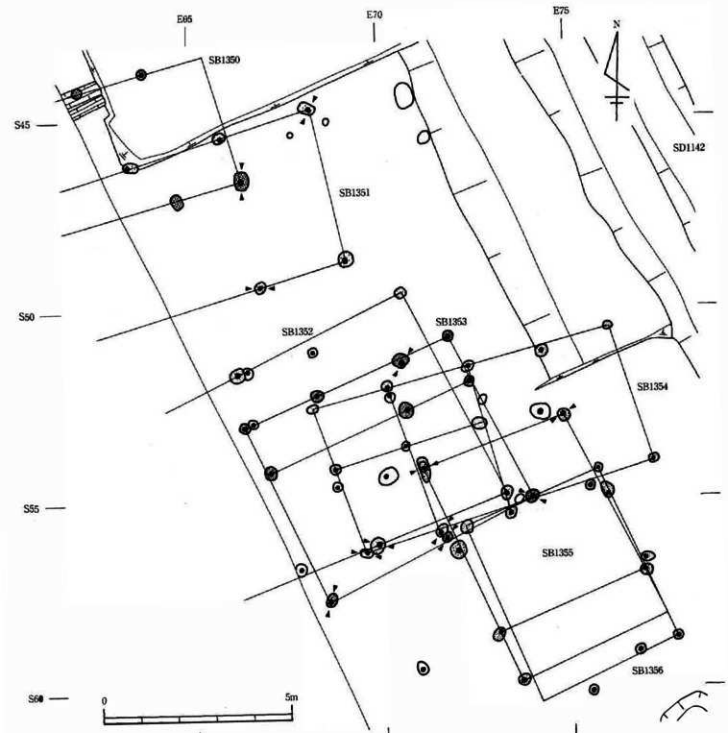
第52図　ＳＢ1172・1173建物跡

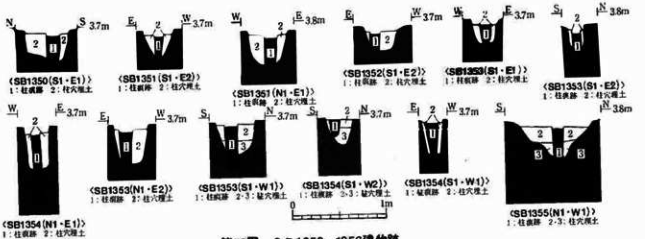
【ＳＢ1353建物跡】（第53図）

調査区中央部で確認した東西３間、南北１間の東西棟で北に庇または縁が付く建物跡である。身舎と庇または縁の柱穴で規模や柱痕跡に違いが認められない。双方を含めて10箇所で検出しており、すべてで径15cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が身舎北側柱列で総長5.9m、柱間寸法は西から4.0m（２間分）、1.9m、梁行は身舎西妻で3.7m、庇または縁の出は1.3mである。方向は西妻で測るとＮ－25°－Ｗである。柱穴は径30～40㎝の円形、深さは30～40cmある。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ1354建物跡】（第53図）

調査区中央部で確認した東西４間、南北２間の東西棟建物跡である。建物内部は西２間が棟通り下に束柱穴があることから床張りと考えられる。柱穴は側柱と束柱で規模や柱痕跡に違いは認められない。双方を含めて13箇所で検出しており、うち10箇所で径15cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長8.1m、柱間寸法は西から2.0m、1.9m、2.2m、1.9m、梁行は西妻で総長3.9m、柱間寸法は北から1.6m、2.3mである。方向は西妻で測るとＮ－19°－Ｗである。柱穴は径20～30㎝の





第53図　ＳＢ1350～1356建物跡

円形、深さは25～40cmある。埋土は炭化物を含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ1355建物跡】（第53図）

調査区中央部で確認した南北２間、東西１間の南北棟で南妻に１間の張出しが付くとみられる建物跡である。柱穴は身舎と張出し部で規模や柱痕跡に違いは認められない。双方を含めて７箇所で検出しており、すべてで径15cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長4.8m、柱間寸法は2.4m等間、張出しの出は1.4mで、梁行は南妻で4.2mである。方向は西側柱列で測るとＮ－25°－Ｗである。柱穴は径20～35cmの円形、深さは40cmある。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ1356建物跡】（第53図）

調査区中央部で確認した南北２間、東西は北妻で２間、南妻で３間の南北棟建物跡である。柱穴は７箇所で検出しており、うち５箇所で径10cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長4.9m、柱間寸法は北から2.7m、2.2m、梁行は北妻で総長3.8m、柱間寸法は西から1.5m、2.3mである。方向は東側柱列で測るとＮ－25°－Ｗである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

－南部の建物－

【ＳＢ1370建物跡】（第54図）

調査区南部で確認した東西３間、南北２間の東西棟建物跡である。柱穴は９箇所で検出しており、うち３箇所で径10cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長5.1m、柱間寸法は西から1.7m、1.8m、1.6m、梁行は東妻で総長3.3m、柱間寸法は北から1.7m、1.6mである。方向は東妻で測るとＮ－13°－Ｗである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは20cmある。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ1371建物跡】（第54図）

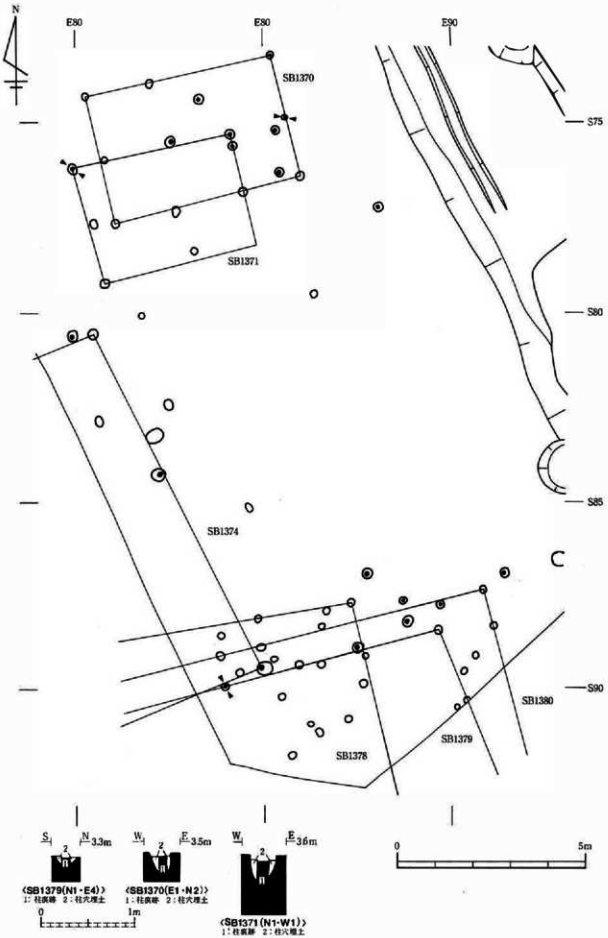
調査区南部で確認した東西３間、南北２間とみられる東西棟建物跡である。柱穴は６箇所で検出しており、うち３箇所で径10cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.2m、柱間寸法は西から2.7m（２間分）、1.5m、梁行は西妻で総長3.0m、柱間寸法は1.5m等間とみられる。方向は北側柱列で測るとＥ－13°－Ｎである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは25cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1374建物跡】（第54図）

調査区南部で確認した南北２間、東西１間以上の建物跡である。柱穴は３箇所で検出しており、すべてで径15cmの柱痕跡を確認している。南北の総長は9.9m、柱間寸法は北から4.1m、5.5mとみられ、方向はＮ－25°－Ｗである。柱穴は径20～40cmの円形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトまたは地山ブロックが主体で黒褐色シルトを含む。

【ＳＢ1378建物跡】（第54図）

調査区南部で確認した南北２間、東西２間以上の建物跡である。柱穴は５箇所で検出しているが、柱痕跡は確認できなかった。南北の総長は5.1m、柱間寸法は北から2.2m、2.9mとみられ、方向は



第54図　ＳＢ1370・1371・1374・1378～1380建物跡

N－10°－Wである。柱穴は径20cmほどの円形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

【ＳＢ1379建物跡】（第54図）

調査区南部で確認した東西３間以上、南北２間以上の建物跡である。柱穴は５箇所で検出しており、２箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。東西の総長は5.8m、柱間寸法は西から2.0m、1.6m、2.2mとみられ、方向はN－14°－Wである。柱穴は径20～30cmの円形、深さは25cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

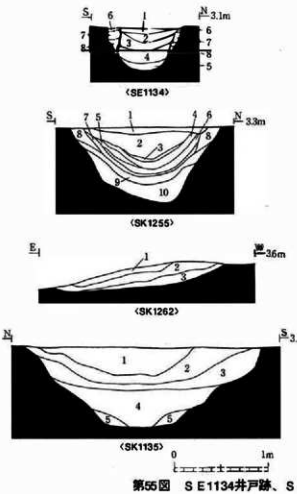
【ＳＢ1380建物跡】（第54図）

調査区南部で確認した東西４間以上、南北２間以上の建物跡である。柱穴は５箇所で検出しており、１箇所で径10cmの柱痕跡を確認している。総長は東西7.7m以上、南北は2.2m以上ある。方向はN－15°－Wである。柱穴は径20cmの円形、深さは20～30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

C．井戸跡

【ＳＥ1134井戸跡】（第50・55図）

調査区北部で確認した。ＳＤ1106区画溝跡より古い。掘方の平面形は径0.8mの円形とみられ、深



No	土色・土性	混入物など	備　考
1	青褐色（2.5Y4/1）粘土質シルト	地山ブロックを含む	第１層（人為堆積）
2	灰黄色（2.5Y6/2）粘土質シルト	黄色ブロックを多量に含む	
3	黄褐色（2.5Y4/1）粘土質	黄色ブロックを多く含む	
4	黒褐色（2.5Y3/1）粘土	黄色ブロックを多量に含む	
5	灰色（5Y5/1）砂質シルト		第２層
6	黄灰色（2.5Y6/1）シルト	黄色ブロックを多く含む	掘方埋土
7	黄灰色（2.5Y4/1）シルト	黄色ブロックを多く含む	
8	灰黄色（2.5Y6/2）砂		

(SE1134)

No	土色・土性	混入物など	備　考
1	暗灰色（10YR4/1）粘土		基本層序第１ｃ層
2	明褐色（10YR3/2）シルト	黄色ブロック、炭化粒含む	第１層（人為堆積）
3	黒褐色（10YR2/1）粘土質シルト	炭化物含む	
4	炭化物層	黄色ブロック、焼土含む	
5	褐灰色（10YR4/1）シルト	黄色ブロック、炭化粒含む	
6	炭化物と灰の薄い互層		第２層
7	にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト	褐灰色粘土を含む	
8	褐灰色（10YR4/1）シルト	黄色ブロック、炭化物含む	
9	黒褐色（10YR2/2）粘土	黄色ブロック、炭化物含む	
10	黒色（10YR2/1）粘土	地山ブロックを含む	

(SK1255)

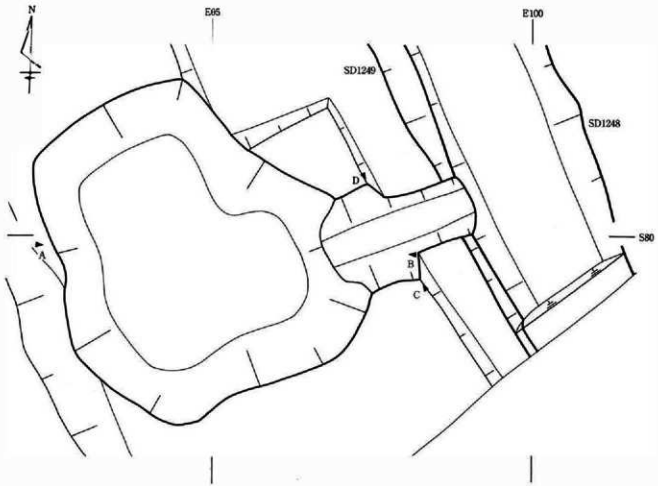
No	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒褐色（10YR3/2）シルト		
2	黒色（10YR2/1）粘土	礫し、炭化物を多く含む	
3	にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト	暗灰色シルトを含む	壁崩落土が主体

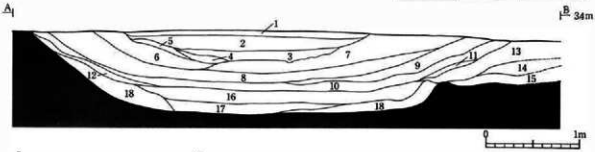
(SK1262)

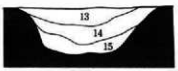
No	土色・土性	混入物など	備　考
1	黒灰色（2.5Y4/1）粘土質シルト	黄色ブロックを多く含む	第１層（人為堆積）
2	黄灰色（2.5Y5/1）粘土質シルト	黄色ブロックを多く含む	
3	灰色（5Y5/1）粘土質シルト	砂との互層	第２層
4	灰色（7.5Y4/1）砂質シルト	地山ボブロック含む	
5	にぶい黄色（2.5Y6/3）砂	壁の崩落土	

(SK1135)

第55図　ＳＥ1134井戸跡、ＳＫ1135・1255・1262土壙断面図







No.	土色・土性	混入物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	地山ブロックを含む	
2	炭化物・灰主体層		
3	炭化物・灰が多い、互層となる層		
4	地山ブロック主体層	炭化物粒と炭化物多い	
5	炭化物主体層	灰や焼土を含む	
6	炭化物・灰が薄い互層となる層	1層から炭化物・赤焼土	
7	地山ブロック主体層	炭化物粒も炭化物含む	第1層
8	炭化物・灰が薄い互層となる層		
9	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	地山ブロック多く含む	
10	黒褐色 (10YR3/2) 粘土		
11	暗灰色 (10YR4/1) シルト		
12	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト		
13	暗灰色 (10YR4/1) 粘土		
14	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト		
15	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山ブロックを含む	第2層
16	暗灰色 (10YR4/1) 粘土	上面から茶褐土	
17	灰褐色 (10YR3/1) 粘土		
18	暗灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト		第3層

第56図　S X1260遺構

さは0.5mある。断面形は円筒形で、中央に径0.6mの曲物を据えており、側板が3段認められる。枠内部の堆積土は2層に大別できる。第2層は機能時の堆積土、第1層は人為的な埋土と考えられる。掘方埋土は地山ブロックや炭化物を含む褐灰色シルトや黒色粘土である。

D. 土壙

4基確認した。平面形は円形を基調とするもの（SK1255・1262）と楕円形を基調とするもの（SK1135・1257）とがある。以下、主な土壙について記述する。

【SK1135土壙】（第48・55図）

調査区北部で確認した。SD1105・1106区画溝跡より古い。平面形は長軸2.4m以上、短軸2.4mの楕円形とみられる。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは0.9mある。堆積土は2層に大別できる。第2層は壁の崩落土を含む自然堆積、第1層は人為的な埋土と考えられる。

【SK1255土壙】（第50・55図）

調査区南部で確認した。平面形は径1.8mの円形である。底面は北に向けて傾斜しており、壁は比較的急に立ち上がる。深さは1.0mある。堆積土は2層に大別できる。第2層は壁の崩落土を含む自然堆積の過程で、焼土や炭化物・土砂などが廃棄されたもの、第1層は人為的な埋土と考えられる。

【SK1262土壙】（第50図）

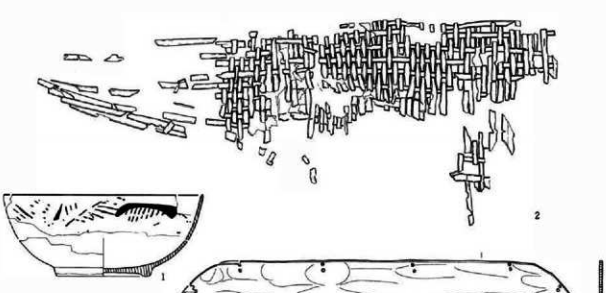
調査区南部で確認した。平面形は径1.7mの円形である。底面は東に向けて傾斜しており、断面形は皿状である。深さは0.2mある。堆積土は3層に分けられ、第1・3層が自然堆積、第2層は鉄滓や焼土・炭化物を含む土砂の廃棄層と考えられる。

E. その他の遺構

【SX1260遺構】（第56図）

調査区南端で確認した。南北5.1m、東西4.7mのL字形をした土壙の東に溝が取付く遺構である。溝はSD1248区画溝跡と接続する。土壙の底面は南北3.5m、東西3.0mのL字形で平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。深さは1.1mある。接続する溝は上幅1.6m、下幅0.7mで、深さは0.5mある。堆積土は3層に大別できる。第3層は土壙底面上の壁の崩落土、第2層は機能時の堆積土、第1層は自然堆積の過程で遺物や焼土・炭化物・土砂などが廃棄された層と考えられる。

遺物は第2層から漆器椀、第1層から片口鉢・漆器椀（第57図1）・楕円形曲物の底板（第57図3）・笊（第57図2）が出土している。



No.	出土層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録
1	第1層	磁製品	椀		口径：18cm 高台径cm（欠損） 外面施釉→ヘラ文（赤褐） 内面：赤褐 【ゲト底】	18－9	59
2	第1層	竹製品	笠		長さ：44cm以上 幅：15cm以上 1本割り1本組え	12	60
3	第1層	木製品	曲物・底板		径さ：316cm 厚さ：0.9cm 【ヒノキ科】	18－10	64

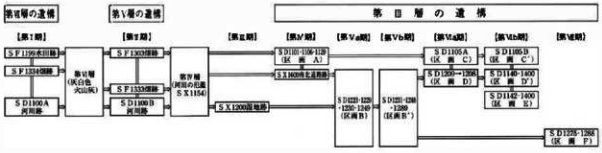
第57図　ＳＸ1260遺構出土遺物

第Ⅵ章　まとめ

第Ⅲ章で述べたとおり、宮城県教育委員会による中野高柳遺跡の発掘調査は５年に及んでいる。今回報告を行ったのは、そのうちの住宅地区西側の１～４区の古代、１～３区の中世以降についてで、調査自体は来年度も予定している。そのため、ここでは住宅地区における遺構変遷の概要を提示するにとどめ、遺構期ごとの詳しい内容の検討は、今後の調査によって全容が明らかとなった段階で行うことにする。

１．遺構の重複関係

今回報告した遺構は、基本層序第Ⅶ層のものと第Ⅴ層のもの、第Ⅲ層～第Ⅴ層で検出したものがある。第Ⅲ層は中世以降の旧表土であるが、残りが悪く、中、近世の遺構の大部分は、第Ⅳ層・第Ⅴ層で確認した。第Ⅶ層の検出遺構は水田跡と畑跡で、これらは第Ⅵ層である灰白色火山灰に覆われている。第Ⅴ層検出遺構は、畑跡である。その後河川の氾濫（第Ⅳ層）を経て中世以降の屋敷が連続して営まれている。以上の関係を整理したのが第58図で、これをもとに遺構期を大別７期設定した。このなかで第Ⅲ期と第Ⅳ期は、相互の重複関係は認められないが、出土遺物から第Ⅲ期が12世紀代、第Ⅳ期は13世紀以降とみられることから第Ⅲ期→第Ⅳ期と考えた。また、第Ⅵ期と第Ⅶ期も第Ⅴ期より新しいが相互の重複関係はない。そこで出土遺物をみると、第Ⅶ期は近世陶磁器を含むが、第Ⅵ期は中世の陶磁器のみで近世陶磁器が全く認められないことから、第Ⅵ期→第Ⅶ期と考えた。



第58図　遺構の重複関係

2．遺構期の概要と年代

【第Ⅰ期】（第59図）

基本層序第Ⅶ層上面で確認した遺構である。北西部の自然堤防縁辺部でＳＦ1199水田跡、南西部でＳＦ1334畑跡を検出した。ＳＦ1199水田跡は、自然堤防の縁辺から後背湿地にかけて作られており、耕作域の東端はＳＤ1150水路跡によって画されている。内部は、一辺が6.0～7.5mの小区画水田に分割されている。ＳＦ1334は、ＳＤ1100河川跡に接続するＳＤ1256・1257溝跡によって北と西を区画されている。南への延びは流通地区で確認しており、耕作域は東西23m、南北130m以上に及ぶ。

年代はＳＦ1334畑跡が、耕作痕、区画溝ともに底面近くで灰白色火山灰が確認されていることから、10世紀前葉の火山灰降下によって廃絶したと考えられる。一方、ＳＦ1199水田跡は廃絶後に間層が形成されたのちに灰白色火山灰が堆積している。したがって、耕作年代は火山灰の降灰とはある程度の時間差を考慮しなければいけないが、沖積地における遺構の埋没状況を考慮すると、９世紀末から10世紀前葉の間におさまるとみられる。

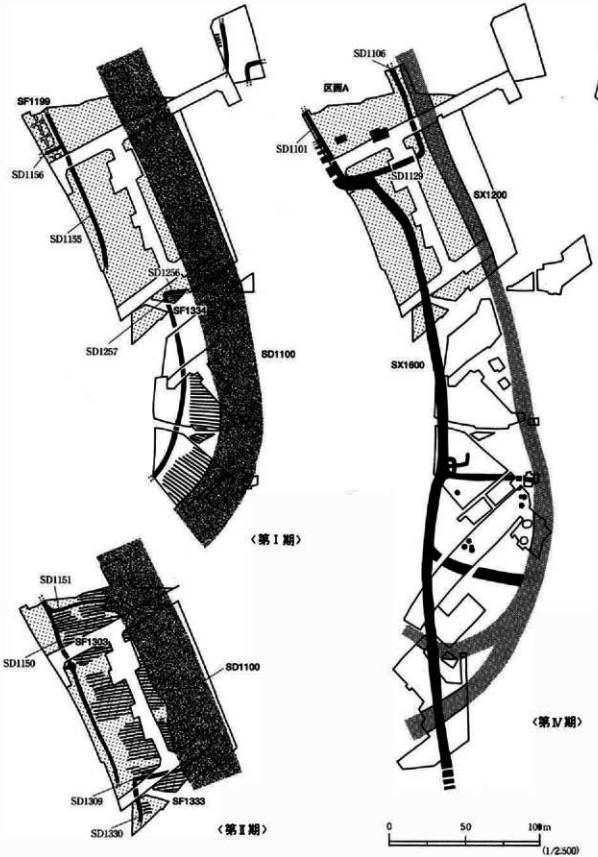
【第Ⅱ期】（第59図）

基本層序第Ⅴ層で確認したＳＦ1303畑跡、ＳＦ1333畑跡の時期である。ＳＦ1303は東をＳＤ1100河川、西はＳＤ1150溝跡、南はＳＤ1309溝跡によって画されており、北は調査区外へ延びる。耕作域の規模は東西53～55m、南北120m以上で、内部はＳＤ1151溝跡によって細分されている。ＳＤ1151の南にひろがる耕作域は、南北110mある。ＳＦ1333は東をＳＤ1100河川跡、北はＳＤ1309溝跡、西はＳＤ1330溝跡によって画され、南は調査区外へ延びる。耕作域の規模は東西40m、南北33m以上である。

ＳＦ1303・1333は、ＳＤ1100と接する東側およびＳＤ1150・1151の接続部分が河川の氾濫によって壊されている。とくにＳＤ1151と河川の接続部は土坑状に大きく壊されており（ＳＸ1154）、河川の氾濫が畑の廃絶原因と考えられる。年代は上限が灰白色火山灰の降灰年代で、下限はＳＸ1154に廃棄された土器の年代が10世紀前半であることから、10世紀前葉以降の10世紀前半代と考えられる。

【第Ⅲ期】

ＳＤ1100河川跡は、氾濫（基本層序第Ⅳ層）後湿地化する（ＳＸ1200）。ＳＸ1200はゴミ捨て場として利用されており、かわらけ・陶器・磁器・木製品・漆製品・金属製品・動物遺体・植物遺体などが出土した。堆積土は２層に大別が可能で、かわらけは下層でロクロ調整のみ、上層はロクロ調整と手づくねが共伴して出土した[註1]。かわらけの特徴から下層が12世紀前半、上層は12世紀中頃から後


SF1199
SD1156
SD1155
SD1256
SF1334
SD1257
SD1100
〈第Ⅰ期〉
SD1151
SF1332
SD1150
SD1100
SD1309
SF1333
SD1330
〈第Ⅱ期〉
SD1106
区画A
SD1101
SD1129
SX1200
SX1600
〈第Ⅳ期〉
N
0
50
100m
(1/2,500)
本報告収録地区
土壙
区画溝跡
畑跡
建物跡
河川跡
井戸跡
湿地跡

第59図　遺構変遷図（1）

区画名	区　画　溝	規　　模	遺構期	年　代	備　　考
区画A	SD1101・1106・1129	東西53～62m　南北58m以上	第Ⅳ期	13世紀中心	SX1600道路が接続
区画B	SD1223・1229・1230・1249	東西63m以上　南北105m？	第Ⅴa期		
区画B′	SD1231・1248・1289	東西40～50m　南北105m	第Ⅴb期		
区画C	SD1105A	東西24～29m　南北38～40m	第Ⅵa期		南辺中央に土橋（SX1197）
区画D	SD1208・1209・1237	東西32～35m　南北34～35m			南辺中央に土橋（SX1399）、北西隅に土橋（SX1398）
区画C′	SD1105B	東西24～29m　南北38～40m			
区画D′	SD1140・1480	東西32～35m　南北34～35m	第Ⅵb期		南辺中央に土橋（SX1399）
区画E	SD1142・1480	東西16～21m　南北34～35m			
区画F	SD1275・1288A・B	東西20m以上　南北10m以上	第Ⅶ期	17世紀前葉	

第3表　区画の規模

半と考えられる。この時期の遺構は、SD1100河川跡右岸の1～4区で確認されていないが、遺物の出土状況から付近に居住施設等が想定されるため、遺構期を設けた。

中世以降の屋敷跡は大別4期（第Ⅳ期～第Ⅶ期）に分けられた。屋敷跡は、幅3mほどの溝によって方形に囲まれている。方形区画は6つ確認しており、それぞれの規模は第3表に示した。

【第Ⅳ期】（第59図）

SD1101・1106・1129によって囲まれた時期で、区画（区画A）の大きさは東西53～62m、南北58m以上ある。内部は西側中央にSB1159建物跡があるほか、東側中央や南に建物が配置されるとみられる。区画南辺の溝には、SX1600道路跡東側溝が接続する。SX1600は流通地区の調査でも確認しており、遺跡内で確認した総長は南北390m以上ある。路面の両端は素掘りの側溝を伴うが、西側溝は東側溝に較べて幅が狭く浅い。東側溝は2時期の変遷がある。路幅は東側溝Bと西側溝の心々で測ると、3.0～4.5mである。また、流通地区では、SX1600の東に半町規模の屋敷跡が検出されており、区画Aと同時期と考えられる（村田・茂木：2002）。

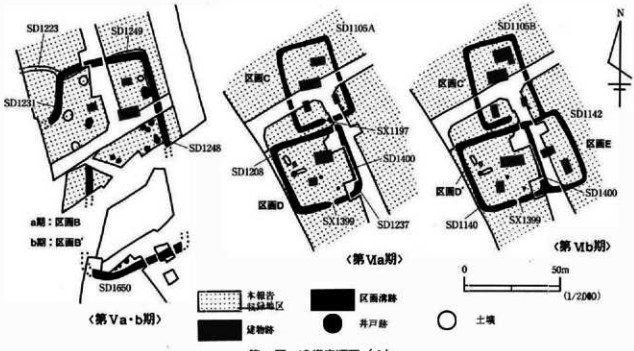
【第Ⅴ期】（第60図）

2時期の変遷（a→b）がある。b期はSD1231・1248・1284・1289によって囲まれた時期で、区画（区画B′）の大きさは東西40～50m、南北62m以上あり、西辺は中央が西へ張り出す。南辺は流通地区の調査で確認（SD1650）しており、区画B′の南北長は105mほどと考えられる（村田・茂木：2002）。a期の溝はSD1223・1229・1230・1249で、b期の溝と重複する部分が多く、区画北辺や東辺で確認できるのみである。区画（区画B）の東西長は63m以上ある。

内部は中央北側で建物が重複するが、区画内での位置が北に偏りすぎ、建物は小型で庇をもつものがない、といった特徴から、主屋はもう少し南（4区周辺）にあるとみられる。建物群から離れた区画の縁辺部は、西側で竪穴遺構、北西部は大型の土壙、東側で区画溝から水を引き込んだ大型の土壙（SX1260）が認められる。また、東側の土壙（SK1262）堆積土からは、鉄滓や焼土・炭化物が出土しており、周辺で鍛冶を行っていたと考えられる。

【第Ⅵ期】（第60図）

2時期の変遷（a→b）がある。この時期になると、屋敷が複数の区画から構成されるようになる。その一方、第Ⅳ期・第Ⅴ期の屋敷の規模は半町以上あったが、第Ⅵ期の屋敷は1つの区画が30mを前



第60図　遺構変遷図（2）

後する規模になる。

a期はSD1105Aによって囲まれた区画C と、その南西部に隣接するSD1208・1209・1237で囲まれた区画Dからなる。区画Cは北辺が24m、南辺29m、東辺38m、西辺で40mあり、南辺がやや長い方形である。南辺中央部には幅1.8mの土橋（SX1197）が設けられている。区画Dは溝の重複から2小期（a1→a2）に分けられる。規模は北辺が35m、南辺32m、西辺34mであり、東辺は34～35mとみられる。南辺中央部には幅2.5mの土橋（SX1399）が設けられる。また、a1期は北西隅から1.5mのところに、幅4mの土橋（SX1398）が設けられたとみられる。

b期はa期の区画溝が改修された区画C′・D′に加えて、SD1142に囲まれた区画Eが設けられ、3つの区画からなる時期である。これに伴い区画C′東辺の溝は西へ折れず、南へ5m延びてSD1142に接続する。区画の規模は区画D′が変わらず、区画C′は南東部が東西16m、南北5mほど拡張される。区画Eは北辺16m、南辺20m、西辺34m、東辺37mで、東西幅は西に隣接する区画D′の約半分である。

区画内部については、充分な検討を行っていないためa・b期まとめて述べる。区画C・C′の建物は、①中央の庇や縁をもつ東西棟の大型建物群（SB1160～1164）、②①の北東にある①と同程度の東西棟を主体とする建物群（SB1167～1171）、③①南東の建物（SB1172・1173）、④①南西の南北棟を主体とする建物群（SB1178・1179・1182、SA1181）の4グループに分けられる。これらの中で、①は区画内の位置、建物規模から主屋、その南の③・④は広場をはさんで東西に作られた副屋と考えられる。主屋の北にもそれと同程度の大型建物が配される。区画C・C′の4つの建物群は、ほぼ同位置で建替えを繰り返しており、建物配置が固定的かつ継続的であったと考えられる(注2)。他の施設としては井戸があり、広場に作られている。

区画D・D′での建物群は、⑤中央の庇や縁をもつ東西棟の大型建物群（SB1361～1366）、⑥⑤

南西の建物群（ＳＢ1357～1359・ＳＡ1360）の２グループに分けられる。●は区画内の位置、建物規模から主屋、その南西の⑥は広場の西に作られた副屋と考えられる。これらの建物はほぼ同位置で建替えを繰り返すことから、配置が固定的・継続的であったと考えられる。井戸は、広場や主屋の西に作られる。区画Ｄ・Ｄ′の建物配置は、区画Ｃ・Ｃ′と較べて主屋北の大型建物と副屋の一方が欠けている。建物や井戸のほかに主屋の西から北西には、大型の土壙が認められる。

区画Ｅは、区画Ｃ・Ｃ′・Ｄ・Ｄ′のような大型建物はみられず、桁行３間以下の小型建物が多い。これらの建物は区画の南に集中しており、北は空閑地となっている(註2)。こうした状況は、区画Ｄ・Ｄ′の主屋北側にも認められるが、区画Ｃ・Ｃ′には広い空閑地はない。したがって、区画内部の建物構成やその規模、空閑地のあり方から、Ⅵ期の３区画のなかでの格式は、区画Ｃ・Ｃ′が最も高く、区画Ｄ・Ｄ′がこれに次ぐ。最も低い区画Ｅは区画や建物の規模が小さい反面、空閑地の割合は最も高い、という傾向が指摘できる。

【第Ⅶ期】

４区のＳＤ1275とＳＤ1288によって囲まれた区画（区画Ｆ）で、住宅地区では北西隅付近を検出したにすぎない。区画Ｆの南辺は流通地区で確認しており、範囲は南北60m、東西17m以上になる。今回は区画の一部の報告にとどまるため、内部施設のあり方は触れることができない。

屋敷跡の年代は、各遺構期に伴う遺物が少なく今後の検討課題である。現時点での見通しとしては、第Ⅳ期は区画溝跡から常滑編年（中野晴久：1994）５～６型式期の甕が出土していること、同時期の流通地区の屋敷跡から13世紀代のかわらけがある程度まとまって出土していることから、第Ⅳ期は13世紀を中心に考えられる。

第Ⅶ期は、区画溝跡から出土した瓦器擂鉢が下草古城跡と類似し、そこから出土する陶磁器の年代が16世紀中頃～17世紀初頭のものが主体を占める（須田良平：1992・1993）こと、また志野丸皿は瀬戸・美濃大窯編年（藤沢良祐：1997）の第９小期から第10小期頃と考えられることから、17世紀以降とみておきたい(註4)。第Ⅴ期や第Ⅵ期は年代を示す遺物がないため、その間という位置付けにとどまる。したがって、溝によって方形に区画された屋敷は、13世紀につくられたのち、中世をへて近世以降にいたるまで、遺跡内での場所を変えながら営まれたとの見通しが得られた。しかしながら、年代観の根拠は、出土量の少ない遺物から求めたものであり、今後は発掘調査や整理の過程をとおして、屋敷の営みが連続的なものであったのか、断絶期が存在しないのか、といった点を含め総合的に検討を加えていきたい。

(註1) 12世紀代のかわらけについては、平泉町文化財センターの八重樫忠郎氏や及川司氏、岩手県埋蔵文化財センターの羽柴直人氏からご教示いただいた。
(註2) 建物群●は、県教委分では数が少ないが、隣接する仙台市教委の調査区出は多くの柱穴が確認されている。したがって、この部分も他と同じように５棟以上の建物が重複するとみられる。
(註3) 屋敷内部の空閑地の利用としては、畑などが想定される。
(註4) 近世の焼物については、東北陶磁資料館の本田泰貴氏にご教示いただいた。

〈引用・参考文献〉（著者別、五十音順）

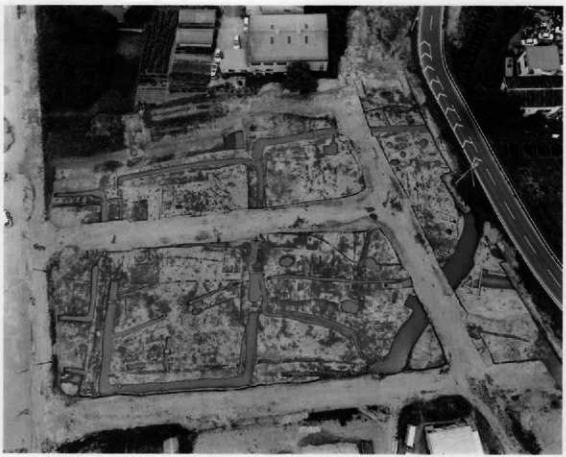
赤羽一郎・中野晴久（1994）「生産地における編年について」
『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
浅野晴樹（1991）「東国における中世在地系土器について－主に関東を中心にして－」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集
浅野晴樹（1994）「東国における常滑焼」「中世常滑焼をおって」資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
安倍辰夫・平川　南編（1989）『多賀城碑　その謎を解く』
飯村　均（1995）「陸奥南部の常滑系陶器の生産と技術」『常滑焼と中世社会』
飯村　均（1997）「中世食器の地域性－東北南部－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
飯村　均（1998）「東国のかわらけ」『中近世土器の基礎研究』XIII　日本中世土器研究会
石黒伸一朗（1988）「仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概説」『東光寺遺跡　第１・２次調査』
仙台市文化財調査報告書第112集
和泉匡剛（1991）「多賀城市内の供養碑」『多賀城市史４考古資料』
伊藤一義（2000）「鎌倉の御家人たち」『仙台市史　通史編２－古代中世－』仙台市史編さん委員会
入間田宣夫（1991）「陸奥府中ノート」『日本中世政治社会の研究』
入間田宣夫・大石直正編（1992）『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』
入間田宣夫・本澤慎輔編（2002）「平泉の世界」奥羽史研究叢書３
及川　司（1998）「岩手県における11～19世紀の土器け－かわらけを中心として－」
『東北地方の在地土器・陶磁器II』東北中世考古学会・福島県考古学会
宇野隆夫（1989）『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』
宇野隆夫（1997）「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
大石直正（1992）「みちのくの都の中世」『くらしを支える市場』
『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』
大石直正（1998）「仙台市の板碑」『仙台市史　特別編５－板碑－』仙台市史編さん委員会
大石直正（1999）「奥羽・関東のせめぎあい」『宮城県の歴史』
大石直正（2000）「深まる動乱」『仙台市史　通史編２－古代中世－』仙台市史編さん委員会
岡田清一（2000）「村と市と在家」『板碑のこころ』『仙台市史　通史編２－古代中世－』仙台市史編さん委員会
小川淳一・高橋綾子（2000）『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集
小野正敏編（2001）『図解・日本の中世遺跡』
桐山秀穂（1996）「日本における茶臼の研究」『古代学研究所研究紀要』第６輯　古代学協会
熊谷公男（2000）「公民と蝦夷」『仙台市史　通史編２－古代中世－』仙台市史編さん委員会
斎藤利男（1992）「多賀国府の都市プラン」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』
佐藤甲二（2000）『沼向遺跡第１～３次調査』仙台市文化財調査報告書第241集
佐藤則之ほか（1999）「発掘ダイジェスト－山王・市川橋遺跡－」宮城県教育委員会
佐藤　洋（1998）「宮城県における土師質土器の変遷」『東北地方の在地土器・陶磁器II』
東北中世考古学会・福島県考古学会
佐藤正人（1992）「東光寺墓所・町場の板碑」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』
白根靖大（2000）「荘園と公領」『仙台市史　通史編２－古代中世－』仙台市史編さん委員会
須田良平（1992）「下草古城跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書第146集
須田良平（1993）「下草古城跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書第154集
仙台市史編さん委員会編（1998）『仙台市史　特別編５－板碑－』
仙台市史編さん委員会編（2000）『仙台市史　通史編２－古代中世－』
高橋栄一（1995）「山王遺跡と周辺の遺跡」『山王遺跡II－多賀前地区遺構編－』宮城県文化財調査報告書第167集
高橋栄一・吉野　武（2001）「中野高柳遺跡」『木簡研究』第23号
高橋主次（2002）「瓦質土器」『河股城跡』川俣町文化財調査報告書第19集
高橋博志（2002）「陶器生産と陶磁器流通」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書４
田中則和（1992）「川沿いの屋敷群」丘の上の世界」『よみがえる中世７－みちのくの都　多賀城・松島－』

田中則和（1995）「仙台市域の中世城館・集落跡」『中世都市研究』第２号　中世都市研究会
田中則和（2000）「屋敷と路の跡から探る中世」『戦国期のまちとくらし』『仙台市史　通史編２－古代 中世－』
仙台市史編さん委員会
田中則和（2002）「陸奥国「国府域」の考古学的様相」『鎌倉・室町時代の奥州』奥羽史研究叢書4
千葉孝弥ほか（1990）「新田遺跡　第４・11次調査』多賀城市文化財調査報告書第23集
千葉孝弥（1992）「武士の屋敷の発見」『よみがえる中世７－みちのくの郡　多賀城・松島－』
千葉孝弥（1995）「多賀城から府中へ」『中世都市研究』第２号　中世都市研究会
千葉孝弥（1997）「考古学からみた中世の多賀城」『多賀城市史１－原始・古代・中世－』
千葉孝弥ほか（2001）「市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第60集
東北学院大学中世史研究会編（1994）「中世陸奥国府の研究」
東北中世考古学会編（1998）「東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ」
東北中世考古学会編（2001）「掘立と竪穴－中世遺構論の課題－」
中野晴久（1995a）「常滑・渥美」『戦国　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
中野晴久（1995b）「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』
永原慶二編（1995）『常滑焼と中世社会』
中山雅弘（1998）「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』第１号　東国土器研究会
根津美術館学芸部（1996）「甦る鎌倉－遺跡発掘の成果と伝世の名品－」
日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編（2000）「はたけの考古学」
服部敬史（1997）「中世食器の地域性－関東・甲信－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
服部敬史（1998）「土師器皿からみる中世後半期の東国」『橘崎彰一先生古希記念論文集』
平泉文化研究会編（1992）「奥州藤原氏と柳之御所跡」
平泉町文化財センター編（2000）「常設展示図録」柳之御所資料館
福島県考古学会中近世部会編（1996）「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その１）」『福島考古』第37号
福島県考古学会中近世部会編（1997）「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その２）」『福島考古』第38号
福島県考古学会中近世部会編（2000）「東北地方南部における中近世集落の諸問題－掘立柱建物跡を中心として－」
藤沢良祐（1997）「中・近世瀬戸焼の編年」『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅰ』東北中世考古学会
藤沼邦彦（1991）「東北地方出土の常滑焼・渥美焼について」『知多半島の歴史と現在』No.3
松本秀明（1994）「仙台平野の成り立ち」『仙台市史』特別編１－自然－　仙台市史編さん委員会
松本秀明（1995）「山王遺跡の位置と遺跡周辺の地形環境」『山王遺跡Ⅱ－多賀前地区遺構編－』
宮城県文化財調査報告書第167集
松本秀明（1997）「山王遺跡の地形学的背景」『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集
宮瀬交二（1994）「東国における常滑焼の流通と消費」
『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
村田晃一（2001）「中野高柳遺跡」『平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』宮城県考古学会
村田晃一・茂木好光（2002）「中野高柳遺跡」『平成14年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』宮城県考古学会
村田晃一・吉野　武（2002）「中野高柳遺跡」『木簡研究』第24号
茂木好光・岩見和泰（2001）「一本柳遺跡Ⅱ」宮城県文化財調査報告書第185集
八重樫忠郎（1994a）「常滑・渥美窯産壺の12世紀後半における変化－国産陶器一括廃棄事例から－」
『岩手考古学』第６号
八重樫忠郎（1994b）「奥州平泉遺跡群にみる常滑焼」
『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
八重樫忠郎（2001b）「東北における中世初期陶磁器の分布」
「都市・平泉－成立とその構成－」日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
八重樫忠郎（2002）「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』奥羽史研究叢書３
柳原敏昭・飯村　均編（2002）「鎌倉・室町時代の奥州」奥羽史研究叢書４
山田晃弘・伊藤　裕（1998）「一本柳遺跡Ⅰ」宮城県文化財調査報告書第178集
山本信夫（2000）「大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－」太宰府市の文化財第49集
四柳嘉章（1995b）「漆器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
四柳嘉章（1997）「北陸の中世漆器」「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」北陸中世土器研究会

写真図版

上段　遺跡空中写真（南東から　平成13年度調査　右手奥の丘陵が岩切城跡）
下段　遺跡空中写真（北から　平成13年度調査　左手奥に七北田川の河口がみえる）

図版1

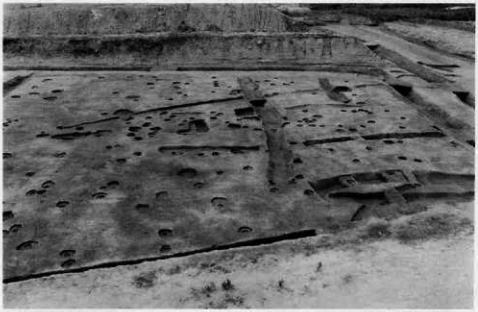


上段　2・3・4区全景（北から）
下段　2・3・4区全景（真上から　左が北）

図版2

上段　1区東部の遺構（真上から　中央は区画C）
下段　1区東部の遺構（南から）

図版 3



1区東部の遺構
(南から)

区画C南東部
(東から
中央右がSD1105)

SD1101区画溝跡
(南から　壁の白い部
分は灰白色火山灰)

図版4

2区　SD1105区画溝跡東辺断面（南から）

2区　SD1105区画溝跡西辺断面（南から）

2区　SD1129区画溝跡断面（西から）

1区　SD1101区画溝跡断面（南から）

1区　SD1102区画溝跡断面（東から）

1区　SD1106区画溝跡断面（南から）

2区　SE1136井戸跡断面（南から）

3区　SK1135土壙断面（東から）

図版5

上段　2区　区画D全景（南から）
下段　2区・3区　区画D・E全景（真上から　上が南）

図版6

区画D・D′全景
（南から　奥が主屋
左手前が副屋）

区画D・D′
主屋と副屋
（東から）

区画D・D′主屋
（南から　SB1361
～1366建物跡）

図版7

SB1363建物跡柱穴断面（S1・E3）

SB1363建物跡柱穴断面（N1・W3）

SB1365建物跡柱穴断面（N2・E2）

SB1365建物跡柱穴断面（N1・E1）

SB1366建物跡柱穴断面（N2・W3）

SB1357建物跡柱穴断面（N1・E2）

SB1358建物跡柱穴断面（S1・W1）

SB1359建物跡柱穴断面（S1・W1）

図版8

SX1216土壙墓
（南から）

SE1215井戸跡断面
（北から）

SE1220井戸跡
（西から）

図版9

上段　2～4区　区画B全景（北から）
下段　3区　区画Eと区画B北東部（南から）

図版10

2区　区画B北西部
と区画D（南から）

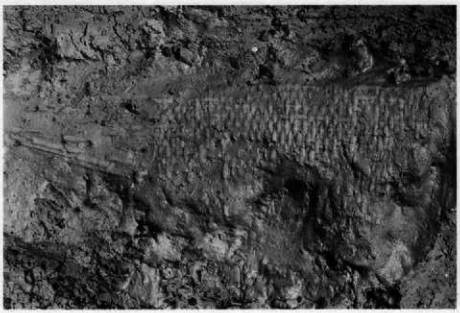
SK1235土壙（東から）

SX1260遺構全景
（北から　えはSD1248）

図版11

SX1260遺構断面
（北から）

SX1260祈祭出土状況



SX1260釜出土状況

図版12

1区　SF1303畑
耕作痕確認状況
（南西から）

1区　SF1303畑
耕作痕完掘後（西から）

2区　SF1303畑
耕作痕完掘後（北から）

図版13

4区　ＳＦ1334畑耕作痕（東から）

ＳＤ1050区画溝跡断面（南から）

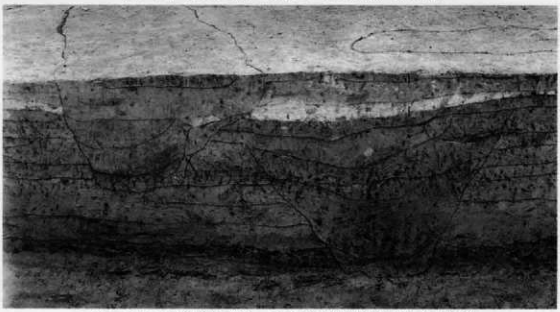
ＳＸ1154断面（西から）

ＳＤ1257区画溝跡断面（南から）

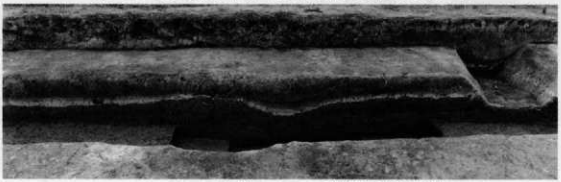
ＳＤ1256区画溝跡断面（西から）

図版14

1区　SF1199水田跡、SD1155・1156水路跡（南から）

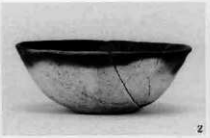


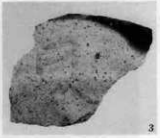
1区　SD1150区画溝跡（左）、SD1155水路跡（右）断面（南から）

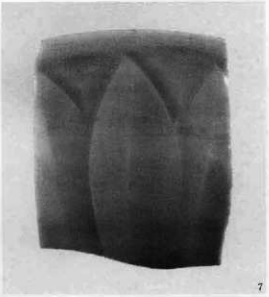


1区　SF1199水田跡、SD1156水路跡断面（東から）

図版15







1（第13図4）
2（第13図1）
3（第8図）
4（第13図7）
5（第13図6）
6（第24図1）
7（第26図1）
8（第24図2）
縮尺1～5：1/3、6・7：1/1、8：1/2

図版16　出土遺物（1）

1

2a

2b

3

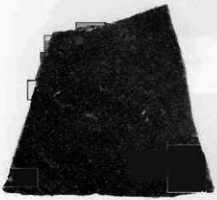
4

5

6

7

8


9

10

11

12

15a

15b

13

16

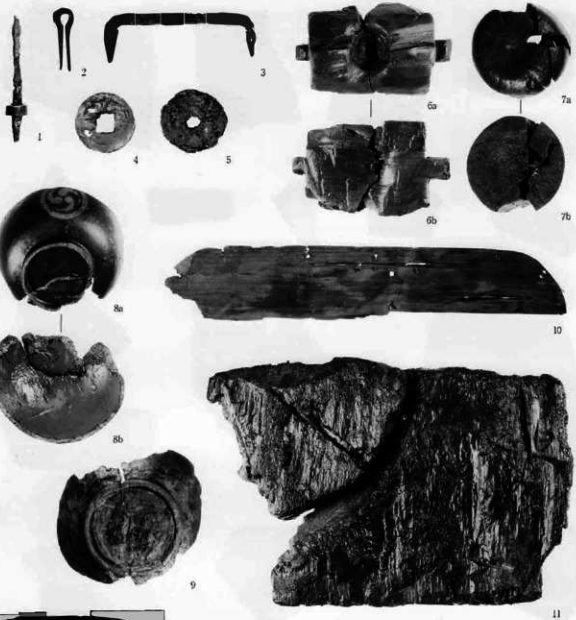
17

14

1（第18図1）
2（第48図1）
3（第24図4）
4（第18図4）
5（第18図3）
6（第16図1）
7（第18図2）
8（第24図3）
9（第21図1）
10（第26図5）
11（第16図2）
12（第16図3）
13（第26図7）
14（第26図6）
15（第44図1）
16（第26図4）
17
縮尺1～8・13～15：1/3、
9～12・16・17：1/2

出土遺物（2）

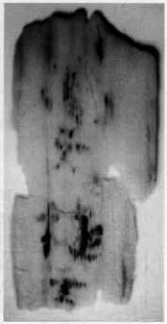
図版17



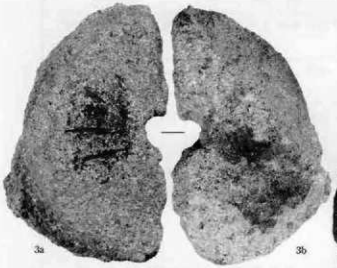
1 （第24図 7）
2 （第48図 5）
3 （第48図 4）
4
5
6 （第44図 4）
7 （第24図 8）
8 （第48図 2）
9 （第57図 1）
10 （第57図 3）
11 （第43図 3）
12 （第48図 6）
13 （第44図 6）
14 （第24図 9）
15 （第48図 3）
16 （第21図 2）
縮尺 1～3・6～16：1/3、
4・5：2/3

図版18　出土遺物（3）

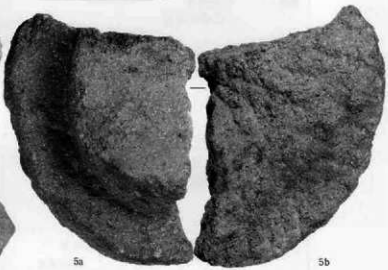
2a



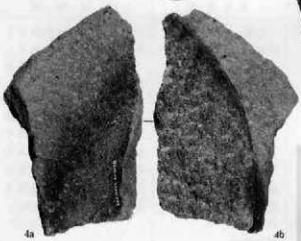
2b 赤外線写真



3a 3b



5a 5b



4a 4b

6

1（第44図9）
2（第18図5）
3（第48図7）
4（第48図8）
5（第24図13）
6（第44図9）
縮尺1・3～6：1/3、2a：1/1、
2b：3/2

出土遺物（4）　図版19

報告書抄録

ふりがな	なかのたかやなぎいせき
書名	中野高柳遺跡Ⅰ
副書名	宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅰ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第194集
編著者名	村田晃一
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町３－８－１　TEL 022-211-3685
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
中野高柳 遺跡	宮城県 仙台市 中野字高柳	04100	01146	38度 16分 11秒	140度 58分 55秒	１次調査 20000703 ～0929 ２次調査 20010409 ～1106	約3,260 約6,400 (道路地区を含む)	土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野高柳 遺跡	畑跡 水田跡	平安時代	畑跡 水田跡 区画溝跡 河川跡	土師器 須恵器	南北に延びる自然堤防を畑、後背湿地を水田として利用しており、それぞれ溝で区画されている。
	集落跡	鎌倉～江戸時代	屋敷跡 区画溝跡 掘立柱建物跡 井戸跡 墓跡 土壙 溝跡	かわらけ 中世陶器 青磁・白磁 木製品 漆製品 金属製品 石製品 動物遺体 植物遺体	屋敷跡は大別４期の変遷がある。第Ⅳ・Ⅴ期はそれぞれ一つの区画とみられるが、第Ⅵ期は複数の区画からなる。在地領主の屋敷跡と考えられる。

宮城県文化財調査報告書第194集

中野高柳遺跡 I

－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書 I －

平成15年３月25印刷
平成15年３月31発行

発行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市宮城区立町24－24